ヤンボシ塚古墳・楢崎古墳

宇土半島基部古墳群分布調査報告（V）

宇土市埋蔵文化財調査報告書第13集

1986

熊本県宇土市教育委員会

ヤンボシ塚古墳・楢崎古墳

宇土半島基部古墳群分布調査報告（V）

宇土市埋蔵文化財調査報告書第13集

1986

熊本県宇土市教育委員会

序

宇土市内を中心として、不知火町・松橋町にかけて分布する古墳群は宇土半島基部古墳群と呼ばれています。それは、熊本県内だけでなく九州においても有力な古墳の集中しているところの一つに挙げられる著名なものです。

今年度の分布調査事業は、県指定史跡楢崎古墳確認調査と立岡地区分布調査を実施し、本報告書においてはその調査成果と、昨年度末に急遽、調査を実施したヤンボシ塚古墳調査の成果についても併せて収録しました。

ヤンボシ塚古墳は今回の調査によって貴重な装飾古墳であることが判明しましたし、さいわい、地権者の方の御理解によって古墳は保存されることになりましたので、将来は県の史跡指定をお願いして復元・整備を実施できればと考えております。

楢崎古墳は来年度から3ヶ年の予定で石棺の修復とその保存施設を計画し、それに先だつ確認調査を実施しましたが、調査途上において、地権者であるひのくにランド株式会社より古墳部分の土地を寄付したい旨の申し入れがあり、文化財に対する深い理解を示されました。

これら2古墳の調査と調査後の保存措置にみられますように、5ヶ年目を迎えた本事業が着実に実を結びつつあるといえますし、今後の当市の文化財行政を進める上での明るい見通しを示すものといえましょう。

調査の実施にあたっては地権者の方々をはじめとして、調査指導の生先方・地元各位・文化庁・熊本県教育委員会その他多くの方々の御協力を得ることができました。衷心より御礼申しあげる次第です。

昭和61年3月

宇土市教育委員会

教育長　船田　至

例　　言

1．本書は、昭和56年度から国庫・県費補助を得て継続して実施している宇土半島基部古墳群分布調査事業報告書の５冊目にあたる。

2．本書には、昭和59年度で未報告であったヤンボシ塚古墳確認調査と、昭和60年度に実施した楢崎（トゥザキ）古墳確認調査・立岡地区分布調査についての成果を収録した。

3．調査は宇土市教育委員会が、多くの方々の指導・協力を得て実施したものであるが、その組織と芳名については第１章第１節３と第２章第１節３に別記した。

4．実測図で用いたレベルは海抜標高である。

5．遺構・遺物の実測・製図・写真撮影は、主に高木恭二・木下洋介があたったが、ヤンボシ塚古墳の遺構については調査参加者全員によるものである。

6．ヤンボシ塚古墳赤色顔料の分析結果についての玉稿を熊本大学理学部水田敏夫先生からいただくことができ、本書第５章に付論として掲載した。御多忙のなか執筆いただいた水田先生に謝意を表したい。

7．本書の執筆・編集は高木・木下があたり、元松茂樹も一部分担した。

8．出土遺物、その他関係資料については宇土市教育委員会が保管している。

本 文 目 次

第1章　ヤンボシ塚古墳
第1節　序説 …… 1
1　はじめに …… 1
2　調査の経過 …… 2
3　調査の組織 …… 3
第2節　立地と環境 …… 4
第3節　調査の記録 …… 12
1　墳丘 …… 12
2　石室 …… 16
3　装飾文様 …… 23
4　出土遺物 …… 29
第4節　小結 …… 31
第2章　楢崎古墳
第1節　序説 …… 37
1　はじめに …… 37
2　調査の経過 …… 38
3　調査の組織 …… 39
第2節　立地と環境 …… 40
第3節　調査の記録 …… 42
1　墳丘 …… 42
2　石棺・土壙墓 …… 47
3　出土遺物 …… 65
第4節　小結 …… 66
第3章　分布調査
第1節　序説 …… 75
第2節　分布調査の記録 …… 75
第3節　小結 …… 78
第4章　総　括 …… 80
付　論　X線粉末回折法による顔料等の分析 …… 87

挿　図　目　次

第1図　ヤンボシ塚古墳周辺古墳分布図 … 5
第2図　宇土半島基部古墳分布図 …… 6
第3図　網田平野地形図 …… 11
第4図　ヤンボシ塚古墳付近字図 …… 12
第5図　ヤンボシ塚古墳地形測量図 …… 13
第6図　ヤンボシ塚古墳周溝断面図 …… 14
第7図　ヤンボシ塚古墳墳丘断面図 …… 15
第8図　ヤンボシ塚古墳羨道部閉塞状況 … 17
第9図　ヤンボシ塚古墳石室実測図 …… 19
第10図　ヤンボシ塚古墳石室復原図 …… 22
第11図　ヤンボシ塚古墳石障拓影 …… 25
第12図　ヤンボシ塚古墳線刻〈船1〉拓影　26
第13図　ヤンボシ塚古墳線刻〈船2〉拓影　27
第14図　ヤンボシ塚古墳線刻実測図 …… 28
第15図　ヤンボシ塚古墳出土土器実測図 … 29
第16図　ヤンボシ塚古墳出土鉄器実測図 … 30
第17図　千足古墳石室実測図 …… 31
第18図　千足古墳玄門部〈石室内から〉 … 32
第19図　楢崎古墳周辺古墳分布図 …… 40
第20図　楢崎古墳地形測量図 …… 43
第21図　楢崎古墳旧地形測量図 …… 44
第22図　楢崎古墳土層断面図 …… 45
第23図　楢崎古墳付近旧字図 …… 47
第24図　楢崎古墳石棺・土壙配置図 …… 48
第25図　楢崎古墳1号棺実測図 …… 50
第26図　楢崎古墳1号棺棺内〈大正10年〉　51
第27図　楢崎古墳1号棺工具痕拓影 …… 52
第28図　楢崎古墳2号棺実測図 …… 54
第29図　楢崎古墳2号棺工具痕拓影 …… 56
第30図　楢崎古墳3号棺実測図 …… 58
第31図　楢崎古墳3号棺棺身工具痕拓影 … 59
第32図　楢崎古墳3号棺棺蓋工具痕拓影 … 60
第33図　楢崎古墳4号棺実測図 …… 61
第34図　楢崎古墳4号棺工具痕拓影 …… 62
第35図　楢崎古墳5号棺実測図 …… 64
第36図　楢崎古墳5号棺工具痕拓影 …… 64
第37図　楢崎古墳出土鉄鏃実測図 …… 65
第38図　楢崎古墳石材加工痕拓影集成 …… 73
第39図　花園・立岡地区地形図 …… 76
第40図　分布調査地区採集遺物実測図 …… 77
第41図　熊本県内石障系横穴式石室分布図　81
第42図　X線粉末法による回折パターン … 89

図　版　目　次

図版1　ヤンボシ塚古墳周辺空中写真
図版2一上　ヤンボシ塚古墳遠景〈北から〉
　　下　ヤンボシ塚古墳遠景〈南から〉
図版3一上　ヤンボシ塚古墳墳丘〈北東から〉
　　下　ヤンボシ塚古墳墳丘〈南から〉
図版4一右　ヤンボシ塚古墳周溝
　　左　ヤンボシ塚古墳周溝
図版5一上　ヤンボシ塚古墳周溝土層
　　下　ヤンボシ塚古墳周溝
図版6　ヤンボシ塚古墳石室
図版7　ヤンボシ塚古墳石室
図版8　ヤンボシ塚古墳閉塞状況〈封鎖石〉
図版9　ヤンボシ塚古墳封鎖石除去後
図版10　ヤンボシ塚古墳羨道部〈扉石〉
図版11　ヤンボシ塚古墳羨道部左壁
図版12　ヤンボシ塚古墳羨道部右壁
図版13　ヤンボシ塚古墳玄門部
図版14　ヤンボシ塚古墳玄門
図版15　ヤンボシ塚古墳石室奥壁
図版16一右　ヤンボシ塚古墳前障左側

左　ヤンボシ塚古墳前障右側
図版17—右　ヤンボシ塚古墳奥壁右側
左　ヤンボシ塚古墳奥壁左側
図版18—上　ヤンボシ塚古墳奥障痕跡右側
下　ヤンボシ塚古墳奥障痕跡左側
図版19　ヤンボシ塚古墳石室左側壁
図版20　ヤンボシ塚古墳石室左側壁
図版21—上　ヤンボシ塚古墳石室右側壁
下　ヤンボシ塚古墳石室床面
図版22　ヤンボシ塚古墳石室仕切石痕跡
図版23—上　ヤンボシ塚古墳石室仕切石と礫
下　ヤンボシ塚古墳遺物出土状態
図版24　ヤンボシ塚古墳左障の円文
図版25—上　ヤンボシ塚古墳左障左側円文
下　ヤンボシ塚古墳左障右側円文
図版26　ヤンボシ塚古墳左袖石の線刻船1
図版27　ヤンボシ塚古墳左側壁の線刻船2
図版28　ヤンボシ塚古墳左側壁の矩形線刻
図版29　ヤンボシ塚古墳出土遺物
図版30　檜崎古墳周辺空中写真
図版31—上　檜崎古墳遠景〈南東から〉
下　檜崎古墳近景〈北西から〉
図版32—上　檜崎古墳後円部東側
下　檜崎古墳後円部東側トレンチ
図版33—上　檜崎古墳後円部西側トレンチ
下　檜崎古墳後円部西側トレンチ
図版34—上　檜崎古墳前方部トレンチ
下　檜崎古墳前方部トレンチ
図版35—上　檜崎古墳東側くびれ部
下　檜崎古墳東側くびれ部トレンチ
図版36—上　檜崎古墳西側くびれ部
下　檜崎古墳西側くびれ部トレンチ
図版37—上　檜崎古墳西側くびれ部
下　檜崎古墳西側くびれ部トレンチ
図版38—上　檜崎古墳西側くびれ部トレンチ
下　檜崎古墳西側くびれ部トレンチ
図版39　檜崎古墳1～4号棺〈南から〉
図版40　檜崎古墳1～4号棺〈北から〉
図版41　檜崎古墳1～4号棺〈北西から〉
図版42—右　檜崎古墳1号棺〈西から〉
左　檜崎古墳1号棺棺蓋
図版43—上　檜崎古墳1号棺棺蓋
下　檜崎古墳1号棺棺蓋
図版44—右　檜崎古墳1号棺〈東から〉
左上　檜崎古墳1号棺遺物出土状態
左下　檜崎古墳1号棺遺物出土状態
図版45—右　檜崎古墳2号棺〈西から〉
左　檜崎古墳2号棺〈東から〉
図版46—上　檜崎古墳2号棺〈北から〉
下　檜崎古墳2号棺〈南から〉
図版47—上　檜崎古墳2号棺〈南東から〉
中　檜崎古墳2号棺棺蓋〈東から〉
下　檜崎古墳2号棺棺身〈東から〉
図版48—右　檜崎古墳3号棺〈東から〉
左　檜崎古墳3号棺〈東から〉
図版49—上　檜崎古墳3号棺棺蓋
下　檜崎古墳3号棺棺蓋
図版50—上　檜崎古墳3号棺棺蓋
下　檜崎古墳3号棺棺蓋
図版51—右　檜崎古墳4号棺〈西から〉
左　檜崎古墳4号棺棺蓋
図版52—上　檜崎古墳5号棺〈北から〉
下　檜崎古墳5号棺〈南から〉
図版53　檜崎古墳石棺工具痕
図版54—上　山下古墳遠景
下　山下古墳近景
図版55　檜崎古墳出土・周辺採集遺物

表　目　次

第1表　宇土半島基部古墳時代遺跡一覧表
第2表　楢崎古墳棺材形成時期一覧表
第3表　楢崎古墳埋葬施設一覧表
第4表　刀掛状突起を有する古墳一覧表
第5表　楢崎古墳埋葬施設工具痕一覧表
第6表　X線粉末法による顔料の分析結果

第1章　ヤンボシ塚古墳

第1節　序説

1．はじめに

上網田町字小宗にあるヤンボシ塚が古墳であろうと確認されたのは昭和51年のことである。当時、熊本県教育委員会において県下の中世城跡総合調査が行なわれ、当地の田平城跡調査を担当された県文化課の大田幸博技師が、地元の上網田町田平在住の村崎ミスエ氏の案内でそれが古墳であることを明らかにされたのである。しかしその当時は竹木がうっそうと生い茂り古墳域内に立ち入り、詳細な調査を行なうことはかなり困難を極め、その内容を明らかにするまでには至らなかったが、円墳であることを明らかにされている[1]。

昭和53年12月から行なわれた城2号墳発掘調査の折にも、その調査団員数名がヤンボシ塚の踏査を行なったのであるが、同様な条件にあって円墳であろうと推測する以上には進展をみなかった[2]。

昭和60年1月末、ヤンボシ塚古墳周辺が伐採されており、近いうちに開墾されるらしいという通報をうけて、市教育委員会で現地を訪れた。古墳を含めた一帯の伐採が完了しており、直径15m前後の円墳であることが一目瞭然で、天井石らしい大石も残っている。浜口俊夫氏と共に地権者藪田氏を訪ね、話をうかがってみると、3月はじめ頃にブルドーザーで地ならしをして温州蜜柑の植えつけを予定しているとのことであった。

交渉の結果、古墳であるかどうか明確な証拠がでてきたり、保存に価するようなものであれば古墳の破壊、開墾は考え直してもいいということであった。そこで、事業費の追加を得て、当分布調査事業のなかでの確認調査として2月に調査を実施することになった。

調査の経過については次項に詳しいのでそれによることにするが、調査に着手した2月12日に横穴式石室であることが明らかとなり、しかも翌日には装飾を確認できるなど、予想外の成果もあって新聞にも大きく取りあげられ、地元の方々をはじめ、小学生・研究者の見学が相次いだ。地主藪田氏も何度か現場作業を見学され、次第に保存の意向を示されるようになり、最終的には古墳部分を除外して開墾をすることに決定された。

調査の実施にあたっては多くの方々の参加と協力を得ることができ、それは調査の組織に記すとおりである。ところが調査終了から1ヶ月ほど過ぎた昭和60年4月13日、調査に自主的に参加された河北毅氏（熊本県教育委員会文化課嘱託）が急性心不全により急逝された。享年27歳の若さであり、将来を嘱望されていただけに返す返すも惜しまれる。心から哀悼の意を表す

る次第である。(高木)

註 (1) 大田幸博「宇土周辺の中世城跡について」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第1集、1977年、宇土。

(2) 三島格・他「城二号墳」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第3集、1981年、宇土。

2．調査の経過

ヤンボシ塚古墳の発掘調査は、昭和60年2月12日に開始、3月8日に終了。その間約1ヶ月、実質20日を費した。

2月12日　発掘作業に先き立って調査の安全を祈願し、早々に作業に取りかかる。古墳の主体部は、横穴式石室であることを確認し、当初から墳丘頂部に露出していた石材がまぐさ石であることが判る。

2月13日　石室内に落ち込んだ板状の石材を取り除く段階で左壁最上段の積み石に船の線刻を発見。午後には、凝灰岩の石障を検出、内部主体が肥後型の横穴式石室であることが判明。石障に、径約13cmの円文が2ヶ所にほられているのを確認した。

2月14日　新たに左袖石に船の線刻を発見。四壁の石障のうち、前障は完全な形で、左障も復元できる範囲で遺っていたが、奥障・右障・仕切石は完全に抜き取られ、盗掘されていることが判る。

2月15日　床面の一部に礫を確認。奥障の左障側石材抜き取り痕から、鏃先と刀子が出土した。石室内唯一の出土遺物である。

2月16日　石室内の写真撮影を行う。午後から、熊本県教育委員会文化課の若手有志の協力で、床面中央に仕切石抜き取り痕を検出。墳丘の平板測量を開始する。

2月17日　前日同様、県文化課の協力がある。石室の実測を始める。

2月18日　石室及び墳丘の実測を行う（～24日）。

2月26日　墳丘規模確認のため、墳丘北東側と石室前庭部側にトレンチを設定し発掘を開始する。石室については、羨道部閉塞封鎖石を取り除く。

2月27日　調査は、前日の作業を引き続き行う。朝からの雨のため、調査員一同ずぶ濡れになる。

3月1日　周溝の発掘と羨道部の調査を行う。周溝底からは、土師器が出土する（～4日）。

3月5日　羨道部・周溝の実測を行う。並行して、玄室の埋め戻しも行う。実測・測量等の作業が完了する（～6日）。

3月7日　玄室内から出た土の水洗を始める。

3月8日　水洗の続きを行う。午後、現場での作業が無事終了する。

調査期間中は、地権者の方々をはじめ、春先の雨のなかで黙々と作業を続けられた熊本商科大学文化財研究会のメンバー、水洗作業のために、水の提供を受けた地元地区民の方々など、各方面の方々のお世話になった。

調査については、熊本県教育委員会・熊本県文化財保護審議委員・肥後考古学会会長・宇土市文化財保護審議委員の先生方の指導・協力を受けた。

また、調査協力者の一人であった河北毅氏（当時熊本県教育委員会文化課嘱託）が本古墳調査に参加してから約2ヶ月後の4月13日に27歳の若さで他界された。ご冥福をお祈りします。

（木下）

3．調査の組織　（敬称略）

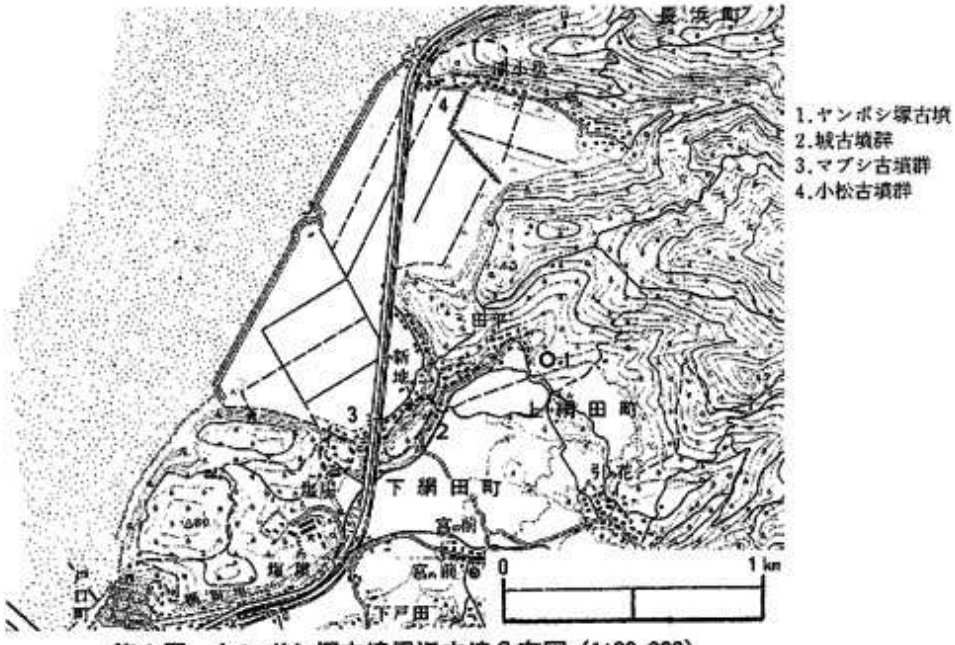
調査主体	宇土市教育委員会	
	教育長	船田　至
調査総括	社会教育課長	本郷裕幸
	文化振興係長	一　宗雄
調査庶務	参事	中野照子
調査担当	主事	高木恭二
	主事	木下洋介
調査補助	古城史雄・元松茂樹・谷口茂・前田哲男・福田博之・甲斐俊吾・沢宮優・田中耕二	
調査指導	原口長之	（熊本県文化財保護審議委員・山鹿市立博物館長）
	白木原和美	（　　〃　　・熊本大学文学部教授）
	三島　格	（肥後考古学会々長）
	松本繕郎	（熊本大学理学部教授）
	実政　勲	（　　〃　　助教授）
	水田敏夫	（　　〃　　助　手）
	甲元眞之	（熊本大学文学部助教授）
	平野三代喜	（宇土市文化財保護審議委員）
	井上　正	（　　〃　　）
	富樫卯三郎	（　　〃　　）
	村田房夫	（　　〃　　）
	吉沢政夫	（　　〃　　）

調査協力　藪田識蔵・浜口俊夫・宮本敏治・秋吉順一・坂木　近・村崎ミスエ
村井真輝・島津義昭・松本健郎・高木正文・野田拓治・古森政次・浦田信智
河北　毅・坂田和弘・渡辺正一・松原明美・山城敏昭・鶴田倉造
矢野和之・柳沢一男・板楠和子・青木勝士
城南町歴史民俗資料館・三角町教育委員会
河本清・高畑知功（岡山県古代吉備文化財センター）
出宮徳尚（岡山市教育委員会）・熊本日日新聞社・熊本県民テレビ
宇土市役所企画課・網田小学校・川口登建設
遺物整理　木下俊恵・川西賀世子
遺物処理　元興寺文化財研究所　（木下）

第2節　立地と環境

ヤンボシ塚古墳は、宇土半島中央部北岸の宇土市上網田町字小宗2960番に所在する。そもそも宇土半島は、主峰大岳（標高478m）から続く丘陵が四方に延び海岸線まで迫っている為に、大規模な平野部はもっていない。それが、北岸に至ってはもっと端的で、平野部と言えるのは網田平野しかない。その網田平野は、網田川の氾濫作用によって形成された扇状地であり、有明海に面している網田川河口域を除く三方を、大岳及び大岳から派生した丘陵とによって囲まれ、盆地状をなしている。ヤンボシ塚古墳は、その網田平野西側の網田平野を一望することのできる見晴らしのいい丘陵上（標高約15m）に位置している。

古墳時代の宇土半島は、基部に12基もの前方後円墳が築かれる。時期的には、前期から後期までのほぼ全時期を通じており、かなりの勢力をもち、長い間にわたって基部周辺地域を支配していたものと考えられる。その頃の網田平野では、円墳・石棺等を中心に、古墳群が3群に分れて築かれている。第1群は、塩屋丘陵上にあるマブシ古墳群と、現在は分断された形になってはいるが、本来は同一丘陵であったと見られる北東側にある田平丘陵上の城古墳群である。マブシ古墳群[1]は、箱式石棺数基と石棺系石室等から成り、鉄鏃4本が出土している。城古墳群は、円墳2基と箱式石棺数基から成っており、そのうちの城1号墳[2]は、直径約25m（推定）の円墳で、主体部は、石障系の横穴式石室である。城2号墳[3]は、直径20～25mの円墳で、竪穴系横口式石室を主体部にもち、遺物としては、琴柱型石製品や鉄鏃などが出土している。第2群は、城古墳群から北東へ500m程離れた丘陵上にあり、今回調査されたヤンボシ塚古墳を中心とする高丸古墳群である。ヤンボシ塚周辺には、未調査ながら石棺の残骸や、石室の石材らしきものが散在しているので、もともとは数基で群をなしていたと考えるべきであろう[4]。ヤンボシ塚古墳の詳細は、当報告書に記載されているが、城1号墳の石室に類似した肥後型の横穴式石



第1図　ヤンボシ塚古墳周辺古墳分布図（1:30,000）

室をもつ直径20mの円墳である。第3群は、網田平野に直接面しているわけではないが、江戸末期の干拓によってできた浦新地北側の丘陵上にある小松古墳群である。このうちの小松古墳（小松1号墳[5]）は、割石を小口積みした矩形の竪穴式石室（？）であり、2号墳は、箱式石棺の上に割石を小口積みしたような、石棺系石室2基が並列している[6]。また付近には石棺が数基確認されている。以上、網田平野の古墳の概略を述べてみたが、半島基部の古墳とは明らかな差異を示しており、両者の間にどのようなつながりがあったのか興味が深い。　（元松）

註　(1)　富樫卯三郎・卯野木盈二「宇土市下網田町マブシ出土の石棺」『宇土半島自然と文化』1975年、宇土。

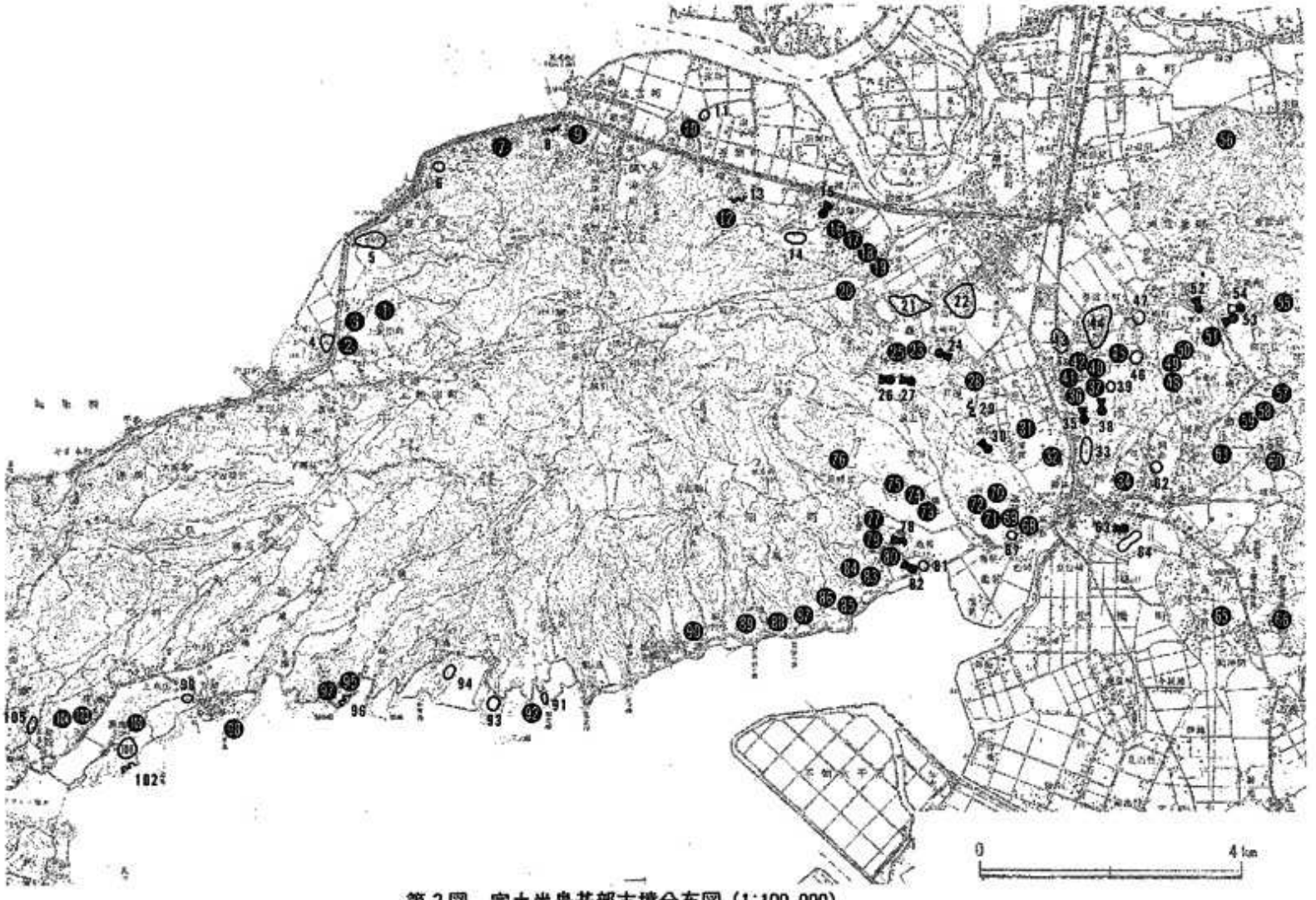
(2)　富樫卯三郎「城1号墳の発掘概要」『城二号墳』1981年、宇土。

(3)　三島格・他『城二号墳』1981年、宇土。

(4)　浜口俊夫氏や地元の方々の御教示によると、ヤンボシ塚古墳の北東約30mのところにある石積みは古墳であるといい、更にその20～30m北東側付近と、約50m東側からも石棺が検出されたことがあるという。

(5)　富樫卯三郎「小松古墳」『宇土市の文化財』第3集　1977年、宇土。

(6)　富樫卯三郎「考古ノート―宇土市長浜町井崎～同町小松―」『宇土市史研究』第5号　1984年、宇土。



第２図　宇土半島基部古墳分布図（1:100,000）

第1表　宇土半島基部古墳時代遺跡一覧表

No	遺跡名	概要	文献	No	遺跡名	概要	文献
1	ヤンボシ塚古墳	円墳・横穴式石室（装飾）	①	31	鬼塚古墳	円墳・横穴式石室	⑲
2	城1号墳	横穴式石室	②	32	柏原古墳	円墳	⑲
3	城2号墳	竪穴系横口式石室	③	33	御領東原古墳群	横穴式石室3基	⑲
4	マブシ古墳群	箱式石棺	④	34	宇賀岳古墳	横穴式石室（装飾）	⑳
5	小松古墳群		⑤	35	向野田古墳	前方後円墳・竪穴式石室（埴輪）	㉑
6	長浜箱式石棺群			36	向野田石蓋土壙	石蓋土壙	㉑
7	小池平古墳	横穴式石室		37	御手水2号墳	円墳	
8	小部田横穴群	12基	⑥	38	御手水古墳	前方後円墳	
9	御殿山古墳	横穴式石室		39	南山内箱式石棺群	3基	㉒
10	梅崎古墳	横穴式石室（装飾）	⑦	40	南山内古墳	円墳	
11	梅崎箱式石棺群			41	チャン山（茶臼山）古墳	円墳・竪穴式石室	㉓
12	城塚古墳	横穴式石室		42	舟底古墳	横穴式石室	
13	尾ノ上横穴群	14基	⑧	43	畑中遺跡	包蔵地	
14	神ノ木山古墳群	4基・横穴式石室	⑨	44	境目遺跡	包蔵地	㉔
15	天神山古墳	前方後円墳	⑩	45	上松山石棺	箱式石棺	
16	鎧塚古墳	横穴式石室		46	神ノ山古墳群	円墳3基・家形石棺	㉕
17	東畑古墳	横穴式石室（装飾）	⑪	47	古保里石棺群	箱式石棺5基	㉖
18	金嶽山古墳	横穴式石室		48	西潤野古墳	石蓋土壙（家形）	㉗
19	椿原石蓋土壙	石蓋土壙	⑫	49	潤野古墳	円墳・家形石棺	㉘
20	仮又古墳	横穴式石室（装飾）	⑬	50	晩免古墳	円墳・家形石棺	㉘
21	西岡台遺跡	V字溝・箱式石棺	⑭	51	山下古墳	円墳（埴輪）	①
22	宇土城遺跡	包蔵地		52	橋崎古墳	前方後円墳？・舟形石棺・家形石棺他	①
23	猫城古墳	円墳		53	女夫塚古墳（男塚）	前方後円墳	㉙
24	城ノ越古墳	前方後円墳	⑮	54	女夫塚古墳（女塚）	前方後円墳？	㉚
25	神合古墳	円墳（埴輪）		55	三日鬼の岩屋古墳	横穴式石室	
26	スリバチ山古墳	前方後円墳（埴輪）	⑯	56	神ノ上古墳	円墳・横穴式石室	
27	迫ノ上古墳	前方後円墳・竪穴式石室	⑰	57	池尾古墳		㉛
28	久保古墳	円墳		58	畑中古墳		
29	大平横穴群	2基	⑱	59	焼窯田窯跡	須恵器窯跡	㉛
30	仁王塚古墳	前方後円墳	⑲	60	当尾小学校東窯跡	須恵器窯跡	㉜

No.	遺跡名	概要	文献	No.	遺跡名	概要	文献
61	ガローバル古墳	円墳		91	大見観音崎石棺群	箱式石棺	㊶
62	上ノ原遺跡	包蔵地		92	大串古墳	横穴式石室	㊶
63	松橋大塚古墳	前方後円墳（埴輪）		93	要古墳群	箱式石棺5基	㊶
64	前田遺跡	朝顔形埴輪	㉝	94	手場古墳群	3基	㊷
65	狐塚古墳		㉛	95	底江崎古墳		㊷
66	豊福古墳	横穴式石室		96	御船横穴群	横穴6基	㊷
67	十五社石棺群	箱式石棺3基		97	御船石棺群	2基	㊷
68	塚原平古墳	円墳（埴輪）		98	児島崎古墳（首塚）	横穴式石室	㊸
69	大迫2号墳	横穴式石室	⑲	99	打越中原遺跡		
70	大迫1号墳	横穴式石室	⑲	100	竹和田古墳	円墳	㊸
71	塚原栗崎2号墳	横穴式石室	⑲	101	西木の浦古墳群	10基	㊸
72	塚原栗崎1号墳	横穴式石室（装飾）	㉞	102	西木の浦横穴群	4基	
73	鶴籠2号墳	横穴式石室（埴輪）	⑲	103	小鹿里古墳（御塚）	横穴式石室	㊸
74	鶴籠古墳	円墳・家形石棺（直弧文）	㉟	104	大鹿里古墳（鬼塚）	円墳	㊸
75	朱斗窯跡	須恵器窯跡	㊱	105	金桁古墳群	円墳・箱式石棺	㊹
76	元米の山窯跡	須恵器窯跡	㊲	106	鬼塚古墳		
77	八久保古墳	円墳・箱式石棺	⑲				
78	園越古墳	前方後円墳・横穴式石室（埴輪）	㊳				
79	道免古墳	円墳（埴輪）	⑲				
80	東塩屋浦古墳	箱式石棺	⑲				
81	弁天山石棺群	箱式石棺2基	⑲				
82	弁天山古墳	前方後円墳・竪穴式石室（埴輪）	㊴				
83	塩屋浦鬼の岩屋2号墳						
84	塩屋浦鬼の岩屋1号墳	横穴式石室					
85	桂原2号墳	横穴式石室（装飾）					
86	桂原古墳	円墳・横穴式石室（装飾）	㊵				
87	黒田製塩遺跡	製塩炉	㊺				
88	永尾於呂口古墳	箱式石棺	⑲				
89	狐塚古墳	箱式石棺	⑲				
90	河添鬼の岩屋古墳	円墳・横穴式石室	⑲				

<文献>

① 本書。
② 富樫卯三郎「網田古墳群」『宇土市の文化財』第3集　P11、1977年、宇土。
③ 三島　格・他『城二号墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第3集、1981年、宇土。
④ 富樫・卯野木盈二「宇土市下網田町マブシ出土の石棺」『宇土半島・自然と文化』P107～118、1975年、宇土。
⑤ 富樫「小松古墳」『宇土市の文化財』第3集　P10、1977年、宇土。
⑥ 富樫「小部田横穴古墳群」『宇土市の文化財』第1集　P11、1972年、宇土。
⑦ 富樫「梅咲山古墳発見線刻の舟」『考古学ジャーナル』20号　1969年、東京。
⑧ 富樫「城塚尾上横穴古墳群」『宇土市の文化財』第3集　P14、1977年、宇土。
⑨ 富樫「神ノ木山遺跡」『宇土市の文化財』第3集　P13、1977年、宇土。
⑩ 富樫「天神山古墳」『宇土市の文化財』第3集　P10、1977年、宇土。
⑪ 的場義夫「装飾をもつ宇土市飯塚天神古墳発見のいきさつ」『宇土ところどころ』P26、1978年、宇土。
⑫ 三島「宇土市轟椿原における石蓋土壙の一例」『熊本史学15・16号』1959年、熊本。
⑬ 濱田耕作・島田貞彦・梅原末治「肥後国宇土郡緑川村の古墳」『九州に於ける装飾ある古墳』京都帝国大学文学部考古学研究報告第3冊、1919年、京都。
⑭ 富樫・他『宇土城跡（西岡台）』宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集、1977年、宇土。
⑮ 富樫「熊本県宇土市栗崎町城ノ越古墳出土の三角縁神獣鏡」『熊本史学』33号　1970年、熊本。
⑯ 富樫「擂鉢山古墳」『宇土市の文化財』第3集　P6、1977年、宇土。
⑰ 富樫「迫ノ上古墳」『宇土市の文化財』第3集　P6、1977年、宇土。
⑱ 平山修一「大平横穴古墳」『宇土市の文化財』第3集　P14、1977年、宇土。
⑲ 坂本経堯「古墳時代」『不知火町史』1972年、不知火。
⑳ 濱田・島田・梅原「肥後国下益城郡松橋町の古墳」『九州に於ける装飾ある古墳』京都帝国大学文学部考古学研究報告第3冊、1919年、京都。
㉑ 富樫『向野田古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第2集、1978年、宇土。
㉒ 北條暉幸・平山・木下洋介「宇土市松山町南山内出土の箱式石棺」『宇土市史研究』創刊号　1980年、宇土。
㉓ 富樫「茶臼山古墳出土の鳥獣鏡」『石人』№106　1968年、熊本。
㉔ 富樫『境目西原遺跡』宇土市教育委員会、1969年、宇土。
㉕ 宇土高校社会部「神ノ山1号墳」『宇土高校社会部部報』第2号　1968年、宇土。
㉖ 富樫「古保里石棺群」『宇土市の文化財』第3集　P4、1977年、宇土。
㉗ 富樫「宇土市大字立岡西潤野古墳」『ともしび』第5号　1960年、宇土。
㉘ 濱田・島田・梅原「肥後国宇土郡花園村の古墳」『九州に於ける装飾ある古墳』京都帝国大学文学部考古学研究報告第3冊、1919年、京都。

㉙ 三島「肥後における古墳研究一戦後の成果と問題点一」『古代文化』第17巻第3号　1966年、京都。

㉚ 高木恭二・木下・古城史雄『女夫塚古墳（女塚）』宇土市埋蔵文化財調査報告書第11集、1985年、宇土。

㉛ 林田憲義「記念物」『松橋町史』1979年、松橋。

㉜ 宇土高校社会部『古城』宇土高校社会部部報第8号、1978年、宇土。

㉝ 佐藤伸二「中部九州における前期古墳発生の一側面」『法文論叢』第26号　1970年、熊本。

㉞ 三島「熊本県宇土郡塚原古墳群」『日本考古学年報』14　1966年、東京。

㉟ 濱田・島田・梅原「宇土郡不知火村古墳」『肥後における装飾ある古墳及横穴』京都帝国大学文学部考古学研究報告第1冊、1917年、京都。

㊱ 坂本「古代の生産」『不知火町史』1972年、不知火。

㊲ 宇土高校社会部『宇土高校社会部部報第1号』1967年、宇土。

㊳ 乙益重隆「不知火町国越古墳」『昭和41年度埋蔵文化財緊急調査概報』1967年、熊本。

㊴ 富樫「弁天山古墳調査概報一新発見の肥後最古の竪穴式石室墳」『熊本史学』第30号　1965年、熊本。

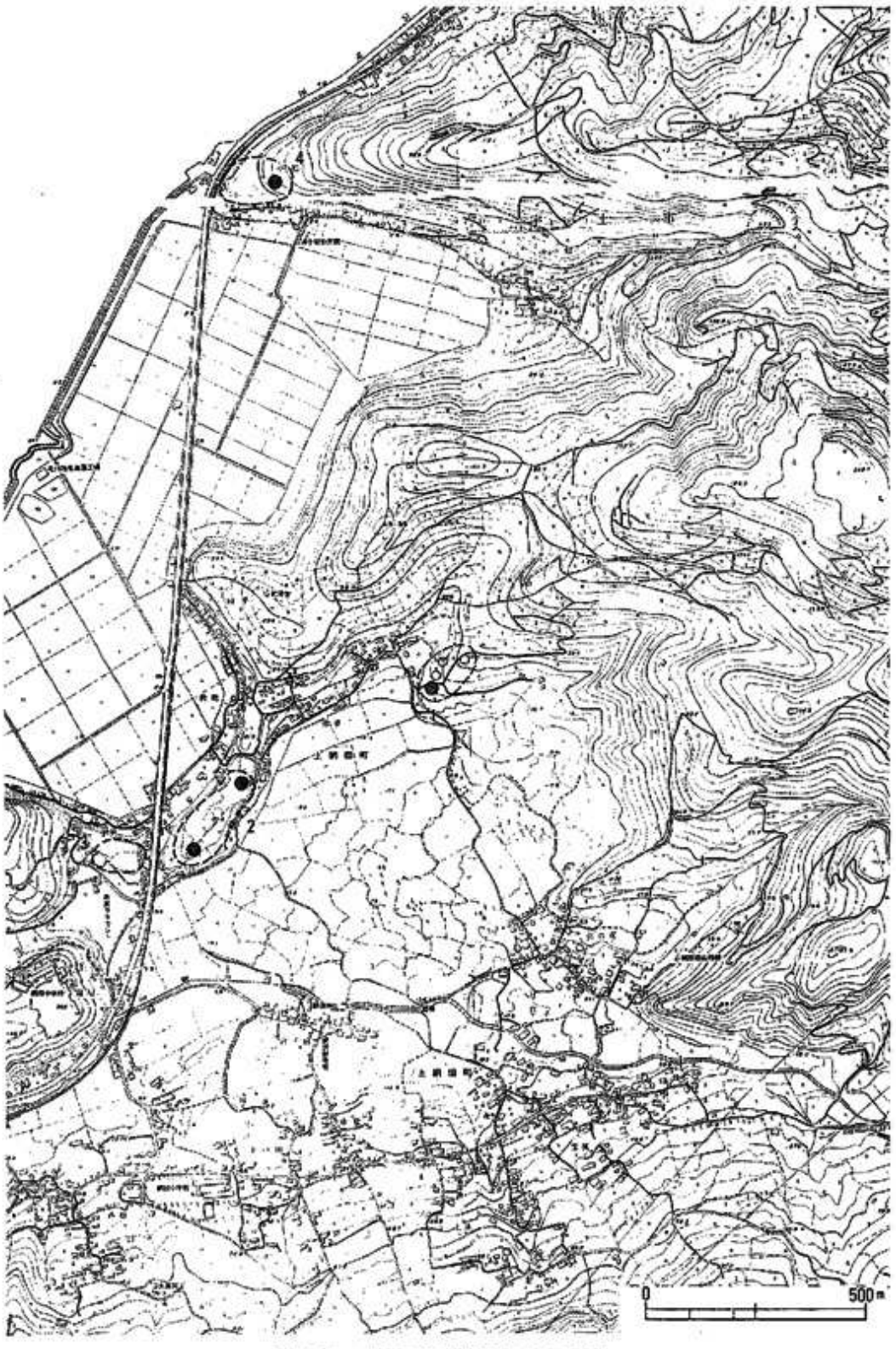
㊵ 三島「桂原古墳」『不知火町史』P72、1972年、不知火。

㊶ 村井真輝・浦田信智・他『大見観音崎石棺群・大串古墳・要古墳群』熊本県文化財調査報告第57集、1982年、熊本。

㊷ 甲元眞之・他『宇土半島古墳群分布調査報告（郡浦・大岳・三角・戸馳地区）』三角町文化財調査報告第6集、1986年、三角。

㊸ 甲元・松本健郎・他『宇土半島古墳群分布調査報告（郡浦・戸馳西地区）』三角町文化財調査報告第4集、1985年、三角。

㊹ 清野謙次「肥後国宇土郡郡浦村大字中村小字前田、金桁古墳」『日本原人之研究』1943年、東京。



第3図　網田平野地形図（1:7,500）
1 高丸古墳群　2 城古墳群　3 マブシ古墳群　4 小松古墳群

第3節　調査の記録

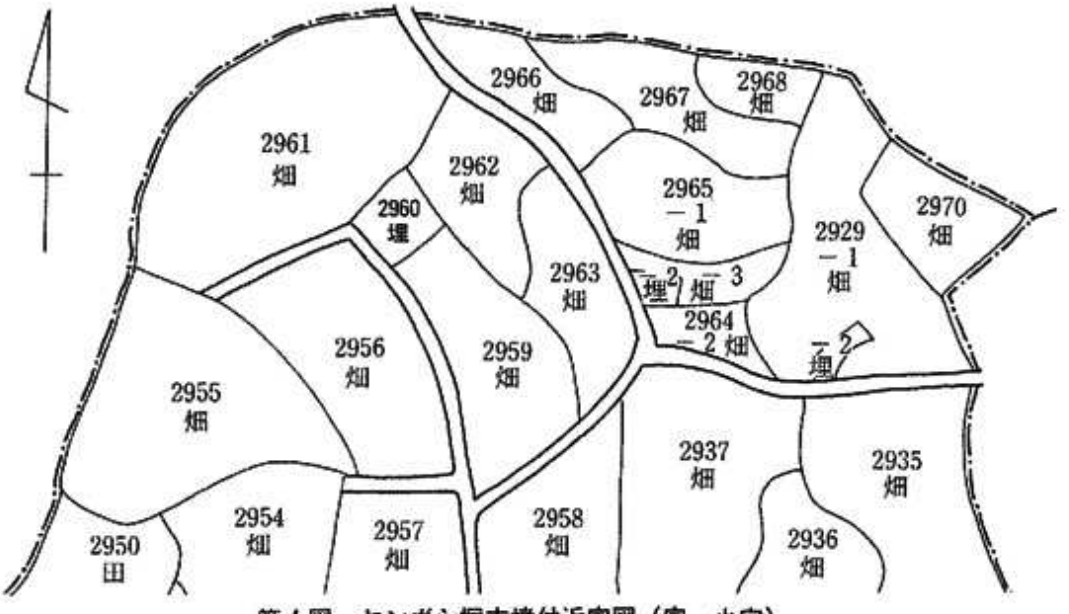
1．墳　　丘

宇土半島の脊梁から西南西方向に派生する丘陵の先端部に位置するヤンボシ塚古墳は、その丘陵尾根地形を巧みに利用して墳丘を形成している。古墳築造時の集落が何処にあったか明らかでなく将来に期待しなければならないところではあるが、盆地状に広がる網田平野を眼下に見下ろす位置に立地している点からみれば、この古墳の位置は極めて効果的な条件を備えた場所といえよう。

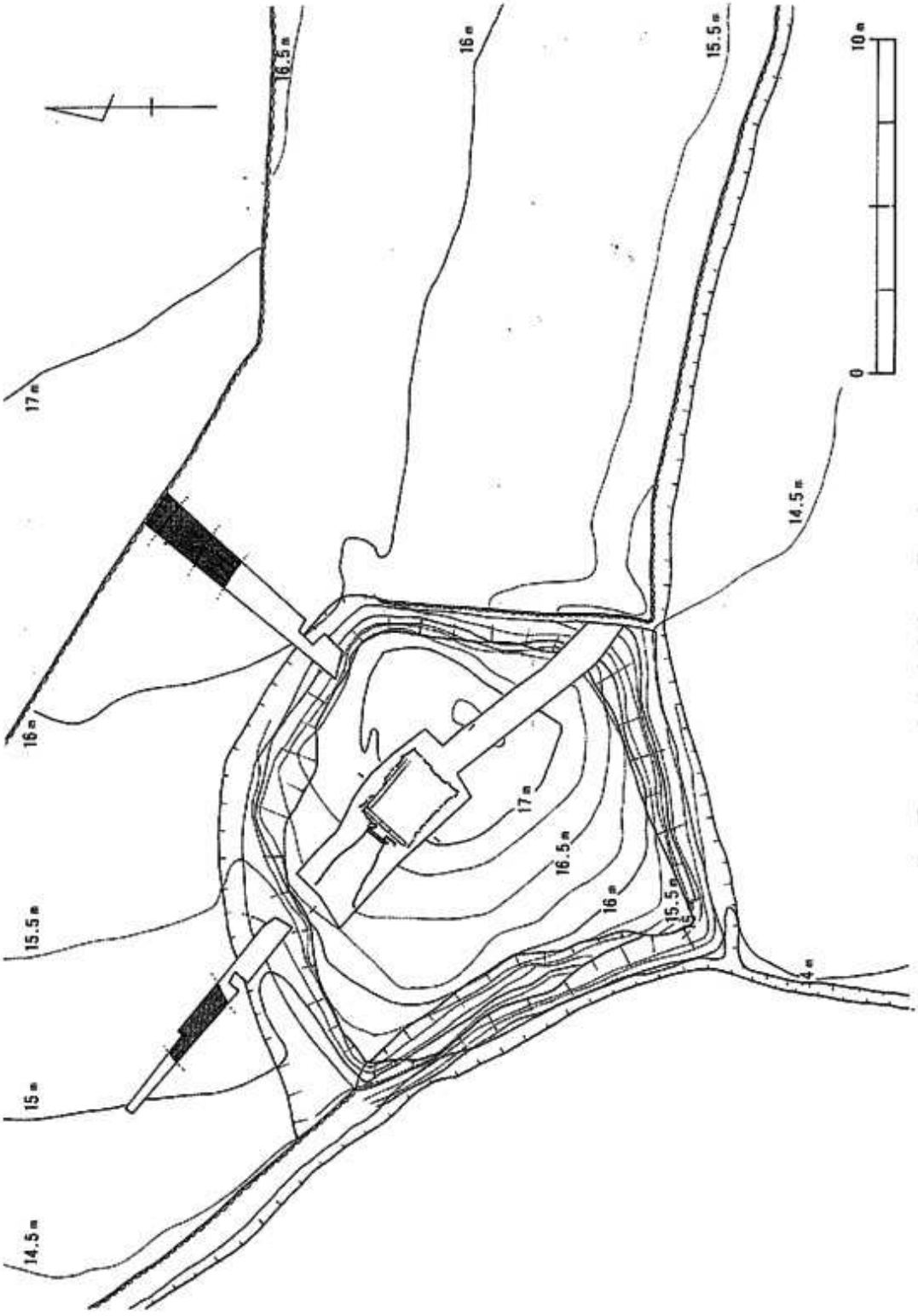
第1節1でも述べたごとく、調査着手直前に伐採が行なわれていたためにそれが円墳であることは容易に判断できた。とはいえ、東西・南北とも約14.5mの不整五角形を呈し、高さは北東側で約1m、南西側で約2.5mをはかるなどかなりの高低差があり相当の変形を受けていることは明らかである。

あるいは、当古墳が地元では「高丸（たかまる）」とも呼ばれ中世城に伴う呼称をとどめている可能性もあることから、田平城との関連で中世に何らかの形で土地利用がなされたことも考慮に入れておく必要があろう。なお、参考までに記しておくと、中世の田平城（当時は網田城と呼称）は谷ひとつ隔てた西南方向約500mのところに位置し、そこでも2基の円墳（城1号墳・城2号墳）が城内での重要なる郭として利用されている。

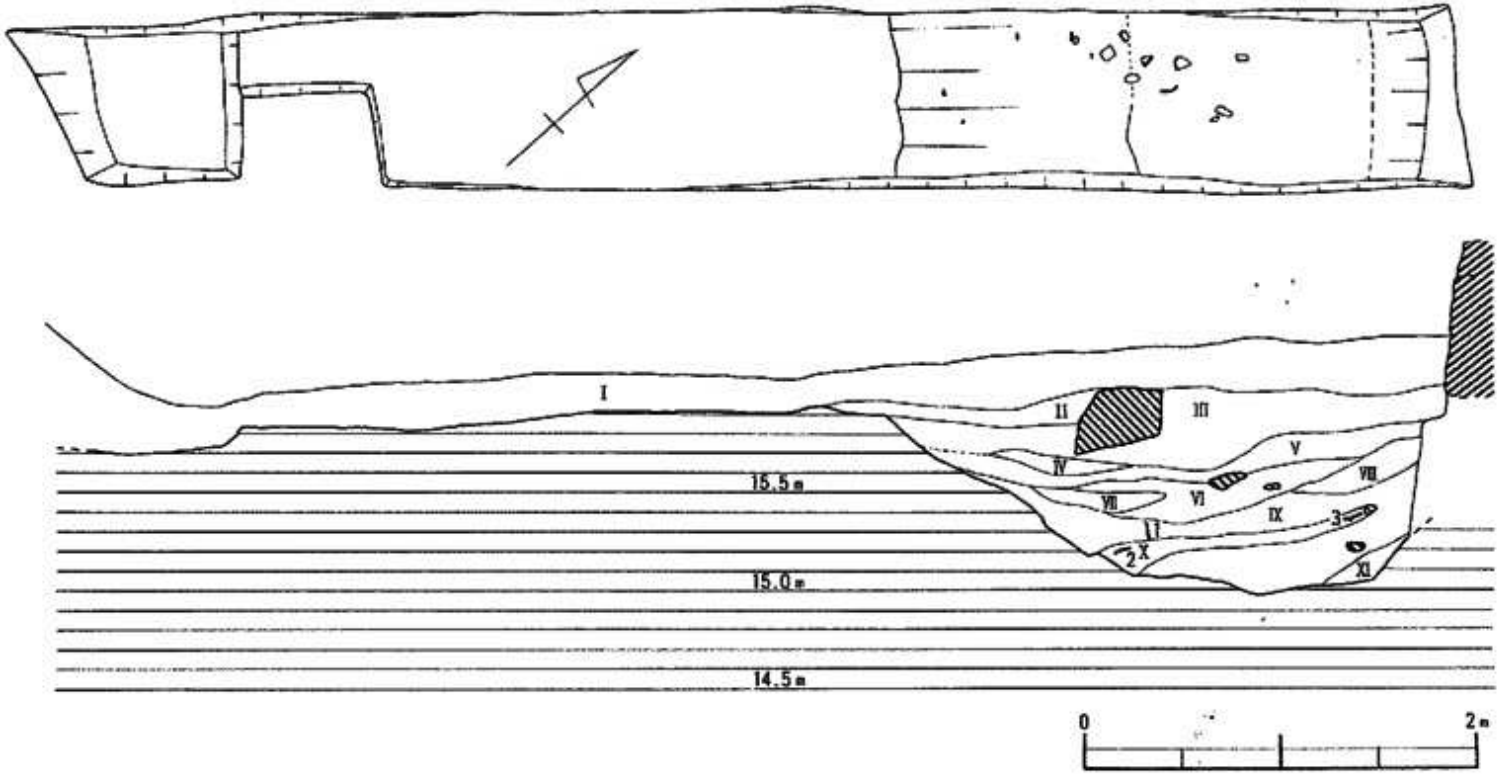
ヤンボシ塚古墳は、墳丘上の各所に大小の石が散在していたがそれが石室に用いられていた



第4図　ヤンボシ塚古墳付近字図（字、小宗）

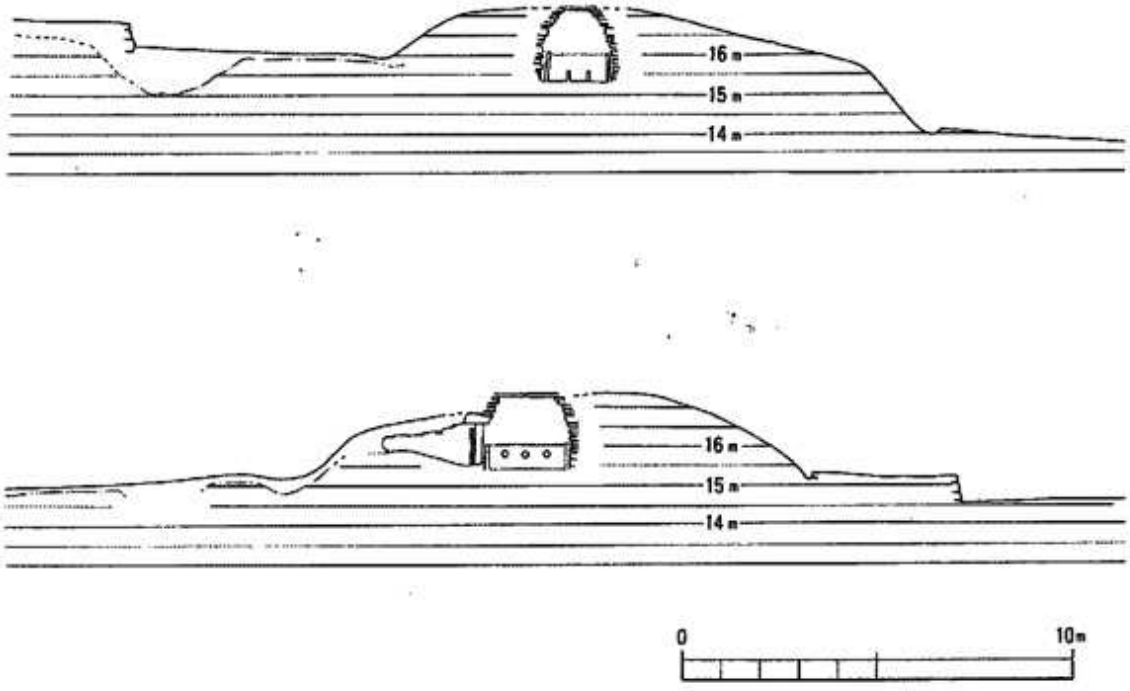


第5図　ヤンボシ塚古墳地形測量図（1:200）



Ⅰ．黒色土
Ⅱ．黒褐色土
Ⅲ．黒褐色粘質土
Ⅳ．褐色粘質土
Ⅴ．黒色粘質土
Ⅵ．黒褐色粘質土
Ⅶ．黒色土
Ⅷ．にぶい褐色粘質土
Ⅸ．黒褐色粘質土
Ⅹ．黒色土＋カーボン層
Ⅺ．黒褐色土＋地山ブロック

第6図　ヤンボシ塚古墳周溝断面図（1:40）



第7図　ヤンボシ塚古墳墳丘断面図（1:200）

石か葺石か、それとも開墾などによって周辺から寄せ集められたものであるかの判断はあまりつかなかった。

墳丘の規模や形状、それに周溝・葺石・埴輪等の存在を確認するために墳丘上に1ヶ所、墳丘裾部に2ヶ所のトレンチを設定した。

墳丘の中心を通って南東側墳丘裾にかけて設定したトレンチにおいては石室の墓壙掘りこみと裏込め石を明らかにすることはできたが、盛り土の状況を示す明確な土層変化や葺石は確認できなかった。

石室主軸に直交する形で、北東側墳丘裾から幅1m・長さ7mのトレンチを設定したところ、現況裾部から北東側3.4mのところから周溝の掘りこみを示す落ちこみを検出することができた。この掘りこみに対応する部分は、一段高くなってそこには後世の石垣がつくられているために確認することはできなかったが、周溝底と北東側の立ちあがりは確認できたので上面での周溝幅は3.7mをはかるものと思われる。

周溝は逆台形状を呈し南西側検出面からの深さは92cmで、内部は11層に分けることができる。溝底から約20cm上部にかけて堆積している第IX・X層中に若干の土師器が検出された。発掘面積が小範囲であったために検出された土器の量は極めて少量であったが、周溝全域では多くの土師器が埋もれているものと思われる。

墳丘裾部から北西側に設定したトレンチでは、裾部から1.6mの地点で掘りこみが確認でき、

その幅は2.3mをはかる。時間の都合で周溝内の発掘は行なわなかったが、検出段階において周溝内に拳大から人頭大の安山岩が入っていることが明らかとなり、その中には赤色顔料の付着しているものがいくつか認められた。この石は、検出地点が石室開口部の延長上近くにあることから考えれば石室構築時や追葬時に行なわれた何らかの作業過程で埋められたものか、羨道部側壁の一部が転落したもののいずれかであろう。また、周溝幅が北東側のそれよりかなり狭くなっていることは、周溝検出面のレベルが北東側のそれより約1m低くなっているために生じた結果であると考えられ、底に近いからであろう。

検出された2ヶ所の周溝と残存墳丘から考えれば直径約20mの円墳で、周溝を含めた直径は25mをはかる。後述するごとく石室復元後の推定墳頂部レベルと周溝底の比高差は2.25mである。

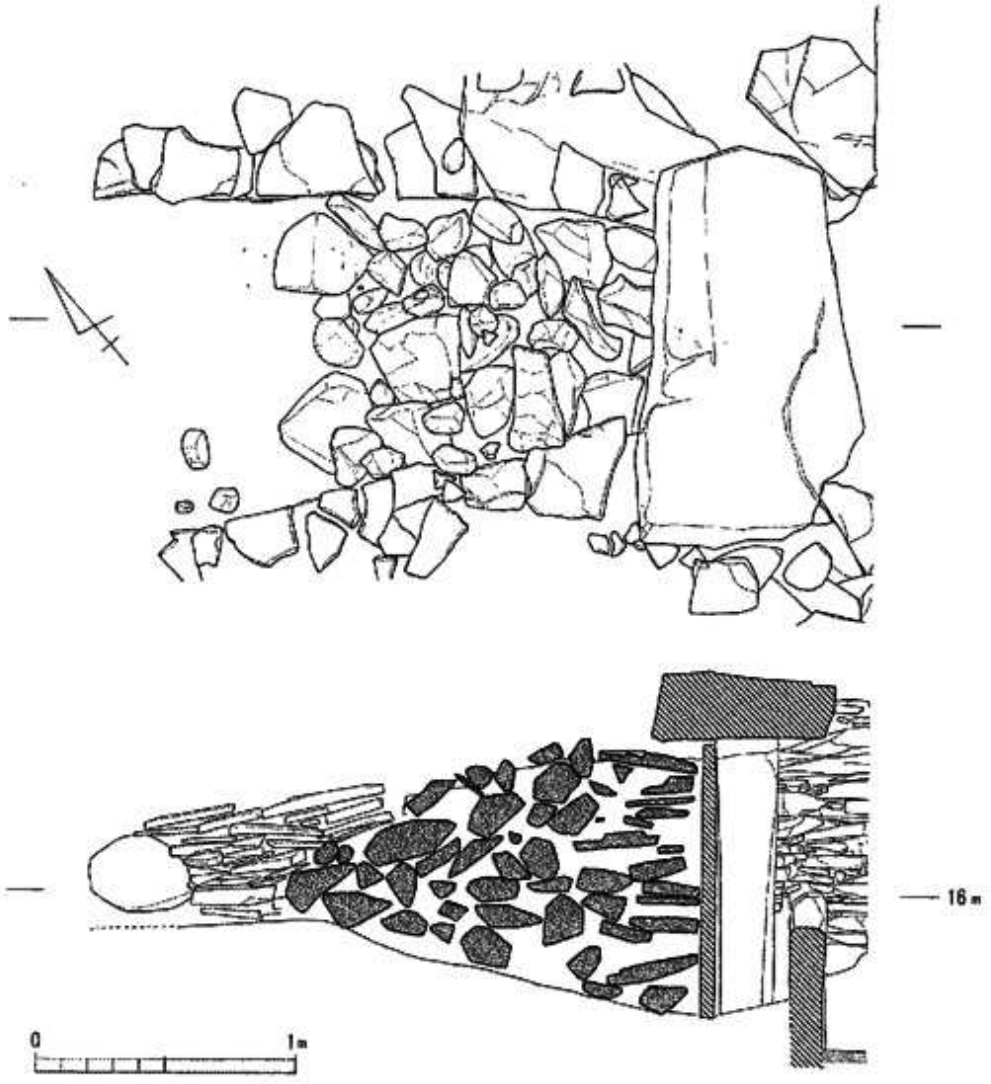
2. 石　室

発掘調査以前に墳丘上北西寄りの位置に、長さ150cm、幅70cm、厚さ25cmの大石がありそれがあたかも天井石であるかの如き様相を呈していたことから、それを横断する形で北西から南東方向にむけて幅1mのトレンチを設定した。調査に着手したその日にこの古墳が横穴式石室であることが判り、前述の石が羨道部直上のまぐさ石にあたることが明らかとなった。石室の所在確認によって玄室・羨道プラン検出のためにトレンチを前後左右にそれぞれ1mほど拡張した。検出された石室は、いわゆる石障系横穴式石室（又は肥後型横穴式石室）と呼ばれるものであるが玄室上半部は崩れ、石材の多くは石室内に落ちこんでいたものの、羨道部の遺存状況は良好で閉塞石も殆ど当初のままといえる状態であった。以下、羨道部から順に説明を加えることにするが、用語の使用にあたっては羨道から奥壁にむかって左・右壁・左石障・右石障とし、奥壁に沿って立てられた石障を奥障、玄門側に立てられた石障を前障と呼ぶ。また、羨道部のうち左右の袖石によってせばめられる玄室までの間を玄門部という名称を用いた。

羨　道　部

羨道部は先端部で約130cm、扉石部分で約80cmの幅でラッパ状に広がる石積みがなされており、石積みは左壁で2.4m、右壁で2.1mをはかる。羨道部床面（硬化面）は先端部から90cmくらいは約5cmの勾配で高くなっているが、扉石から145cm付近からは逆に約13度の傾斜をもって扉石方向にむけて下降し、そこに大量の人頭大の安山岩粟石を充塡して閉塞石（封鎖石）としている。この封鎖石のなかでも、扉石に面する一列は側壁積みと同様の扁平な板石が用いられている。

封鎖石のうちで最も高い部分の何石かは両側壁上端面より4～8cmほど高くなっており、両側壁に差し渡す形で羨道部天井石を架すとすればやや不都合が生じることになる。両側壁石積みの何石かが欠失した可能性も全くないとはいえないが、遺存状況からみれば羨道部天井石は



第8図　ヤンボシ塚古墳羨道部閉塞状況（封鎖石—1:30）

当初からなかったことになり、前面はオープンのままであったのであろう。

左側側壁は北西側先端部に塊石を立て平滑な面を側壁ラインに揃え、石積上端面は羨道最奥部での高さからみれば次第に低くなって約30cmの高低差がある。しかも、先端部では9段（40cm）ほどであった石積みは、底面が傾斜をもって下がっているため石積み下底面も扉石方向にむかって低くなって奥の方に行くに従い厚くなり、17段（93cm）くらいになっている。当然のことながら、このことは右壁側壁にもいえることであるが、右壁の長さが左壁よりやや短く2.1mをはかるのみである。左右側壁ともほぼ垂直に積み、最奥部は玄門部袖石に揃えて積みあげ側壁の起点としている。

羨道部正面は幅70～80cm、高さ107cmで、その中央部に高さ104cm、幅64cm、厚さ5.5cmの砂岩

扉石をほぼ垂直に立てている。この扉石（閉塞石）は羨道側の上部と左右壁にチョーナ削り技法による面取りを施し丁寧に仕上げ、内外面に赤色顔料を塗布している。また羨道部左右側壁にも赤色顔料がみられ、塗布したことが明らかである。

発掘調査着手前から見えていた大石は、結果的には左右の両玄門石に架せられていたまぐさ石であり、この石は原位置のままのものであることが判明し、扉石の前面20cmまでこの石が覆うことになるが、前にも記したとおりその前面には天井石は載っていなかった。

玄　門　部

扉石をはずすと、幅34cm、高さ106cmの空間があり玄室への入口となる。この入口の両側は袖石がそれぞれ一石づつ直立し、左壁には安山岩が、右壁には阿蘇溶結凝灰岩が用いられ、左袖石通路側隅部は打ちかきを施す。右袖石は切石でありチョーナ削りによって面をそろえる。羨道部からつづく床面は玄室側にむかってやや高くなって、扉石付近が最も低くなり、扉石と石障の間には円礫が敷かれる。

入口部空間は幅34cmと極めて狭くなっているうえに、玄室側眼前に前障が立ちはだかっているため玄室内に入るにはかなり窮屈さを余儀なくされることになるが、それを少しでも解消しようとするための手だてとして石障にはU字形の刳りこみが施されている。

玄門部左袖石の玄室に面する位置のほぼ中央付近には単純な構造ではあるが帆柱をもった船の線刻があり、この袖石の北東隅に接して玄室側壁が築かれ、コーナーにつづいている。この手法は右袖石の玄室コーナー側についても用いられており左右相称をなす。袖石と石障の空隙は４～５cmをはかる。

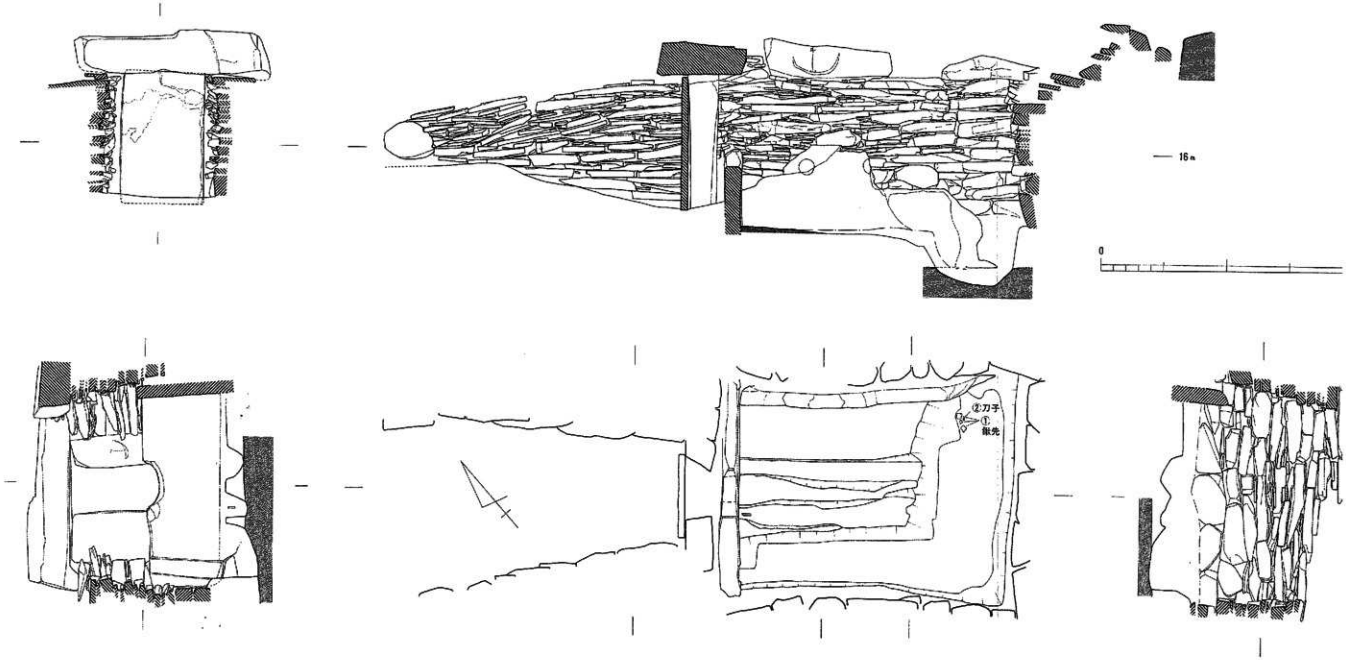
玄　室

玄室周壁に沿ってその内側に石障をめぐらす構造の石室であるが、玄門側の一石と左壁側の半分くらいを残すのみでその他は抜きとられていた。石障を立てるための掘りこみや石障石材破片の遺存によって、四壁ともそれぞれ一石ずつが用いられていたことが明らかである。

前障の内面両端に石障材を嚙み合わせるための溝がつけられ左石障がこの溝に嵌め込まれていたことから、前障と奥障材が左右の石障を挟み込むような形で立てられていたと考えられる。

前障は長さ175cm、高さ75cm、厚さ15cmの阿蘇溶結凝灰岩であり、上部に面取りを施し、玄門に対応する中央付近上部にU字形刳り込みがある。この刳り込みは最上部幅38cmであるが、約1.5cm下がったところに段をつけ、そこから更に皿状の刳り込みをつけている。石障上面から最深部までの深さは10.5cm。

左石障は基底部で長さ190cmが残存しているが本来は207cm位あったものとみられ、高さは95cm、厚さは12cmの阿蘇溶結凝灰岩である。なお、床面から見えているみかけ上の石障の高さは65cmとなる。この石障には、やや上部寄り２ヶ所に直径12.7cm、深さ0.35cmの円文が彫りくぼめられているが、右側のものは右半分を欠失している。ふたつの円文の間隔からみれば、この



第9図　ヤンボシ塚古墳石室実測図（1:30）

石障には奥壁よりにもう1ヶ所の円文があったとみられる。

石障とその背後の左側側壁との間にはほとんど空間をつくらずうしろに割石小口積みを施している。石積みのうちで、石障上端面より15～20cm下位から上部は小口面が奇麗で扁平な割石を積みあげ、空隙は小割石で補塡するなどして丁寧であるが、石障によって隠れる下位部分は同質材ながら自然石に近いやや大ぶりの石を積んでいる。しかも、側壁石積み基底面のレベルは玄室床面まで達しておらず、床面より10cmほど高い位置にある。

石室上半部の大半と天井石は遺存せず、上部構造の詳細を明らかにし得ないのは惜しまれるが、床面から約120cm付近の下から12～13段目（玄門部天井石基底面とほぼ同レベル）で、石積みに用いられる石は大きくなり、玄門部天井石の厚さとほぼ同じの20cm前後の厚さに揃える傾向にある。このことは上半部の残り具合がよくない右壁は別にして奥壁でもいえることであって、このレベルで大石を並べこれから上部の持ち送りを強くするためのものであるとみたがよかろう。この左壁側壁のうち、遺存するふたつの円文の直上にあたる上部の大石のひとつにも、玄門部のそれよりやや大ぶりの船を描いた線刻がみられる。また、奥壁に近い左壁中段（床面からの高さ75cm）の一石の小口面には矩形をなす線刻があった。

右側側壁も左壁とほぼ同様の積み方であるが、上部の欠失が左壁よりはなはだしいうえ、石障も完全に抜きとられている。残存する右壁と奥壁に線刻は確認できない。

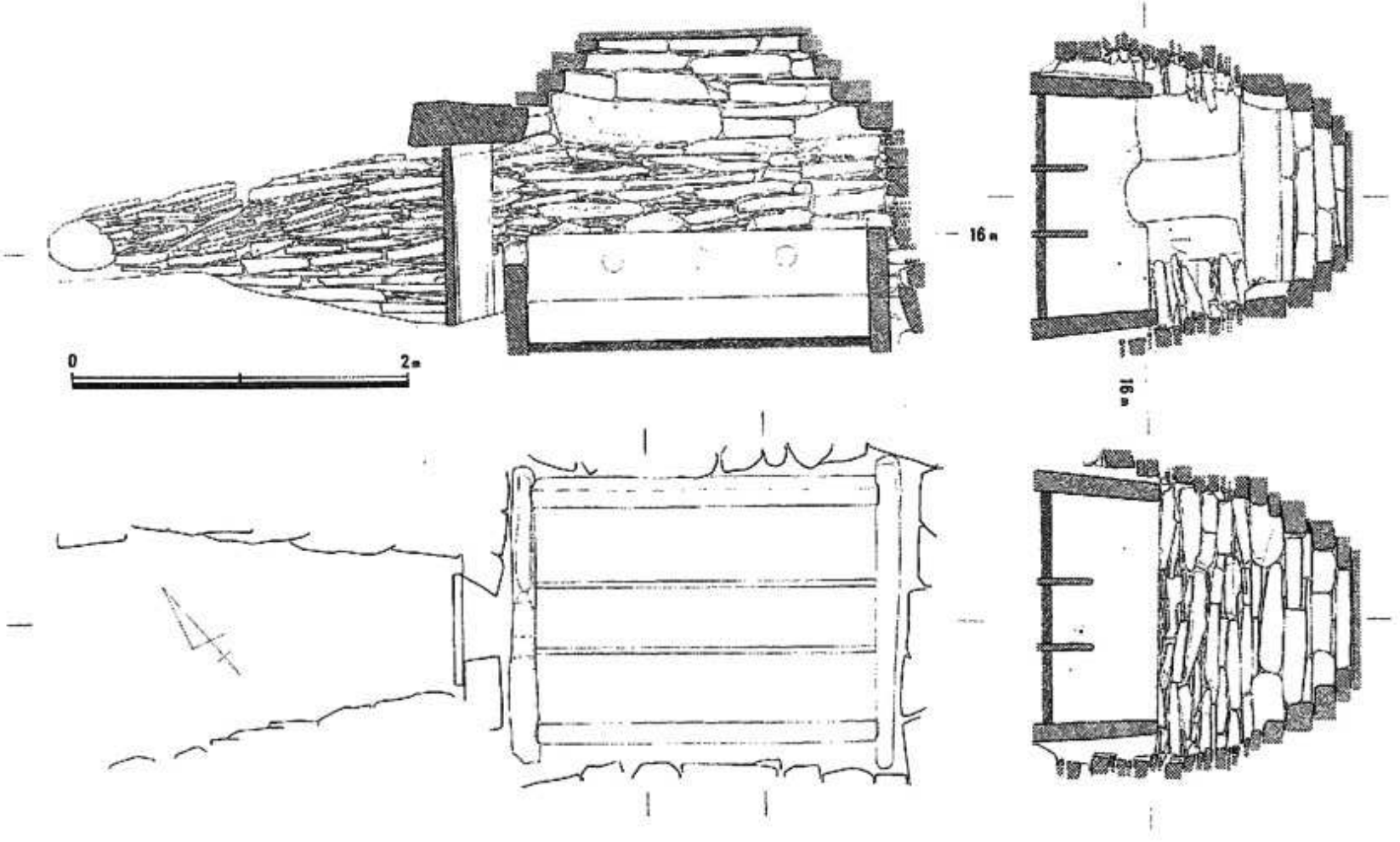
奥壁も左壁と同様に、石障で見えない基底部に近い積石は大ぶりであり自然石のままのものを用いている。基底部根石の直下は暗茶褐色土で、墓壙底の地山までは32cmある。奥障も完全に抜きとられていたが、東側コーナー付近に残っていた痕跡と小片からここに石障があったことは疑い得ない。しかも、この奥障に用いられていた石材は他の三方の阿蘇溶結凝灰岩製の石障とは異なって、にぶい橙色を呈する紫蘇輝石安山岩であった。後述するが、このことは他の古墳例とも併せ、興味ある知見を提供することになった。

四壁のコーナーは、石障上面から5cmくらいから以上を、両側の側壁を跨ぐかたちで積む傾向が強くなり、石障によって隠れる部分ではそれほど多くない。

既に述べたごとく石室上半部は失われ、天井石と思われるものの遺存もなかったので、天井石に何枚用いられていたものかは断言できないが、持ち送りの状況と石室プラン等を考えあわせれば、天井石は長さ150cm以上、幅80cm以上のものが必要であり、板石2枚程度であったろうと推測される。石室床面から150cm上部まで側壁を確認することはできたが、天井下底面までは180cmくらいあったものとみられる。

床　面

奥障と右石障は完全に抜き去られ左壁のものの半分も欠失し、しかも本来は床面上に立っていた仕切石も全て持ち去られるなど、それらを抜き取るための後世の掘りこみが石室床面の大半を占め、床面の遺存は極めて悪かった。しかし、刳り込みのある前障の、基底部に近い玄室



第10図　ヤンボシ塚古墳石室復原図

側床面下6.5cmのところに一辺約6cmの二等辺三角形を呈する厚さ1.4cm（ただし本来の厚さはそれ以上）の砂岩製の小さな板石が、石障に直交する形で置かれ、それを中心とした幅10～20cmの掘りこみが奥壁にむかって延びていることから、それが抜きとられた仕切石の残存部分であるとみるのが妥当である。しかもこれと平行する同様の掘りこみが約25cm隔てて北東側にもみられることから、この石室には平行する2列の仕切石があり、これによって分けられる3区画が存在することが明らかとなった。

この2列の仕切り石によって限られる区画のうち、左側のものと中央のそれには厚さ約4cmの深さで円礫（平均の大きさは、3cm×4cmの楕円形で厚さ2cmくらい）が敷かれていたことが確認できたので3列の屍床が存在したことが判る。中央の区画は本来、通路として用いられたものであろうが、最終的（追葬時）には屍床として用いられたと考えられる。各屍床の幅は約40cmと推測される。この種の石室例から考えれば奥壁に沿って屍床が存在したことも考えねばならないが、内法幅からみればそれには無理があろう。柳沢一男氏が行なった屍床配置の分類[注8]ではC型にあたる。

右側屍床の大半と各屍床の奥壁側部分の大半は石障抜きとりのため本来の床面は遺存していなかったが、もともとは円礫が敷かれていたと思われる。当初の状態を残していた左側屍床・中央部屍床においても遺物は遺存しておらず、水洗いを行なった結果でも何らの遺物も検出できなかった。ただ、奥壁と左壁に囲まれた東側コーナー付近で石障を抜きとった掘りこみ内から鏃先・刀子片・鉄鏃茎片などが検出された。石室床面下30cmの地点に集中してあったものであり、埋葬当時の状態を示すものでないことは明らかである。

石　材

古墳に用いられた石材のうち凝灰岩・砂岩の石材鑑定を松本幡郎熊本大学理学部教授にお願いしたところ、石障に用いられた阿蘇溶結凝灰岩は、阿蘇山の噴火によって流れ出た火砕流のうちの6回目（Aso 3）の爆発に属するものであるとのことであり、3壁と異なる奥壁沿いの石障は普通輝石普通角閃石紫蘇輝石安山岩と称するものであるという。この紫蘇輝石安山岩は宇土半島でも基部に近い東側に産するものであるといい、地元で馬門石（まかどいし）と呼ばれているものがそれに該当する。その産出地は、ヤンボシ塚古墳の位置する丘陵背後の高山（標高305m）を越えた現在の宇土市網津町馬門付近であり、直線距離にして約3.5kmのところである。

また、床面仕切石に用いられていた板石は砂岩であり宇土半島の先端部に近い三角町付近のものである可能性が高いということである。

3．装飾文様

石室内にみられた装飾文様の発見部位と文様を挙げれば次の3ヶ所となる。

○玄室内左石障（円文陰刻）

○玄門部左袖石内壁（船線刻）

○玄室内左側壁（船線刻・矩形線刻）

石障に彫りこまれた円文は、当然のことながらその文様部分を掘り出した時点ですぐ確認できたのであるが、船や矩形の線刻はその文様が描かれていた石が、早い時期から検出できていたにもかかわらず線刻の存在に気づくのには時間を要した。それは、文様が極めて細くしかも浅い線で描かれているため確認が遅れたのであるが、太陽光線の角度・具合によって偶然発見されるという結果となってしまった。このことは後にも述べるように、他の古墳においても確認されていない線刻文様の存在を暗示させるものである。

なお、左壁石積みの奥壁よりにみられた矩形の線刻は、装飾文様とするにはやや問題があるのであるが、どのような目的で描かれたものか不明ながら意図的なものであると認められたので、参考までにあえて本項で取りあげることとした。

円　文

玄室内左壁に沿ってその前面に立てられた阿蘇溶結凝灰岩製石障に彫りくぼめられたもので、2ヶ所に確認された。共に石障上端面から11cm下を円弧の頂点として直径12.7cmのほぼ正円形で、その中央部を0.35cmの深さで完全に彫りくぼめている。円文最下底部から床面までの高さは41cm。円弧の中心にコンパスの中心点を表わすようなものはなかったが、そこにコンパス状のもので円を描いたのちその中央部分を彫りくぼめた可能性は残る。

ふたつの円文の間隔は38.5cmを測り、石障面にむかった側の円文から前障までの間隔は約45cmである。左石障の復原長は207cmであり、そのうち石障をかみあわせるための溝によって隠れる3cmを差し引いた有効壁面は204cmとなる。そこで前障面からふたつの円文ならびにその間隔から3つめの円文を想定すれば、3番目の円文の右端から奥障前面までの距離は44cmとなり、玄門側円文との間隔45cmとほぼ同じ数値になる。これによってこの左壁には3個の円文が表現されていたことが明らかである。

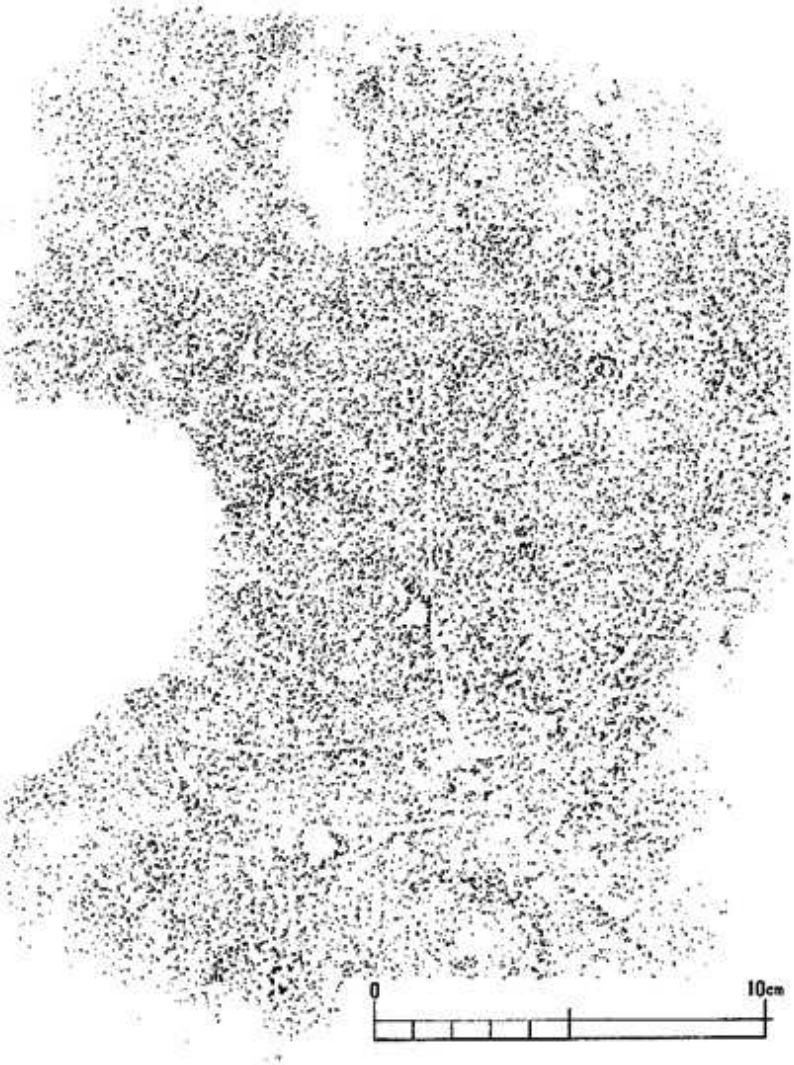
奥障と右石障は完全に抜き去られていたため装飾（円文）の存在を知る手だてはないが、玄門側の石障にはない。他の古墳例からみても左壁・右壁と奥壁にそれぞれ3個ずつの円文が彫られていた可能性もあるが、奥障の石材だけが他の3面のそれと異なる点を考慮すれば、そこにはなかった可能性もでてくる。

円文の表現された例ではないが、石障面に浮彫の直弧文が表現されている天草郡大矢野町長砂連古墳の奥障もヤンボシ塚古墳例と同様に他の3面の石障と異質の橙色を帯びた石材が用いられ、そこには直弧文は描かれず、右壁・左壁の2面に限られる。あくまでも推定の域を脱しないが、ヤンボシ塚古墳の円文は左壁と右壁にそれぞれ3個ずつの円文が彫られていたと想定しておきたい。なお、小結でも述べるごとく長砂連古墳とヤンボシ塚古墳の時期関係は、ほぼ併行する段階のものと考えられる。

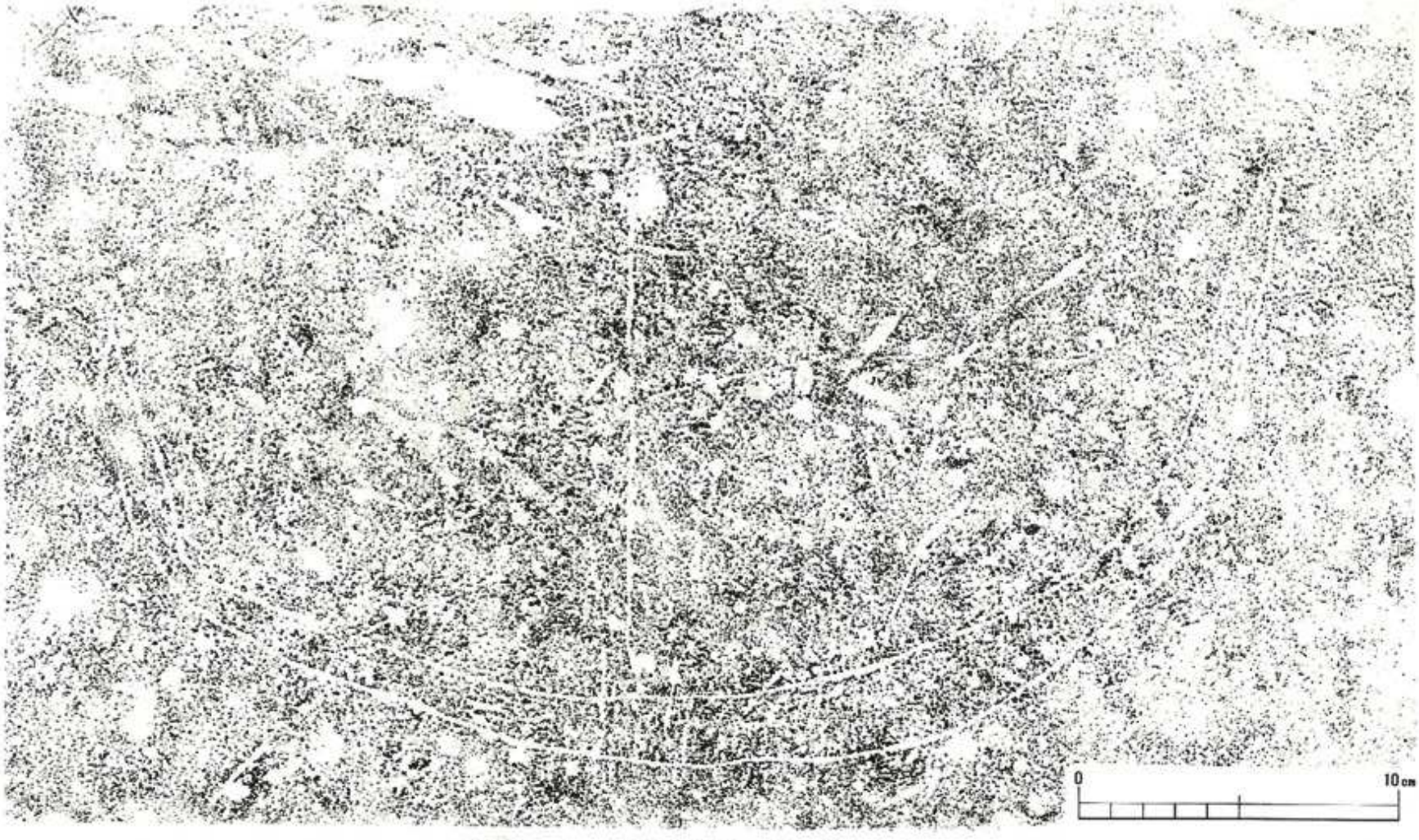
第11図　ヤンボシ塚古墳石室拓影（1:4）

線　刻　船(1)

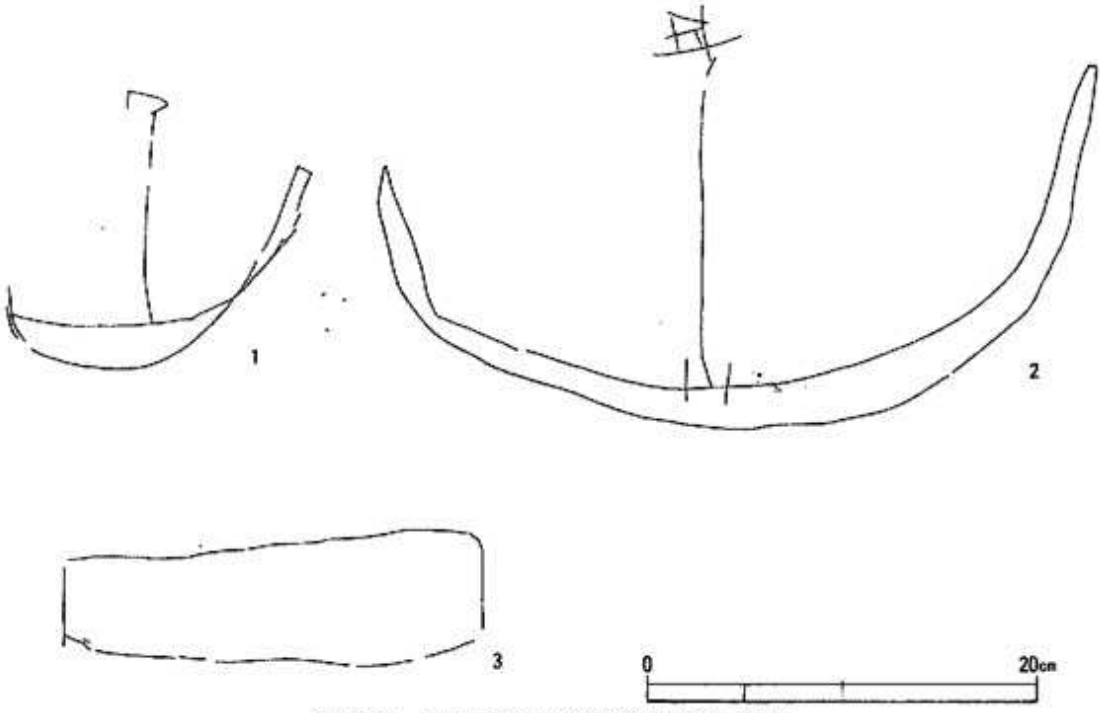
玄門部左袖石の玄室に面する側のほぼ中央付近で、床面から72cmの高さの位置に陰刻されたものであり、極めて細い鋭利な工具で描かれている。帆柱状の垂直な柱を立て、その上端に三角巾状の旗のようなものを表わしたゴンドラ形の船で、むかって左側の船尾に比べ右側の船首が異常に大きく表現される。船首先端から船尾までの長さは直線距離で16.6cm、船長は15.2cm。船首上面から船底までの高さは10.8cm、甲板から船底までは2.3cm。帆柱の長さは10.8cmである



第12図　ヤンボシ塚古墳線刻〈船1〉拓影（1:2）



第13図　ヤンボシ塚古墳線刻〈船2〉拓影（1:2）



第14図　ヤンボシ塚古墳線刻実測図（1:4）

がややカーブを描いており、その上部に一辺が2.2cm、底辺が1.7cmの二等辺三角形をした旗状のものを表現し、船底から旗の最上部までの総高は14.3cmをはかる。艪・帆・屋形などの表現をなさない極めて単純なつくりの船である。なお、この袖石には全面に赤色顔料が付着しており、丹が塗布されたことは明らかであるが、刻まれた線の中には極めて微量の顔料が付着するのみで殆ど顔料がついていないことから、この船は赤色顔料塗布後に刻まれたとみてよかろう。

線　刻　船(2)

玄室左壁上部の積石のなかでは大きめの石の内壁面（縦20～30cm、横100cm）のほぼ中央部に描かれたものである。この石の両側と上部の積石は抜きとられていたため辛うじて難をのがれることができたのであるが、先にも述べたとおりこのレベルで大石を揃え、それから上部の持ち送りを強くしたものと思われる。描かれた船の位置は、床面上120～140cmのところであり目の位置に近い高さではある。

袖石部の線刻船(1)と同様の鋭利な線で描かれたものであり表現方法も共通するが、船の大きさは異なる。ゴンドラ形の船に帆柱を立て、その上端に旗のようなものを表わしたもので基本的には右方向に向いた同一の構図といえ、船首から船底までの高さは18.3cmである。船体のほぼ中央に帆柱が立ち、その基底部両端に２本の線が沿えられるがこの帆柱も船(1)と同様にやや弯曲をもっている。帆柱の上部にあたる部分に若干の凹みがみられるため一線表現とはなっていないが甲板面からの帆柱の長さは19.5cmで、旗状のものの上につき抜ける。旗状の表現は線刻船(1)ほど単純ではなくやや線が多いところやつづいていないところなどあるが、基本的には

船首側を頂点とする三角巾を表現したものと思われる。

当初はこの石にも赤色顔料を塗っていたものであろうが、現在では殆ど確認することはできない。そのため線刻船(1)で観察し得たように線刻された段階がいつであったかを推定することは不可能であるが、船の構図や表現技術などの点からみてもこのふたつの船は同時に刻まれたものと考えられる。

矩形線刻

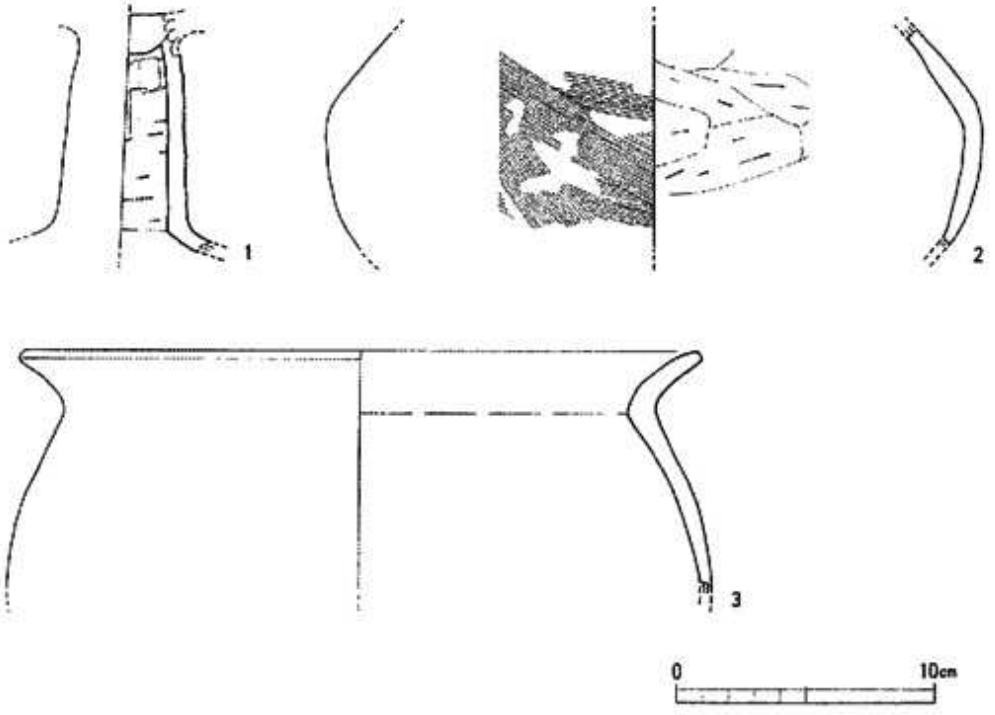
左側壁が奥壁に接する石積みの一石に描かれた矩形（縦39～68cm、横21.3cm）をなす線刻がそれであり、描かれた線の大きさや深さはふたつの船とほとんど同じである。この矩形文様がどのような目的で描かれたものか明らかにできないが何らかの意味があったものであろう。

奥壁コーナーに近く、持ち送りがなされているためであろうか、風化が少なく赤色顔料が極めて多量に残っている石であり線刻は赤色顔料塗布前になされているようで、線刻の施されたのが古いとみてよい。

4．出土遺物

遺物の量は極めて少量であり、古墳の築造時期を考えるうえではやや資料不足の感を否めない。出土場所によって２ヶ所（周溝・石室内）に限定される。

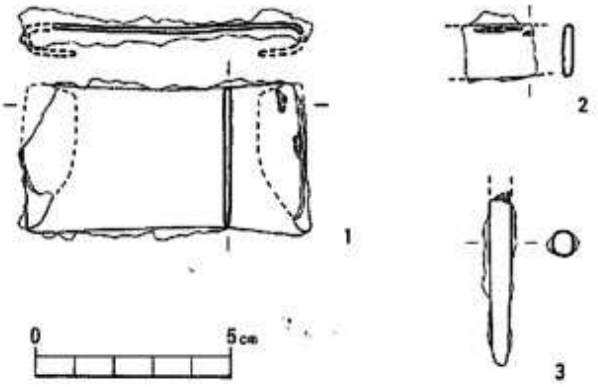
東側トレンチ出土土器



第15図　ヤンボシ塚古墳出土土器実測図（1:3）

検出できた量は少なく小破片が多い。図示できるものが3点ある。

1は周溝内第9層から出土した土師器高坏の脚柱状部破片である。下半部と坏部を欠き全体の形状は知り得ないが、脚部はややふくらみをもち内面はヘラ削りがほどこされる。裾部との境をなす屈曲はそれほど強くないが内面では稜をつくる。内外面とも橙色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成不良。



第16図　ヤンボシ塚古墳出土鉄器実測図
(1:2)

2は周溝内第10層から出土した土師器であり、上・下半分を欠失する。胴部最大径（25.5cm）がやや上位になる壺であろうが詳細は不明。外面はナナメハケがほどこされており、内面はヨコ方向のヘラ削りとなっている。外面は浅黄橙色、内面はにぶい黄橙色と黒褐色が混じる。胎土中に砂粒を含み焼成はあまりよくない。

3も同じく周溝内第10層より出土したものであるが土器の特徴からみて弥生式土器と考えられるところから混入したものであろう。頸部屈曲部から大きく外反する口縁部をもち胴部のふくらみはあまり強くない。内外面とも器壁が荒れ調整は不明であるが、色調は外面が橙色と黒褐色が混じり、内面は橙色。胎土中には大きめの砂粒を含み前2者とはかなり異質の感がある。焼成は不良で、口縁部径26.5cm、頸部径23cmをはかる。

玄室内鉄器

6片があり、いずれも奥壁に近い左屍床の攪乱土（石障抜きとり痕）内から検出されたものである。

1は鉄鏃先の破片であり、木柄をさしこむための折り返しを両側とも欠失するが一部に木質の遺存をみる。幅7.2cm、長さ3.6cm、厚さ0.15cm、現存重量21g。極めて薄手のつくりで刃部には若干の研ぎ減りがみられる。ここに図示しなかったが他にも薄めの鉄片があり鏃先の破片とみられることから、この鏃先の他に少なくとももう1個は存した可能性が強い。

2は刀子の茎片とみられる小破片であり木質痕が付着する。幅1.4cm、厚さ0.3cm。3は鉄鏃茎片とみられる棒状鉄片で隅丸方形の断面をなす。全形を知り得ないが尖根系統の鉄鏃であろう。

以上が本古墳の出土遺物の概要であるが、周溝の発掘面積を狭い範囲に限定し、石室内の盗掘が徹底的に行なわれていたため遺物は極めて少量しか検出できなかった。石室内床面の円礫を混じえた土の水洗選別作業を行なった結果でも前記鉄小片を検出し得たのみで、玉類も見い出し得なかった。（高木）

註　柳沢一男「肥後型横穴式石室考一初期横穴式石室の系譜一」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』1980年、太宰府。

第4節　小　結

ヤンボシ塚古墳の位置する網田平野には大小の古墳が点在し、それらは三つのグループに大別できる。

①高丸古墳群（古墳2基、石棺2基）

②マブシ・城古墳群[1][2]（古墳2基、小形竪穴式石室2基、石棺12基）

③小松古墳群[3][4]（古墳1基、小形竪穴式石室2基、石棺4基）

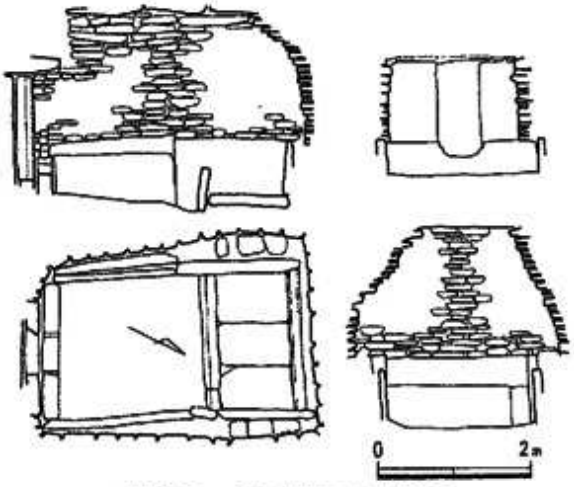
いずれも15～20mの円墳1・2基と墳丘を持たない小形竪穴式石室・箱式石棺数基を周辺にもつ。

富樫卯三郎氏はこれらのうち②マブシ・城古墳群を総称して網田古墳群の名で呼ぶことを提唱されている[5]。網田平野が、南西方向に海がひらけるとはいえ四方を山に囲まれた盆地であり完全に独立した小世界を形成している。その意味では小松古墳群は、網田平野のなかで別グループとして把えることができるし、盆地の四方を丘陵が囲繞しておりながら平野の北方にしか古墳がみられないことは、城・高丸の両古墳群を同一丘陵上に続くひとつのグループとしてみることがむしろ穏当で網田古墳群の範囲をやや拡大しておきたい。

両古墳群のうち、規模が大きく内容が比較的に明らかとなっている城1号墳・城2号墳・ヤンボシ塚古墳の3基が網田平野の古墳の流れを考えるうえで重要であるが、ヤンボシ塚古墳の概要と類似古墳との比較検討を行なったうえで改めてふれることにしたい。

石室構造

ヤンボシ塚古墳の主体部は、いわゆる石障系横穴式石室（あるいは肥後型横穴式石室）と呼ばれるタイプのもので、宇土半島を中心とする有明海・八代海沿岸地域に特徴的な構造の石室である。盗掘によって石室内はかなり荒らされ玄室内壁をとり囲む石障4枚のうちの2枚も持ち出され、床面の半分以上は当初の状態を残していなかった。盗掘・破壊が天井部から行なわれたために羨道部は荒らされることなく、埋葬当時の状態を保っていたことは不幸中の幸いといわねばなら



第17図　千足古墳石室実測図

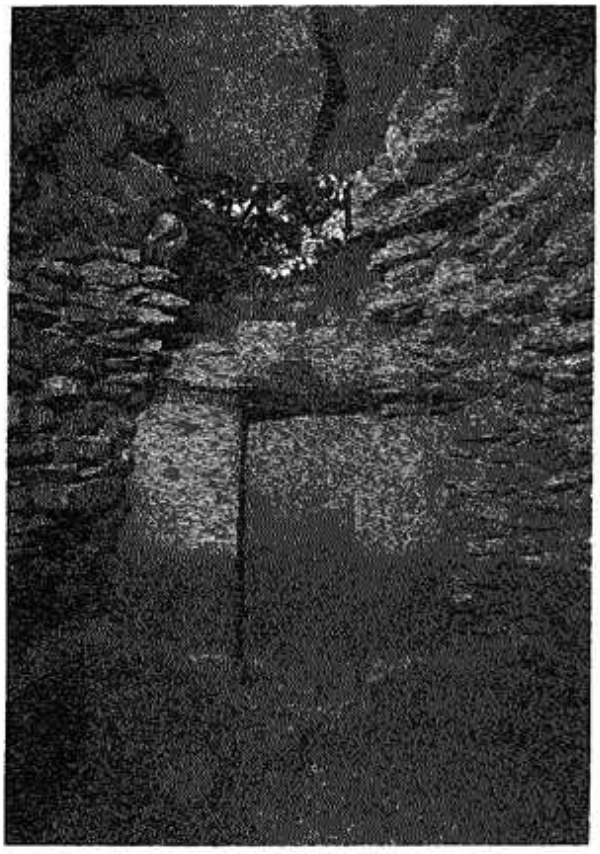
梅原末治「備中千足の装飾古墳」1938年より転載（一部改変）

ない。

というのは、この種の石室の羨道部の構造が明らかな例は従来あまり知られておらず、新たな知見をいくつか提供することができたという点でも評価できるからである。

石障系横穴式石室については、小林行雄氏[6]・乙益重隆氏[7]・三島格氏[8]・柳沢一男氏[9]・河野法子氏[10]らをはじめとして多くの研究が知られている。

ヤンボシ塚古墳を除く石障系横穴式石室28例（熊本県21例、福岡県２例、佐賀県２例、島根県１例、岡山県１例、三重県１例）の玄門部構造を検討していくなかで、ヤンボシ塚古墳のそれと近似するものをさがせば、佐賀県小城郡小城町の丸山古墳[11]と岡山市新庄下の千足古墳[12]の２例を挙げることができる。丸山古墳の石室実測図は公表されたものがなく詳細を検討することはできないが、写真による限りでは袖石は左右それぞれ一石ではなくやや長めの玄門で石障のU字形刳りこみは深い。羨道閉塞部は広く、石積みも整っている。ヤンボシ塚古墳とはやや隔たりを感じる点があり、千足古墳がよりいっそうヤンボシ塚古墳に近い。



第18図　千足古墳玄門部〈石室内から〉
高橋　護（文）・中村昭夫（写真）『吉備の巨墳』山陽新聞社、1980年より転載

千足古墳石室実測図と玄門部写真をみながらヤンボシ塚古墳のそれを比較してみると、構造の点で極めて類似していることが判る。前障のU字形刳りこみがヤンボシ塚古墳のそれよりやや深い点や石材の違いを除けば、玄門部の構造は殆ど同じであるが、石障のあり方や装飾の位置などの点で石障系横穴式石室のなかではやや異質な点も明らかに持っている。

詳細は省くが、玄門部構造の変化と前障に施されたU字形刳りこみの変化の２点から石障系横穴式石室の変遷を辿ることが可能であると考えられる。

即ち、玄門部を小口積みにし極めて浅い刳りこみを施すものから、玄門部に袖石を立てU字形刳りこみを次第に深くしていくものに変化するわけであり、刳りこみを２段にするものは上部の段が後になるほど次第に誇張される。そこには自ずと玄室へ入りやすくするという指向が

うかがわれる。

ただ注意を要するのは羨道部内面に板石を立てる手法が、柳沢氏の指摘するごとく玄室の石障と同様の意味で立てられたらしいという点であり、これと袖石を立てるという行為とは区別して考えねばならない点である[13]。

この視点で羨道部袖石とU字形刳りこみの状態が明らかな古墳とヤンボシ塚古墳の相対的変化を考えれば、小坂大塚古墳・城1号墳・長砂連古墳・大戸鼻古墳・大鳳蔵尾張宮古墳より新しい要素をもち、千金甲1号墳・井寺古墳・小田良古墳・田川内甲古墳・丸山古墳・樋の口古墳・日輪寺古墳・千足古墳などより古いとみてよいことになるのである。その場合、長砂連古墳と千足古墳を近い時期のものと考え得ることからみれば、ヤンボシ塚古墳を含めた3古墳はほぼ同時期の所産とみることが可能となる。

装飾文様

ヤンボシ塚古墳を考えるうえでいまひとつ重要な点は装飾文様の存在である。石障に彫りこまれた円文と、玄門部・側壁に線刻された船がそれであり、この両者が併存していることもまた極めて重要な意味をもっている。

石障系横穴式石室に線刻・陰刻・陽刻の違いはあれ円文を表現したものは従来いくつか知られている。ヤンボシ塚古墳の円文は、左右の石障にそれぞれ3個ずつを並べたものと推定され、円文の表現方法は円の中を完全に彫りくぼめるものであった。

同種の石室のうち彩色のみによる円文を表現したものは、僅かに富ノ尾1号墳[14]の例だけであり、以前には円文と三角文が描かれていたというがそれも現状では確認し得ないほどのものとなっている。石障系石室の円文を検討してみるとその表現方法に微妙な相違があり多様であるが、ヤンボシ塚古墳と同様に円の中を彫りくぼめるものには大戸鼻北古墳[15]に知られている。この古墳の円文の全てがこの手法を用いているものではないし、ヤンボシ塚古墳に比較的至近に位置する小田良古墳[16]の円文が二重円文のうち外側の円は彫りくぼめその内側は彫り残すという手法でありやや近い。しかし、これには上下方向にのびる線があらわされそれが的を表現するのではないかという指摘[17][18]がなされるなど、極めて単純な円文を表現するヤンボシ塚古墳とは隔たりがある。

石障系横穴式石室以外において円の中を完全に彫りくぼめるものとして、下益城郡中央町中郡の中郡古墳の例[19]がある。家形石棺の棺身内壁四方に円文を表現したものであり、ややいびつで円の中を完全に均等に彫りくぼめていないなど稚拙さを感じるが、直径14～18cmの円のなかを2～4mm彫りくぼめようとした意図は明らかにうかがうことができる。

また、円文3個という表現は、この種の石室や石棺によくみられることでありそれがどのような意図で並べられたものか、あるいは円文にどのような意味があるかなど、探求されるべき要素は多い[20]。

石室内の2ヶ所に船の線刻がみられたことは、まさに意外というほかはなかった。というのは、この種の石障系横穴式石室に船の線刻が知られているものは全くないからであり、この種の線刻が従来、6世紀後半以降の古墳に限られるという先入観があったからである。

ヤンボシ塚古墳の2艘の船の線刻が初葬時のものか追葬時のものであるかは明確でないが、それが石室構築最終段階以降ないしは追葬時のものである可能性が高いことは、刻まれた線のなかに赤色顔料の付着がみられない点からも十分考えられるところである。追葬時のものであるとしてもその年代幅を示すような遺物は全く知られていないところから、その根拠は全く示し得ないというのが実情であるが、あえてそれに言及するとすれば、初葬時からあまり経っていない頃と考えて30年前後、余裕をもてば50年くらいまでに最終埋葬が行なわれ、その間に描かれたとみておきたい。帆船の例としては、土器や埴輪などに描かれたものも含めて我が国最古例となる可能性が高い。

管見によれば、横穴式石室に線刻で船を表現した例は全国で28例あり、今回発見されたヤンボシ塚古墳を除いた全てについてみてみると6世紀後半以降と考えられている。熊本県下の8例はいずれも宇土半島ないしはその周辺に限られる点を考えれば、地域的には石障系古墳と重複することになってヤンボシ塚古墳に線刻があっても不思議ではなく、むしろ当然のことといわねばならない。

年　代

ヤンボシ塚古墳の年代を考える上で重要なのは土師器高坏の存在である。しかし、これがただ1点だけで脚柱状部のみという極めて不確かな根拠にたよらざるを得ず、しかも弥生式土器が混入しているという状況を考えれば極めて根拠薄弱というほかない。

土師器の編年は、古式土師器を中心として研究が進められつつありほぼ編年が確立しているといえるが、須恵器出現後の土師器の編年は必ずしも出来ていないというのが実情である。

古式土師器の編年案は野田拓治氏によって作成[21]され、初期須恵器出現までの土師器を3期に分け、その最後の段階に塚原Ⅰ期、須恵器出現後の最初の段階に塚原Ⅱ期を充てられている。ヤンボシ塚古墳の高坏は野田氏のいう塚原Ⅱ期に近い段階に位置するものと考えられるが、いまひとつきめ手を欠くというのが実情である。

石室内出土遺物は鍬先の他にみるべきものはなく、時期を推定する根拠とはなり得ないが、この種の鉄器が4世紀後半から5世紀後半の古墳にみられる傾向であることは指摘できる。

石室構造・装飾文様・出土遺物、更には近隣の城1号墳・城2号墳とを比べることによってヤンボシ塚古墳の年代を類推することは可能となってくる。特に石室構造の点からは長砂連古墳・千足古墳とほぼ同時期の5世紀の第3四半期頃に位置づけできるのであるが、円文の彫られた時期（古墳築造時）と船の線刻が刻まれた時期（追葬時の可能性もある）には追葬の時間幅を想定して5世紀第4四半期に入っていたことは考えておく必要があろう。それでもなお、

他の古墳の線刻船との時期的な差は大きく70年あるいはそれ以上の隔たりが残ることになる。この空隙を埋める古墳が発見されることを予測しておくにとどめたい。

城1号墳・城2号墳との比較の点からみれば、玄門部構造の変化から柳沢一男氏が想定[22]した竪穴系横口式石室の横口部構造をそのまま採用したかたちで、城2号墳(竪穴系横口式石室)→城1号墳（石障系横穴式石室）→ヤンボシ塚古墳（石障系横穴式石室）への変遷をとらえることは可能である。それでも城1号墳の羨道部の構造がいまひとつ確かでないのは惜しまれる。

（高木）

註 (1) 富樫卯三郎・卯野木盈二「宇土市下網田町マブシ出土の石棺ーマブシ古墳群の所在ー」『宇土半島自然と文化』宇土半島研究会、1975年、宇土。

(2) 三島格他「城二号墳ー宇土市上網田町字城所在城二号墳調査報告ー」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第3集、1981年、宇土。

(3) 富樫卯三郎「小松古墳」『宇土市の文化財』第3集、1977年、宇土。

(4) 富樫卯三郎「考古ノートー宇土市長浜町井崎～同町小松ー」『宇土市史研究』第5号、1984年、宇土。

(5) 富樫卯三郎「網田古墳群」註(3)書所収。

(6) 小林行雄『装飾古墳』平凡社、1964年、東京。

(7) 乙益重隆「石障系石室の成立」『國學院大學大學院紀要』第11輯、1980年、東京。

(8) 三島格「古代の百済と肥後」『韓・日國際学術シンポジウム　韓・日間の文化的特性と脈絡に対する再照明』大田日報社、1984年、韓国大田。

(9) 柳沢一男「肥後型横穴式石室考ー初期横穴式石室の系譜ー」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』1980年、太宰府。

(10) 河野法子「石障系古墳の一考察」『肥後考古』第2号、肥後考古学会、1982年、熊本。

(11) 註(9)書所収写真による。

(12) 梅原末治「備中千足の装飾古墳」『日本古文化研究所報告』9、1938年、東京。

(13) 註(9)書に同じ。

(14) 梅原末治「熊本県下に於ける石人と其の表飾の古墳」『熊本縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第2冊、1925年、熊本。

(15) 浜田耕作「阿村大戸北古墳」『京都帝國大學文學部考古學研究報告』第1冊、1917年、京都。

(16) 松本・隈・江本『小田良古墳』三角町、1979年、三角。

(17) 板楠和子「有明文化圏の形成」『古代の地方史1西海編』朝倉書店、1977年、東京。

(18) 乙益重隆「装飾古墳壁画の一解釈ー楯と靫と同心円文ー」『瀧川政次郎先生米寿記念論文集神道史論叢』国書刊行会、1984年、東京。

(19) 伊藤奎二他「熊本県中郡楠原の装飾ある家形石棺」『熊本史学』第31号、1966年、熊本。

(20) 松本雅明「円文の推移」註(16)書所収。

(21) 野田拓治「古式土師器の成立と展開—特に中部九州における編年試案—」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982年、福岡。

(22) 註(9)書に同じ。

第2章　楢崎古墳

第1節　序説

1．はじめに

眼下に立岡池・花園池を望む丘陵先端部の一画に数基の石棺が発見されたのは大正10年10月のことであった。太子堂を建てる目的でその基礎工事を行なった際に検出されたものであり、計画を変更して太子堂は別の場所に移転し古墳は県史蹟委員（古賀徳義氏・下林繁夫氏）によって学術調査が行なわれた[1]。翌11年1月には京都大学の梅原末治氏も現地をたずね、その概要調査を行なっている[2]。大正10年調査の直後から翌年1月の梅原氏来訪の間には石棺保存のための覆屋2棟が建てられ、調査報告にその写真が掲載されている。

この覆屋は文化財保護施設としては熊本県下でも早い時期に属するものであり、当時の文化財に対するとりくみの早さと熱意には改めて感心せざるを得ない。ところがその覆屋も時の経過と共に朽ち果て、戦後まもない頃までに存したという屋根もなくなり、その後30年以上も石棺は風雨にさらされ石棺の傷み具合は憂うべき状態であり、その状況は調査着手直前まで続いた。

昭和43年には崖下を通る市道拡張のために墳丘南側の一部が削平をうけ、更には大形レジャー施設である「ひのくにランド株式会社」が古墳を含めた一帯の用地買収を行なって昭和50年3月にオープンした。その駐車場のため古墳周辺の地形は著しく変化することになったが、さいわい墳丘を回避した形で工事が行なわれたため古墳はそのまま保存されることになり、昭和50年11月11日付で県の指定史跡となったのである。

以後、ひのくにランド株式会社の管理のもと定期的な除草管理も行なわれてきたのであるが軟質材で知られる阿蘇溶結凝灰岩製の石棺は露出したままの状態で雨・露や霜にさらされ、日に日に傷みがはげしくなっていった。ところが、当地方で埋葬施設を直接的に見学できる古墳は殆ど知られておらずしかも著名な古墳であるということからこの古墳を訪れる人は多く、石棺の惨状を歎く見学者の声や文化財指導委員、地元有識者の石棺保存対策への意見が相次いで聞かれるようになった。

これらの意見をうけて市教育委員会では、県教育委員会や市文化財保護審議会の提言を得て、緊急に保存対策を講じる必要があるという方針をかため本事業の調査予定を変更してこの楢崎古墳の墳丘確認・石棺詳細調査と周辺地域分布調査を実施することとなったのである。

昭和59年度に当該分布調査事業においてこの古墳の地形測量を実施し、その成果は「女夫塚

古墳」(『宇土半島基部古墳群分布調査報告（IV)』）に収録したところであるが、地形測量によっても前方後円墳であると明確に断定できないまま規模の推定を行なった。

今年度の調査は昭和60年12月10日から着手し次節に記すような経過で調査を進めたが、1号石棺棺内に大正10年調査時の掘り残しと思われる鉄鏃2本を検出することができたことは、その当時の出土遺物そのものの写真や実測図が全く残されていないなかで極めて重要な発見であった。

しかも、調査途上において地権者である「ひのくにランド株式会社」より古墳部分の土地を寄付したいという旨の申し入れがあるなど、本調査が意外な方向へ展開することになり、今後の保存対策がいっそう重要性を帯びることになる。ただ、墳形確認のために墳丘各所に設定したトレンチによっても墳形を決定する要素が得られなかった点は惜しまれ、将来に課題を残すこととなった。

これまで各方面の努力により当古墳が保存されてきたのであり、今後はそれを受けついで最善の方法によって後世に伝える必要がある。(高木)

註 (1) 梅原・古賀・下林「宇土郡楯崎の古墳」『熊本縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第2冊、1925年、熊本。

(2) 梅原末治「肥後國楯崎の古墳に就て」『歴史と地理』第12巻第5號、1923年、京都。

2．調査の経過

今回の楯崎古墳の発掘調査は、昭和60年12月10日から昭和61年2月27日までの間行なった。調査に費した実日数は48日間である。

12月10日　調査関係者一同発掘調査の無事を祈願する。機材を搬入し、作業に取りかかる。散在していた石棺材を集め簡単な復原を行う。

12月11日　1号棺から鉄鏃が2本出土する。

12月12日　1号・3号棺の床面の確認。

12月13日　1号～3号棺の墓壙の発掘（～26日）。

12月26日　5号棺の発掘開始（～1月9日）。

1月9日　各棺実測用の杭打ち。墳丘トレンチ設定。

1月10日　後円部トレンチ発掘開始（～23日）。

1月23日　東側くびれ部トレンチ発掘開始（～27日）。

1月28日　前方部トレンチ発掘開始（～30日）。

1月30日　西側くびれ部トレンチ発掘開始（～2月5日）。

1月31日　5号棺発掘再開（～2月7日）。

2月6日　1号・3号・4号棺の蓋石復原。

2月8日　三島格先生・甲元眞之先生他現地来訪。

2月10日　指導にもとづいて西側くびれ部トレンチを拡張する（～17日）。

2月20日　各棺の工具痕を採拓（～21日）。

2月21日　各棺を埋め戻す（～27日）。

2月24日　各トレンチを埋め戻す（～26日）。

2月25日　周辺部の踏査。古墳1基確認（山下古墳）、埴輪採集。

2月27日　石棺をシートで覆い、調査を終了する。　（木下）

3．調査の組織（敬称略）

調査主体　宇土市教育委員会

教育長　船田　至

調査総括　社会教育課長　本郷裕幸

文化振興係長　一　宗雄

調査庶務　参事　中野照子

調査担当　主事　高木恭二

主事　木下洋介

調査補助　松尾正義・松内邦子・井芹光子・白石節子・若松ノブエ・園川キヌ子・元松茂樹・沢宮優

調査指導　富樫卯三郎（宇土市文化財保護審議委員）

三島　格　（肥後考古学会々長）

安原啓示　（奈良国立文化財研究所保存工学室長）

隈　昭志　（熊本県教育委員会文化課主幹）

松本幡郎　（熊本大学理学部教授）

甲元眞之　（熊本大学文学部助教授）

遺物処理　㈱元興寺文化財研究所

遺物整理　木下俊恵・川西賀世子・松尾理絵・竹下真由美

調査協力　ひのくにランド株式会社

桑原憲彰・村井真輝・島津義昭・松本健郎・高木正文・野田拓治・浦田信智・山崎純男・角　浩之・久保和士・竹田宏司・稲津暢洋・青木勝士

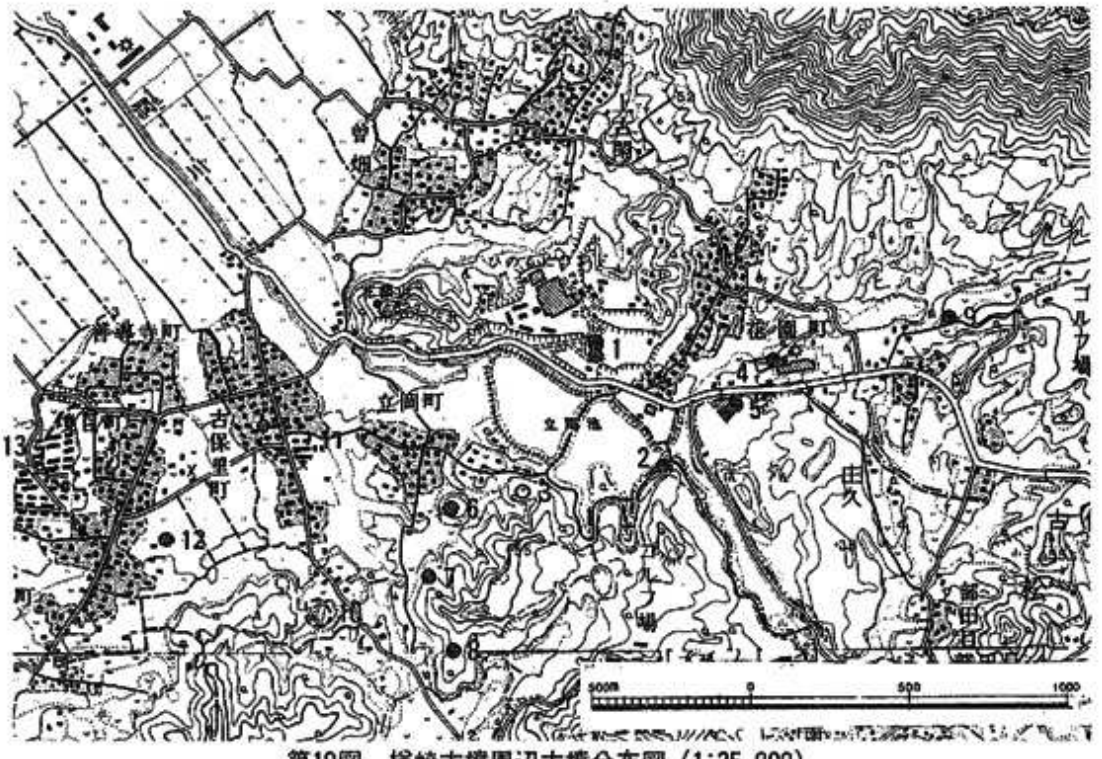
（木下）

第２節　立地と環境

熊本県中央部の宇土市から西に突出した宇土半島は、主峰の大岳（標高478m）から延びる丘陵とその谷間の小規模な平野部から成っている。その宇土半島のつけ根にあたる基部地域は、半島から延びる丘陵と雁回山（標高314m）から派生する低い丘陵との間に狭隘な平野部を形成している。この狭隘な平野部は、北側の熊本平野と南側の八代平野とを結ぶ唯一の平野部と言え、最も狭いところで約１kmの幅しかないが、古今を問わず陸上交通の重要な拠点となっている。

楯崎古墳は、宇土市街から東南東側に約３km離れた雁回山の南西側裾部にあたる。宇土市花園町字楯崎428－２に所在している。

古墳時代の宇土半島基部地域には、墳丘をもたないような小さな石棺墓から、100mを超える巨大な前方後円墳まで大小様々な古墳が数多く集中しており、宇土半島基部古墳群の名称で知られている。この基部古墳群の中で最も注目されるのは、12基（女塚古墳も加えると13基になる）を数える前方後円墳群である。九州内でも100m級を含む前方後円墳が10基以上集中してい



第19図　楯崎古墳周辺古墳分布図（1:25,000）

1．楯崎古墳　2．山下古墳　3．古墳参考地　4．女塚古墳　5．男塚古墳
6．晩免古墳　7．潤野古墳　8．西潤野古墳　9．鬼の岩屋古墳
10．神ノ山古墳群　11．古保里箱式石棺群　12．上松山箱式石棺
13．境目箱式石棺群

る地域というのは数少なく、基部古墳群は、かなりの勢力をもった前方後円墳群であったということが推測される。これらの前方後円墳は、大別すると、基部地域にある狭い平野部を挟んで東西に向かい合うように2群に分かれて位置している[(1)(2)]。東側の雁回山から南側に延びる丘陵上にあるのは、向野田古墳〔全長86m〕・御手水古墳〔全長65m〕・松橋大塚古墳〔全長79m〕・楢崎古墳〔全長45m〕・女夫塚古墳（男塚）〔全長46m〕の5基（女塚を加えると6基）であり、西側の宇土半島の山塊から延びる丘陵上にあるのは、天神山古墳〔全長110m〕・スリバチ山古墳〔全長100m〕・迫の上古墳〔全長58m〕・城の越古墳〔全長49m〕・仁王塚古墳〔全長47m〕・弁天山古墳〔全長53m〕・国越古墳〔全長65m〕の7基である。築造時期がある程度推測できるものとして、前期の弁天山古墳・迫の上古墳、前期末の向野田古墳、後期の国越古墳・女夫塚（男塚）古墳と古墳時代のほぼ全時期にわたって前方後円墳が築かれており、長い間にわたって強大な勢力を保っていたことがわかる。

楢崎古墳周辺の花園・立岡地区には、中期から後期にかけての古墳が集まっている。楢崎古墳の東側約400mの台地上には、後期の築造と考えられる全長46mの小型の前方後円墳である女夫塚（男塚）古墳があり、その東北東約150mには、男塚と近い時期の築造であり、前方後円墳と思われる女夫塚（女塚）古墳[(3)]がある。女塚古墳の東北東約500mには、巨石を用いた横穴式石室をもつ三日鬼の岩屋古墳がある。楢崎古墳のある丘陵から立岡・花園池を隔てた南側の丘陵上には、山下・晩免・潤野・西潤野古墳がある。山下古墳は、直径約20mの円墳であり埴輪片などが採集されている（本書第3章第2節参照）。晩免古墳は、独立した丘陵上にあり円文などの装飾を施した家形石棺をもつ中期の円墳であるが、装飾文様の中に菊花文をもっているということで、「安徳天皇陵墓参考地」となっている[(4)]。潤野古墳は、晩免古墳と同じ様に装飾を施した家形石棺をもつ。西潤野古墳は、小型の箱式石棺と蓋石が家形をした石蓋土壙をもつ。

花園・立岡地区の古墳の概要を挙げてみたが、宇土半島基部地域全体から見てみると少々異なった性格をもっており、他の古墳との関係がどのようであったか注目されよう。　（元松）

註 (1) 富樫卯三郎「向野田古墳」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第2集、1978年、宇土。

(2) 佐藤伸二「宇土半島をめぐる古墳文化の諸問題 ── 向野田古墳を中心として ──」『肥後考古学会誌』創刊号、1981年、熊本。

(3) 高木恭二、木下洋介「女夫塚古墳（女塚）」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第11集、1985年、宇土。

(4) 小杉榲邨「肥後國に埋蔵するめづらしき石棺」『帝國古蹟取調會々報』第3号、1902年、東京。

第3節　調査の記録

1．墳　　丘

大正10年の発掘調査後既に65年の期日が経っており、発掘当時の写真と現地形を見比べればその間にも封土の流失はなおすすんだようである。当時の墳丘観察で梅原氏[1]は、次のように述べている。

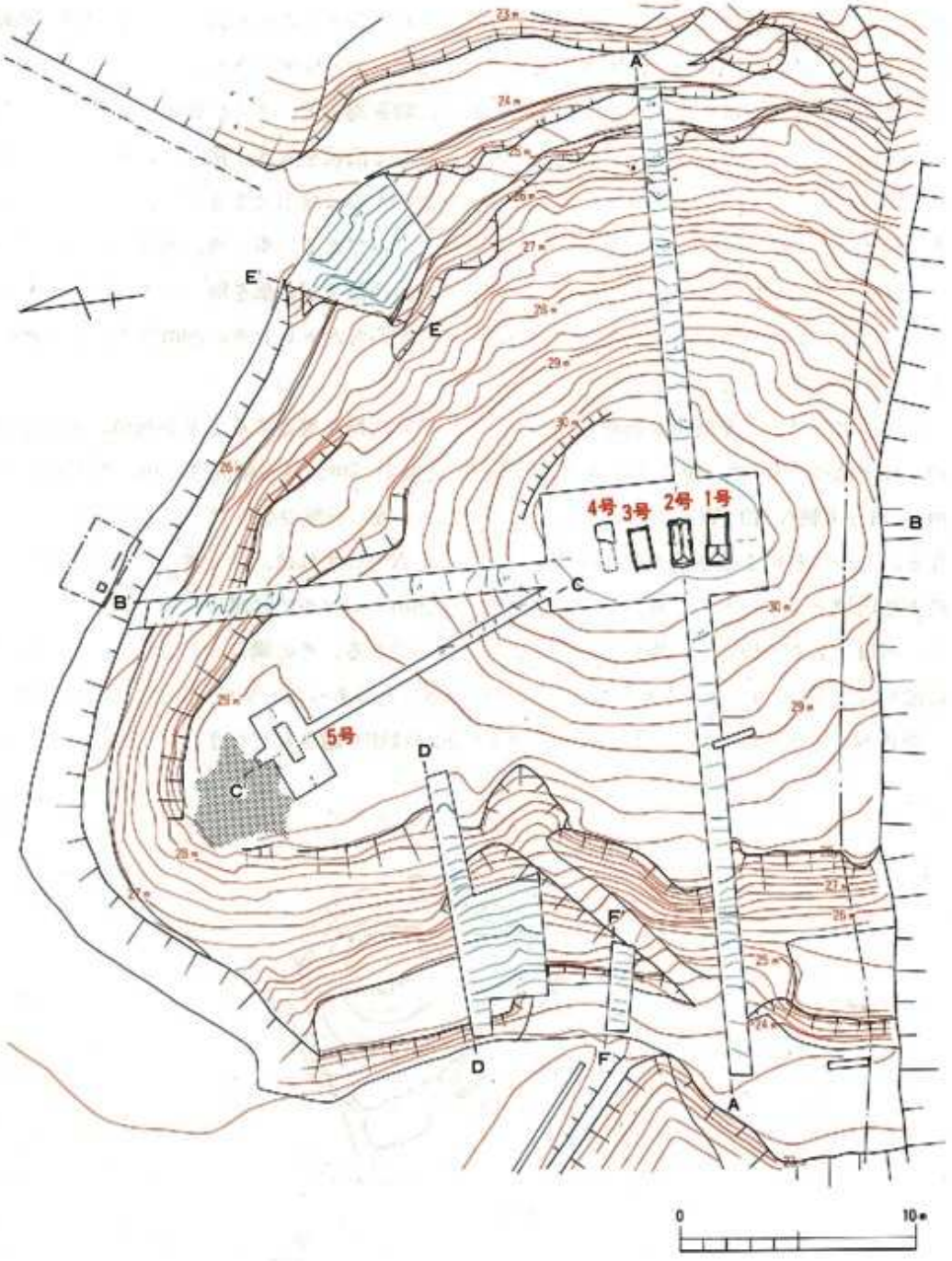
…、その一部に人工を加へたかと思はるゝクビレ状の處があるので、西の方から望む時は丁度北向の前方後圓墳の様な形を示し（口繪の(1)参照）實地を見ても或はそれかと疑はるゝ點がある。然し精細に調べるとその前方部となるべき部分や、前の切割りと思つたのは實は自然の丘陵の形らしく、此の部分には後にも附記する様に別個の箱式棺が埋葬せられてあつて、どうも四棺のある塚とは封土を異にしたものとするのが穏當の様である。でやはり丘陵の端に設けられた一の丸塚と見るのが誤らない観察と思ふ。現状に依るにかく考定して測つた封土の底徑は約十五間で、高さ一間半内外を示してゐるが、…

という結果を提示し円墳であるという結論を出されている。しかしその折には地形測量は実施されなかったようで、その後昭和43年1月に宇土高校社会部によって作成された300分の1の地形測量図[2]が唯一のものであった。惜しいことに測量の範囲が極めて狭く、コンタも1m（一部は50cm。）と大雑把であり、更には北方の丘陵基部側は立ち入り不可能であったため測量図はやや不完全なものとなっている。それでも大幅な地形の改変をうけてしまった現状ではそれにたよる他はないし、それでは前方後円墳であるかのごとき状況を呈している。

昭和50年の「ひのくにランド」建設に伴って残存墳丘基底面を辛うじて残した状態で周辺を削平されて駐車場となったため地形環境は大きく変化した。同年11月の県指定にあたっては前方後円墳として登録され、その後は前方後円墳として用い紹介されることが殆どである。昭和59年度事業においてこの古墳の地形測量を、25mコンタ・100分の1の平板測量で行なったのであるが、発掘調査を伴ったわけではなく明確に断定できないまま前方後円墳であろうという前提で推定規模を提示した[3]。

古墳が立地する丘陵の旧地形（第39図）を見ればわかるごとく花園山から南東方向に延びる舌状丘陵の先端部に楢崎古墳は位置するが、墳頂部から北西約70m付近を鞍部とした丘陵が古墳の部分で再び高さを増すという格好で立地していたのであるが、現状ではその丘陵もかなり変形をうけている。

今回の調査の第一の目的は、円墳であるか前方後円墳であるかを明確にすることと、今後の保存整備の基礎資料を得ることであり墳丘確認のため7ヶ所、石棺調査のため2ヶ所にトレンチを設定して発掘調査を実施した。



第20図　楢崎古墳地形測量図（1／300）

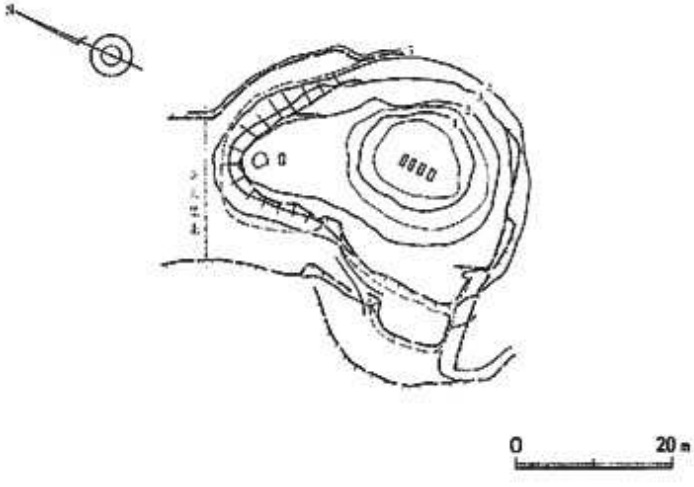
墳丘確認のために設定したトレンチは、4基並列する石棺のならびにあわせて北に1本、それと直交して東西に各1本、丘陵主軸に沿って後円部から前方部方向に1本、くびれ部墳丘裾部分で東に1本と西に2本の計7本である。前方後円墳であるとすれば葺石・埴輪・段築成・周溝などによって確認できたりその痕跡が残ることが十分考えられるのであるが、葺石・埴輪・周溝は古墳築造当時から既に採用されなかったようで、全く検出できなかった。

土層も、基本的には地山（頁岩風化土）の直上に暗茶褐色土、さらに腐植土がのるという極めて単純なものであるが、長年月の封土の流失によって旧状を大きく損なったものとみられる。

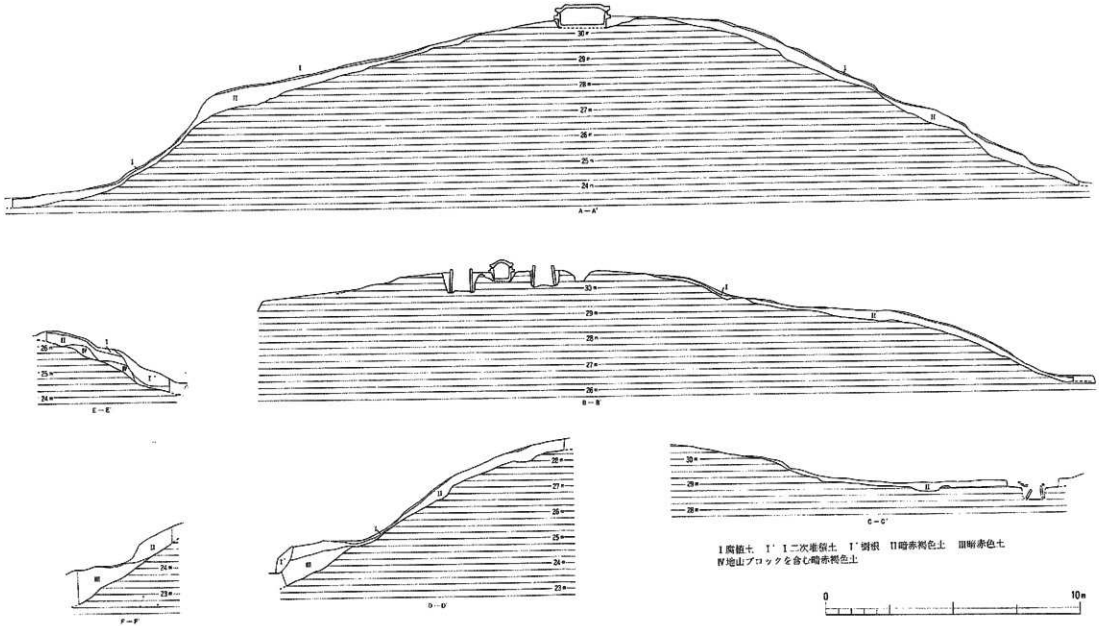
段築成についてもそれを明確に示すような決定的なものは検出はできず、可能性として数ヶ所の急傾斜から緩傾斜にかわる変化点を確認し得たのみである。東、西、西側くびれ部において共通するその変化点は24mと27mのラインであり、西側くびれ部を除いた東、西トレンチにおいては更に28.6〜28.8mのラインに段がつきそれが西北西トレンチの29mラインとも合致することから、後円部を一周するものとなっている。

この24mのコンタを墳丘基底面として前方後円墳の規模を推定すると全長46m、後円部径35m、後円部高さ5.7m（復原値6.7m）、前方部推定幅21.5m、前方部高さ4m（推定復原値5m）、墳丘主軸N-19°-Wとなるであろうが後円部の4基の石棺のならびとはややずれることになる。しかし石棺1基を前方部の埋葬施設として位置づけすれば、計5基の埋葬施設をもった前方後円墳ということになる。変化点を一周する29mのレベルでは直径22mをはかることになり、円墳であると仮定した場合の規模とすることができる。その場合の高さは、現存墳頂最高位部からの差1.7mとなるが石棺棺蓋上約1mの盛り土があったとすれば高さは2.7mを測る。

西北西の埋葬施設1基は4基のそれとは条件的には切り離されてしまうことになってしまう



第21図　楢崎古墳旧地形測量図



第22図　横崎古墳土層断面図（1:150）

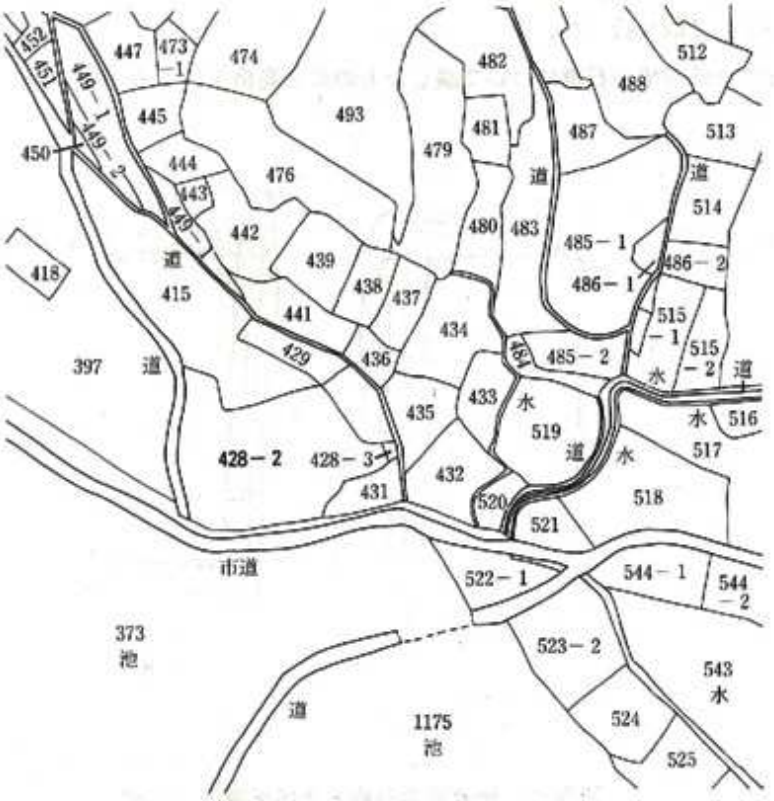
のであるが、例えこれが前方後円墳でなくなったとしても全く無関係に位置したと考える必要はなかろう。

ただ、この古墳が前方後円墳か円墳であるかの問題は多くの意味を内包することになり極めて重要な点である。その点については第4節で改めてふれることにしたい。

2．石棺・土壙墓

楢崎古墳が後円部に4基、前方部に1基の計5基のそれぞれ異なった埋葬施設を持つことは極めて異例の内容であり、そのうちの4基はほぼ並列するという規則性をもっている。大正10年の調査によって発見された折にはほぼ完全なままの状態で検出され、その直後に石棺保存のための覆屋がかけられるなどの方策がとられ石棺は良好な状態で残っていた。

4基の石棺はいずれも長軸を東西方向にむけて並列しており、南から順に1号棺（家形石棺）、2号棺（舟形石棺）、3号棺（家形石棺）、4号棺（石蓋土壙）と呼ぶ。1号と3号が家形であるという点を除けば、棺形態は3種あり前方部にあたる5号棺が箱式石棺であるのでこの古墳には4種類の埋葬施設が存在することになる。しかし、2号石棺は刳抜式であり棺身上端部周縁に舟べり状の縁辺突帯をもち、更には断面が逆台形を呈するなどの点から舟形石棺と呼ぶべきものであるが、棺身形態に対する誤解からこれまでは家形石棺としてとらえられてきた。



第23図　楢崎古墳付近旧字図（字、楢崎・池ノ口）

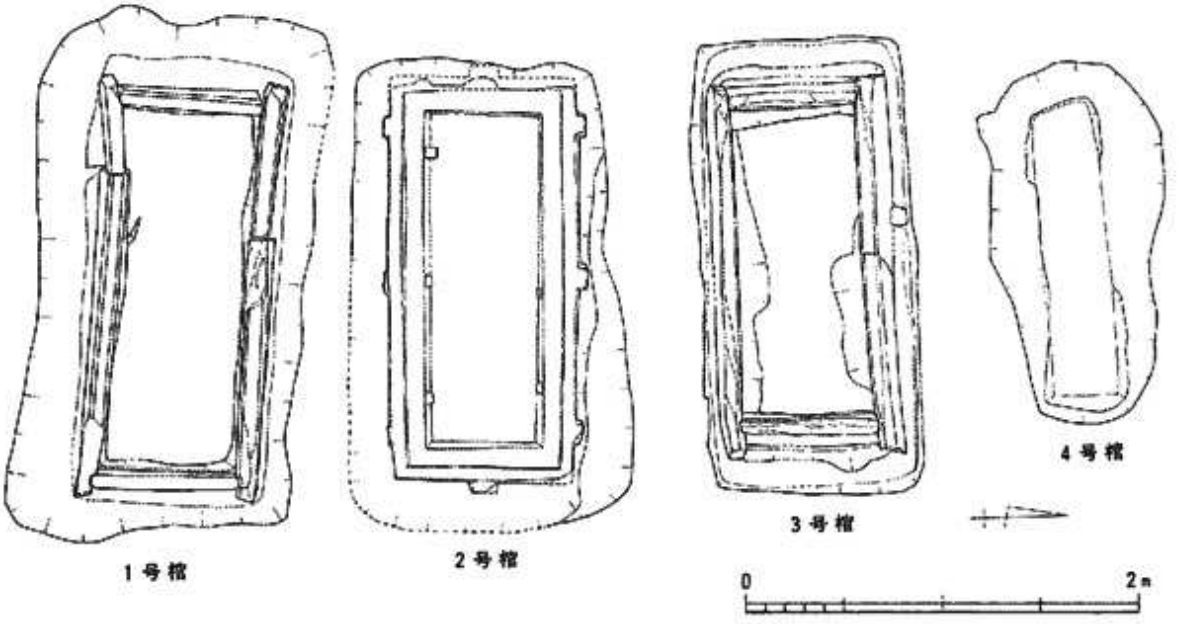
石棺実測図を作成してこの点を明らかにすることも今回の調査の重要な目的であったのである。

4基は西側小口部を一直線に揃えるかのようにしてほぼ並行しているが、限密には各石棺の間隔は、1号棺と2号棺の間が50～70cm、2号棺と3号棺の間が52～70cm、3号棺と4号棺の間が55～70cmである。この4基が、①同時に埋置されたものか、②時期を追って順次に埋められたものか、それとも、③江戸時代の立岡池・花園池開鑿時にその工事によって出土した石棺を1ヶ所に集めたものかなどいろいろと考えられるが、結論的には4基の並び具合やその他の条件からみてそれらは②の、時間があまり経たないうちに順次埋納されたものと推測される。

楢崎古墳の石棺は、さまざまな形態のものが共存しているという点から多くの人々の注目を受けることになり、比較検討する際の好資料として九州の石棺を論じる際には取りあげられることが多かった。

楢崎古墳石棺実測図は下林繁夫氏によって作成され、それが『歴史と地理』[4]や県報告[5]にも掲載されている。以後、その実測図を再録する形で各書に引用されたが、2号石棺については下林氏自身の表現方法に誤りがあったため、その誤りは各書においてそのまま受けつがれることになり、石棺の形状に対する認識そのものが誤ってしまうことになったのである。石棺分類の基準がいまひとつ確かでないために舟形・家形の名称をつけること自体、各研究者の間で完全に一致しているわけではなく必ずしも否定できるものでもないが、私見では舟形石棺とすべき形態のものとして取り扱った。

下林氏以後に楢崎古墳の石棺について論じたものに三島格氏による刀掛状突起を有する石棺



第24図　楢崎古墳石棺・土壙配置図（1:40）

の考察がある[6]。楢崎2号石棺を取りあげたものであるが、三島氏はその後楢崎古墳各石棺の実測図を作成し、刀掛状突起を有する石棺の追認作業を行ない、更には楢崎古墳の各石棺が江戸時代において掘鑿築造された立岡池・花園池の工事中に発見されたものをこの位置に一括して並置したものではないかという見解の当否を明らかにする目的で調査を実施され、各石棺が本来楢崎古墳に埋置されたものであることの確証を得ている。更に、昭和55年に熊本大学学生であった永田次郎氏をはじめとするグループは卒業論文に熊本県下の石棺の問題をとりあげ、その一連でこの古墳の石棺の実測を行なっているし、その翌年に筆者は『宇土市史研究』において肥後南部の石棺を整理する作業のひとつとして楢崎古墳の各石棺についても論じ、楢崎2号石棺が舟形石棺と呼ぶべきことを明らかにした[7]。

1号棺（家形石棺）

後円部の4基の石棺のうち最も南側に位置する石棺で、規模は最も大きい。石棺を安置するための墓壙は、上端で東西240cm、南北135～150cmの長方形プランを呈し、下端で東西230cm、南北102cm。床面中央部を残して周縁を掘りくぼめ、棺身材を立てる部分を深くしている。墓壙と石棺のすき間はかなり狭い。

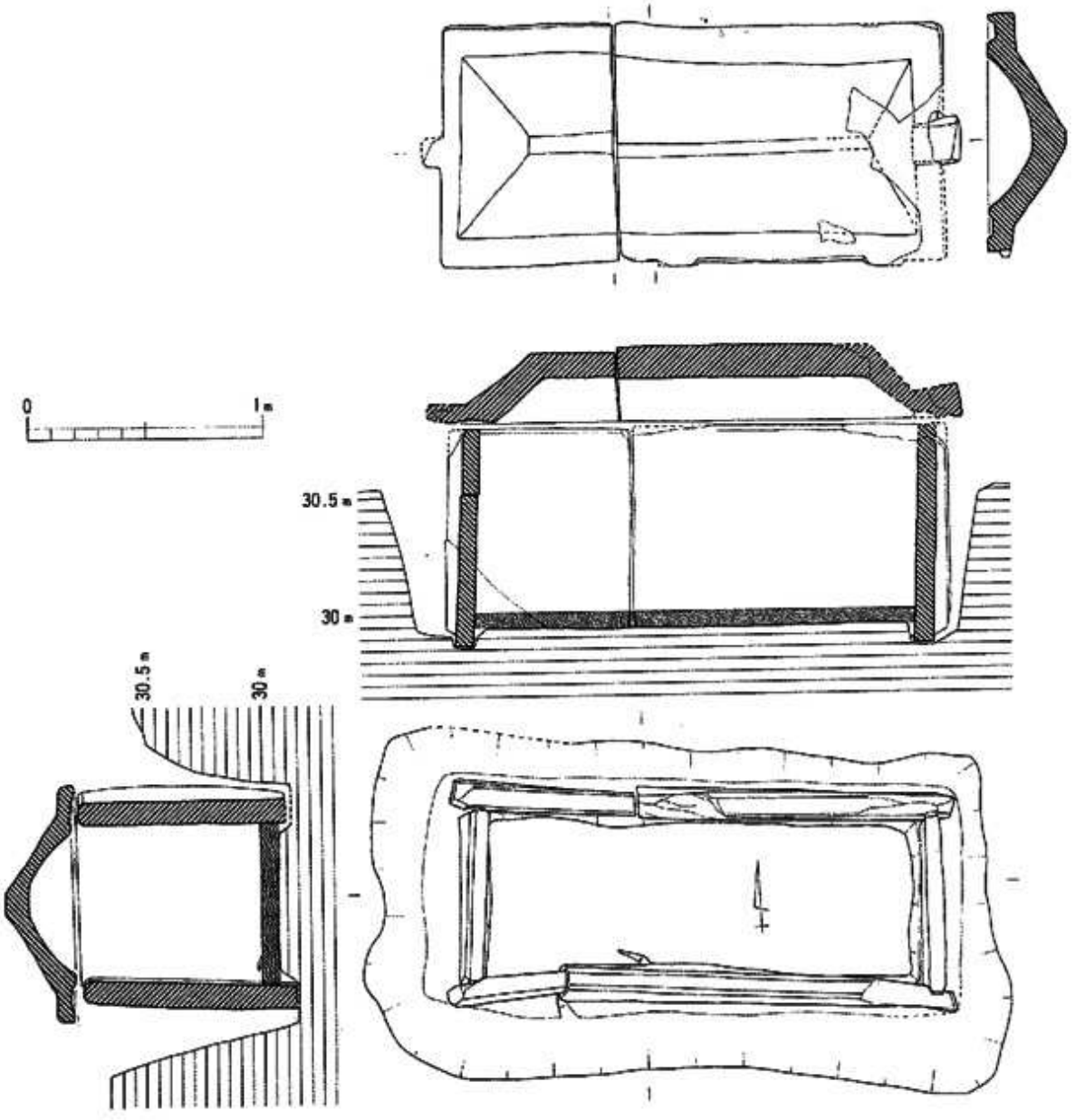
棺身は長側辺に各2石、小口に各1石の計6枚の阿蘇溶結凝灰岩製板石を用い、厚さは約7～10cm。組み合わせ式家形石棺である。一部にひびが入ったり上端が欠失したりしており、一部は内傾する部分もあるが、床面での内法は長さ188cm、幅70cm、深さ85cm(床面下地山面から棺身上端まで）をはかる。礫上面からは77cm。棺身長側辺が両小口石をはさみこむ状態で組みあわせており、小口石がはまる部分を溝状に刳り抜いている。なお、棺身内壁の全面に赤色顔料が付着している。

床面には約7.5cmの厚さで円礫（2.5cm×2.5cm、厚さ1.5cm平均）を敷いており、その多くには赤色顔料が付着している。大正10年調査時に頭蓋骨2、直刀2、鉄鏃若干が検出されその出土状態実測図（第26図）が掲載されてはいるが、個々の遺物実測図はなく、解説も殆どなされていないためその実体はあまり明らかでない。2体の頭蓋骨は東と西にそれぞれ位置しており対置埋葬であったとみられる。中央からやや西よりにあった大腿骨が東側頭蓋骨のものと思われ、南側周壁に沿って2本の直刀が、更には西側小口に近い位置に鉄鏃（3本？）が置かれていた。梅原氏は棺内の攪乱を考え西枕の伸展葬の単独被葬者を推測し、その判断を留保している。

今回の調査によってこの1号石棺から、当時の掘り残しとみられる鉄鏃2本が刃先を東にむけた状態でしかも円礫直上に検出することができ、副葬遺物の一端を知り得ることになった。しかもその位置は、大正調査時の鉄鏃の位置・方向とはやや異なり鉄刀2本の柄の付近にあたる。その当時検出されなかったことからみれば、鉄刀が今回の鉄鏃の位置よりやや浅い場所にあったのであろうか。

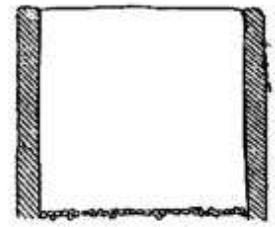
棺蓋は２石の阿蘇溶結凝灰岩を合わせる形で用いられているが、その形状や厚さに若干の違いがある。東側の棺蓋は長さ140cm（縄掛突起を含めると147cm）、幅101cm（縄掛突起を含めると103cm）、高さ33cmで、小口側に１個の柱状縄掛突起と長側辺の一方に２ヶ所の退化した矩形の突起がみられる。周縁に幅10～16cmの平坦面をめぐらし、上部は屋根形をなす。棺蓋裏面には棺身上端部に対応する溝をもつ。

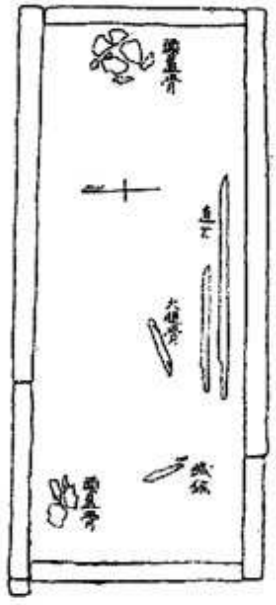
西側棺蓋は東側のそれの約半分である長さ76cm（縄掛突起を含めると81cm）、幅103cmであり、



第25図　楢崎古墳１号棺実測図（1:30）

東西の棺蓋をあわせた長さは216cm(両小口の円柱状縄掛突起を含めると228cm)となる。西側棺蓋も基本的には東側のそれと同一形態であるが小口の縄掛突起は極めて小さく、長側辺には縄掛突起をつくり出さない。しかも、周縁平坦面の幅も約7～15cmであり東側のものより少しせまく、頂部の棟幅は西側が7cm、東側が5～6cmであり若干の隔たりがある。厚さも違っており棟部での厚さは西側が10cm、東側が13.5cmである。棺蓋裏面の棺身に対応する溝は、西側のものほど顕著ではない。東西両棺蓋の内面に赤色顔料が付着している。





第26図　楢崎古墳1号棺
棺内〈大正10年〉

棺蓋に2石が用いられその形状や数値に微妙ながら違いがみられることは以上によって明らかとなったが、どうしてそのようなものが同一石棺の棺蓋に用いられたのかやや不思議な点である。梅原氏は『歴史と地理』紙上において、この楢崎1号石棺の棺蓋の異質性について、次のように記している。

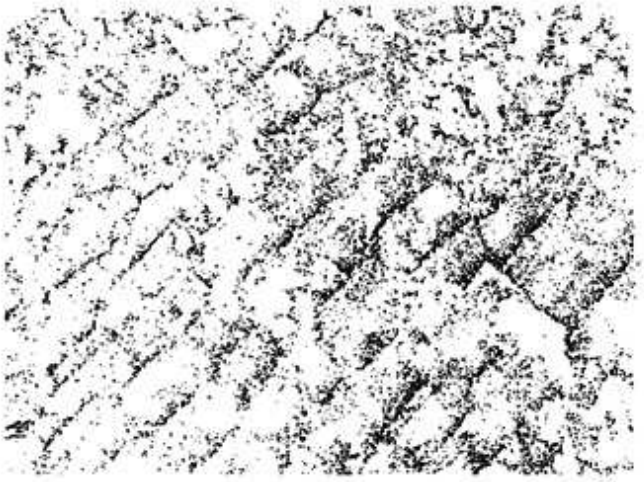
> …これが本来果して一の棺蓋として作られたものなりや否やに就いて疑念を懐くことを禁じ得ないのであって、此の場合一度破損した二個の蓋に修補を加へた結果かゝるものとなつたと見るのが最も穏當であると考へる。…

果たしてそうであろうか。本石棺のように棺蓋に2石を用いる家形石棺は他にもいくつか知られている。それらの中には、2石の棺蓋がほぼ同一の形状に造られたものもあるが、不思議なことに本例のように表現の上や技術の上で微妙に異なるものをあわせた例は意外に多いのである。それがどのような原因でそうなったのかはここでふれないとしても、それらの大半は最初から2石として別々に造られたもので、取り替えたり、補修を加えたりなどしたものではないと考えられる。

1号棺工具痕

石棺の製作は、石材の切り出しから基本的な完成品となるまでの工程を石材産地の近くで行ない、石棺として出来あがったものを古墳に運び埋置するという過程を経るものと考えられる。そのため山取り――粗造り――仕上げまでの全工程が石材産地で行なわれることになるのであるが、一部の古墳においては墓壙の埋土や封土から最終仕上げ段階において出たと思われる石屑が検出されるものもあり、最終仕上げが古墳の一面で行なわれたことを示すものもいくつか知られている。

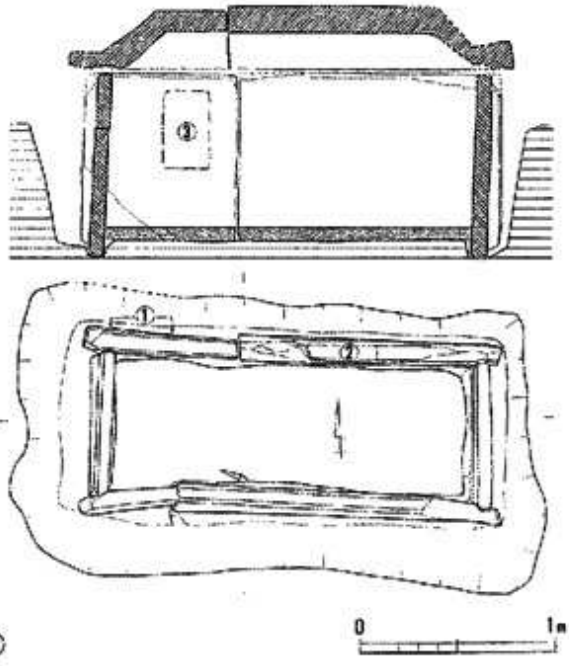
楢崎古墳においては、1号石棺墓壙内に2・3個の凝灰岩片が確認できた程度で、そのような石屑はほとんど検出されなかった。この古墳の石棺の最終仕上げがどこで行なわれたかを確



①

②

③



第27図　1号棺工具痕拓影（実測図1:40、拓本1:4）

認することは不可能に近いが、ここでは石棺にみられる工具痕を観察することによって、石棺製作技術を探るためや、今後の石棺修復作業のための基礎資料を得たいと考えている。

石棺にあらわれた工具痕を観察することが、用いられた工具や技術の解明に役立つことはいうまでもないことであるが、その痕跡がどのような工具を用いてどのような方法で出来た結果であるかを判断するのは容易ではない。

石工技術を解明するための研究はそれほど多くないが、中近世の絵巻や絵図にみえる石工の図や民俗例によってある程度は予測が可能である。石棺製作技術に関しては丸山竜平氏・置田雅昭氏・奥田尚氏・増田一裕氏・和田晴吾氏らの研究があり、その概要は次第に明らかになってきつつあるといえる。

特に和田氏が明らかにした石棺製作技術の復原作業[8]は、これまで明らかでなかった石棺製作工程とその技法を体系的に明らかにすることによってその変遷を把握することに成功しているし、今後の石棺研究の新たな一歩を切り拓いたものといえよう。

本調査においてはその点を明らかにすることとその実体解明のための基礎資料を得ることを目的とし、今後の石棺製作技術の解明に参考になればと思う次第である。

1号石棺において確認できる工具痕には3種類ある。棺身外側の墓壙によって埋められてしまう部分の処理は雑であり、あまり丁寧には仕上げていない。工具幅約3cmのチョーナ削り技法が用いられ、刳りこみはやや凹みをもついわゆる匙面取りとなっている(①)。棺蓋との合わせ目となる棺身上端側縁は面取りを施し、上端面の調整はチョーナで石棺面に対して打裂を加えたいわゆるチョーナ敲打技法が用いられている。この技法は、面の凹凸をなくすのに極めて効果的な方法であり、棺蓋・棺身のあわせを完全なものにしようとする意図が表れている(②)。棺身内壁のうち、床面の礫によって穏れる下底部約10cmは外面と同じく幅広のチョーナ削りであるが、それ以外の大半の内壁は、工具幅約1.5～2cmの細いチョーナ削りであり、その削りは浅くて平滑である(③)。

2号棺（舟形石棺）

棺身・棺蓋ともそれぞれ阿蘇溶結凝灰岩一石を刳り抜いたもので、従来、家形石棺として取り扱われてきたが舟べり状突帯をめぐらすことや棺身断面が逆台形を呈することから舟形石棺として分類されるべき形態のものであり、本書ではそれに統一した。

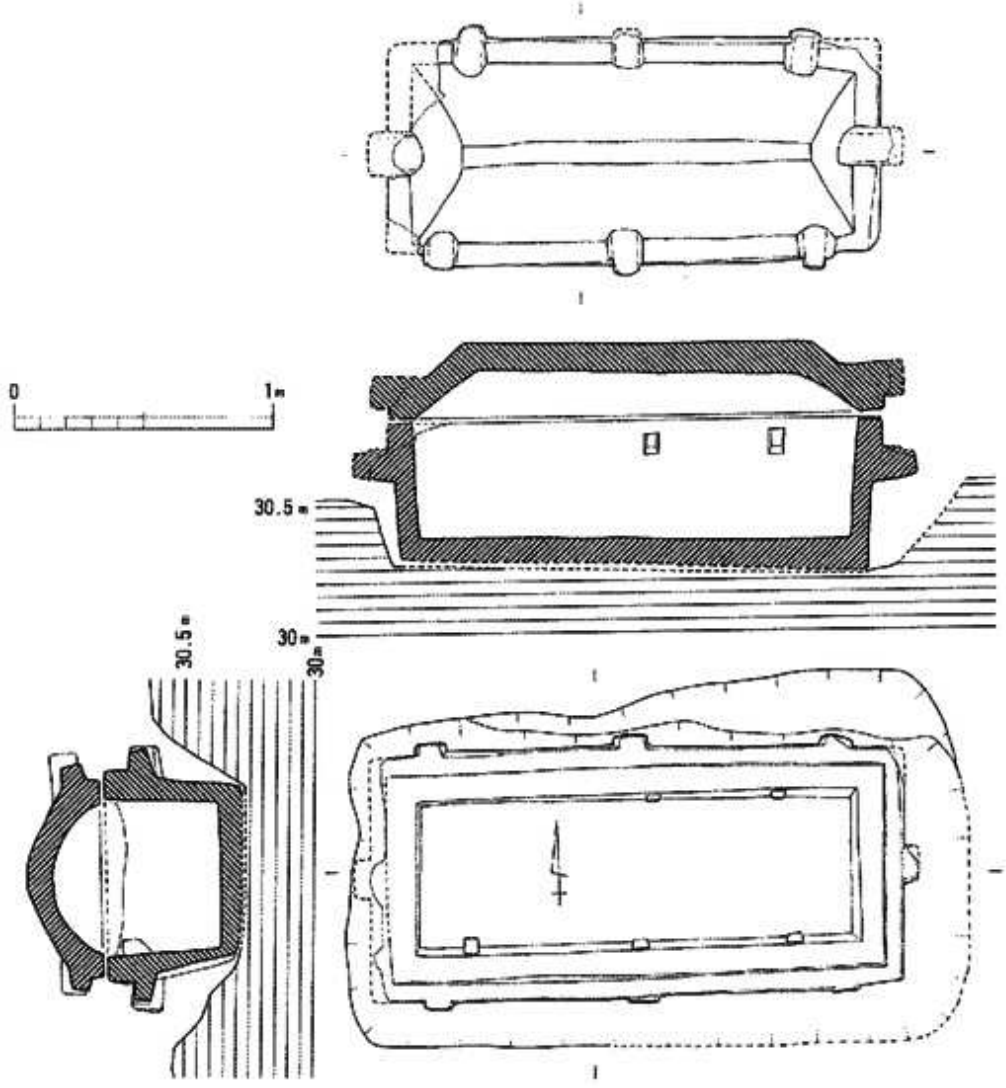
石棺を埋置するための墓壙は、一部、後世の攪乱によって不明確なところもあるが、上端で東西240cm・南北127cm、下端で東西195cm・南北65cmの逆台形を呈し、石棺を納めるだけのかなり小さな墓壙である。

棺身は長さ206cm(両小口の縄掛突起を含めた長さ219cm)、幅96cm(縄掛突起を含めた幅は104cm)、棺底から上端までの高さは53～58cm、棺身内の床面から上端までの深さは45～47cm、内法長さ172cm、内法幅60cmをはかる。長側辺に各3個、小口に各1個の計8個の円柱状縄掛突起を

つくり出し、上端から10cm下の周縁に幅7～10cmの舟べり状縁辺突帯をめぐらしている。棺身外側は底面にむけて斜めにせまくなって逆台形に近い形状で、底面とのコーナーには、若干の丸味をもっているが底は平坦に近い。棺身内側はほぼ垂直で矩形に刳り抜かれる。

棺身内壁の南側長側辺上方に3個、北側長側辺上方に2個の刀掛状突起を送り出す。突起は上部を平坦にし、下方に丸味をもたせる。突起上端は突出2～6cm・幅6～7cmをはかり、高さは8～11cm。3個の突起間の長さは132cmあり、そこには鎗ないしは矛が架せられていた可能性が考えられる。北側の2個は長さ54cmとなり剣ないしは刀をのせていたものであろう。

棺蓋も棺身と同様、長側辺に各3個、小口に各1個の縄掛突起をつくり出すが、この突起は下端に若干の刳りこみがあって、やや実用的な感がある。棺蓋頂部には幅6～9cmの棟をつく



第28図　楢崎古墳2号棺実測図（1:30）

り屋根形を呈し、下底周縁に幅9cmの平坦面を巡らす。棺蓋の長さ191cm(両小口の縄掛突起を含めた長さは207cm)、幅88cm（縄掛突起を含めると93cm）で、棺蓋頂部から棺身接合面までの棺蓋の高さは28cmであり、かなり扁平である。棺蓋に赤色顔料が付着していたかどうかは明確でないが、棺身にはみられるところからおそらく棺蓋にもついていたものであろう。

2号棺工具痕

棺身内壁にはチョウナ削り痕が左上がり方向に幅2cmで、幅広の、平割な仕上がりでみられ、その後に0.6～1.7cm程度のやや幅の狭いチョウナ痕が施されている。後でつけられた幅の狭い方の痕跡は小きざみに削られたもので、工具の幅は最大値1.7cmに近いとみたがよかろう（④)。棺身上端面の、棺蓋との合わせ面の仕上げはかなり丁寧である。そこにはチョウナ削り痕が幅1.2cmでかすかに残ってはいるがはっきりしない。あるいは磨きがかけられたことも考えられるが断定はできない。1・3号棺棺身上端面では明確にチョウナ敲打技法が用いられており、阿蘇溶結凝灰岩製石棺にはこの手法が一般的ではあるが、2号棺はやや違っている（⑤)。棺身外側にみられるチョウナ削り痕は、最大幅2cmであるが、右上がりののち水平方向につけられる（⑥)。

棺身内壁の長側辺に2個と3個の刀掛状突起がつくり出されていることは先に述べたが、この突起もチョウナ削りが施されている。工具幅0.8cm程度であるが、削りは匙面ぎみである（⑦)。

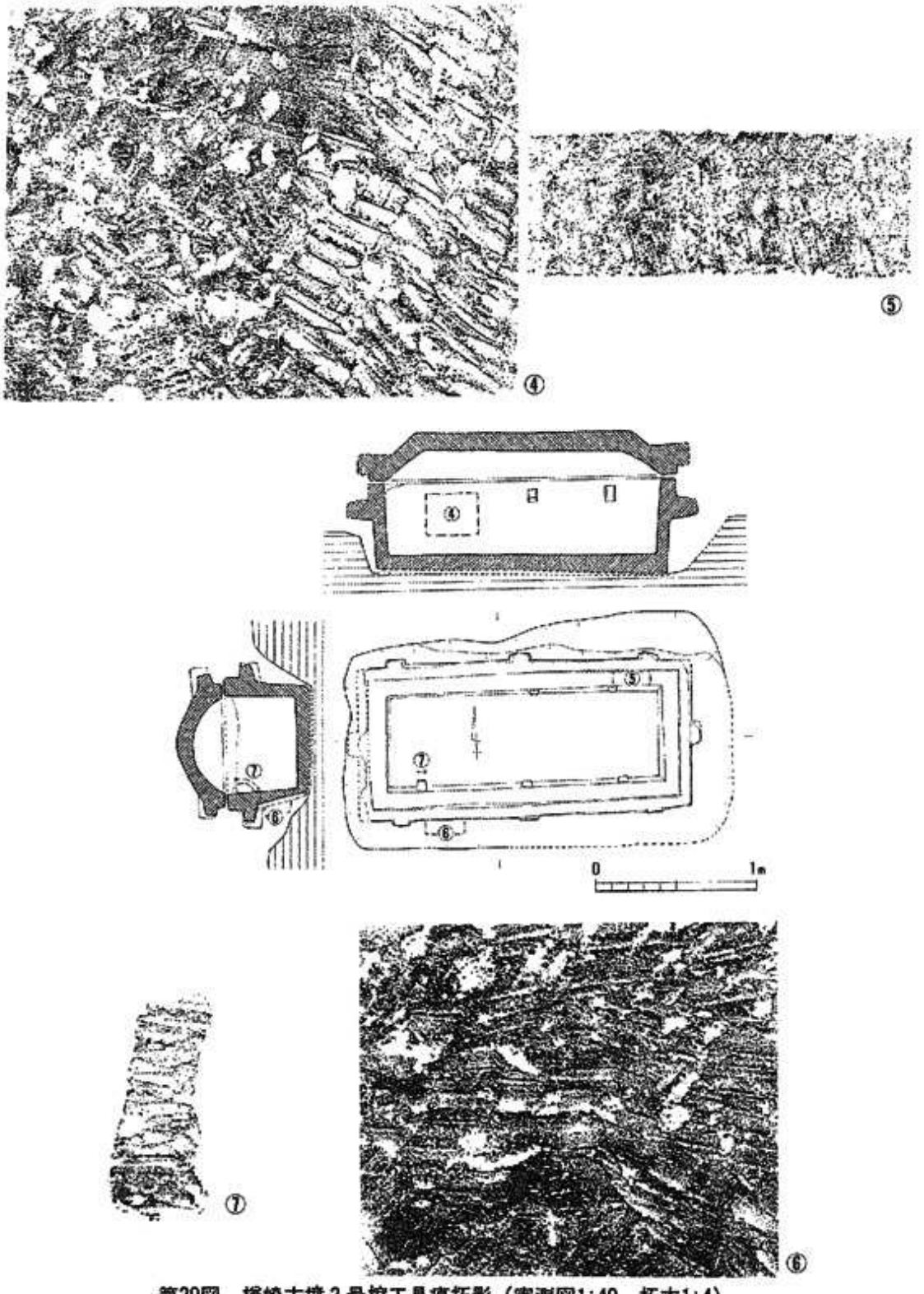
3号棺（家形石棺）

1号石棺と同じく組み合わせ式の家形石棺であるが、1号と異なるのは棺身が長側辺各1枚、小口各1枚の計4石でできていることと棺蓋が一石の刳り抜きであるという点である。その意味では、1号石棺が棺身長側辺と棺蓋とも2石であるのと全く異なる。3号石棺も棺身・棺蓋とも阿蘇溶結凝灰岩が用いられているが、これも石棺の傷みがひどく、特に棺身上端面がかなり剝落している。

石棺を埋置するための墓壙はせまく、石棺を納めるのにやっとの広さである。上端で東西232cm、南北107cm、下端では東西226cm、南北103cm、残存墓壙検出面から最深部までの深さは75cmをはかる。床面中央部を約13cm高く残して周縁（特に小口側）を掘りくぼめ棺身材を立てるところを深くしている。

棺身の組みあわせは1号石棺と同じく長側辺が小口石をはさみこむ形であり、これにも長側辺内面に溝状の刳りこみをつける。棺身は、内法長さ159cm、幅76cm、深さ75cm(床面下地山面から棺身上端まで）をはかる。内底に「川砂利」が敷かれていたと記されているが、1号ほどはっきりと残っておらず、その厚さ（壁面での痕跡から約7cm）は明確でない。しかも、人骨片が検出されたとも記されているが詳細は不明である。礫上面から棺身上端までは68cm。

棺蓋は1石が用いられ、両小口に各1個の円柱状縄掛突起をつくり出す。頂部に幅5～7cm



第29図　楯崎古墳２号棺工具痕拓影（実測図1:40、拓本1:4）

の棟をつくる屋根形で、周縁に幅9～12cmの平坦面をもつ。長さ201cm(両縄掛突起を含めれば222cm)、幅90cm、高さ35cmで、下底の棺身とのあわせ目には刳りこみをほどこしている。棺蓋棺身とも内壁には赤色顔料が付着している。

3号棺工具痕

棺身内壁の小口面はやや異質にみえる痕跡が残っていた。あたかもタガネ技法にみえる条痕風の技法ではあるが、これはチョウナの刃先を壁面に対して斜めにむけて削ったためにできたものであり、チョウナのコーナー部分での削りが壁面に深く残されたためで、これもチョウナ削り技法のひとつとみてよいであろう（⑧)。同じ内壁の長側辺は、2.5cmの幅広なチョウナを用いて削ったものであり、かなり平割で丁寧に仕上げている(⑨)。棺身外側のチョウナ削りは1号棺のそれと同様に、幅広（幅2.2cm）で甚面のつよい痕跡が残っている（⑩)。同じ棺身外側ではあるが長側石の小口面には、上端に近い部分と下半部の大半では明確に異なったチョウナ削り痕がある。上部のそれは幅0.4～1cmと極めて細くて丁寧な削りであり、下部は2.2cmの幅で大胆に削っている（⑪)。

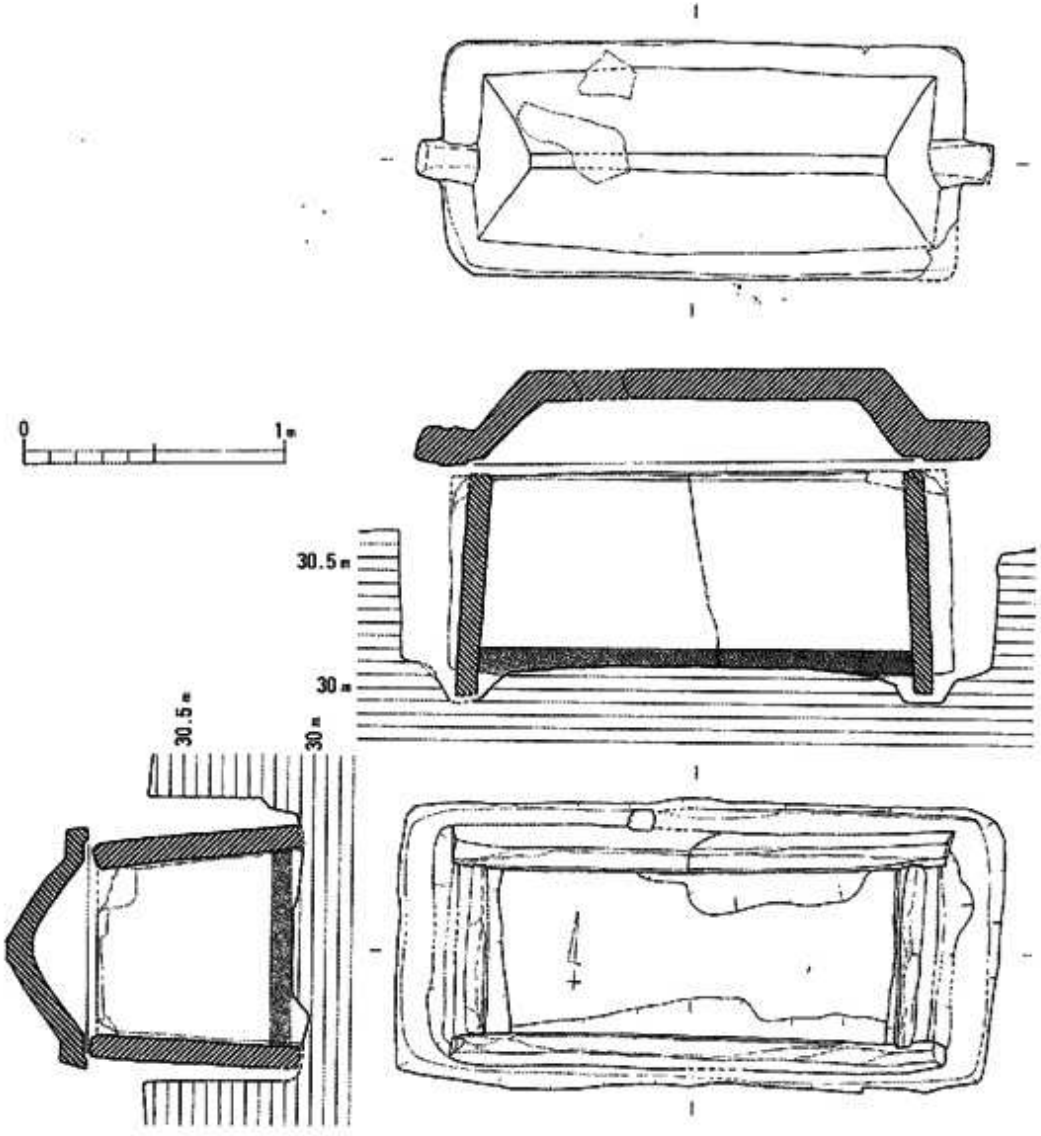
棺蓋下底面で、棺身との合わせ目となる部分には幅0.9cmのチョウナ削り痕が観察できるが、そのむきは棺蓋主軸と平行するものと直交するものの両方ある。ところが、この部分の更に外側で棺身を外側からはさみこむ形になるところの下底部にはチョウナ敲打技法が用いられている（⑫)。棺蓋内側の天井部にみられるのもチョウナ削り技法であり、そのチョウナ幅は2.7cmと考えられる(⑬)。棺蓋上面は風化によってあまり工具痕は観察し得ず、長側辺の斜面部にあるいは敲打具技法ではないかと思わせるところもあるが確かではない。しかし、妻側の小口斜面に残っているのはチョウナ削り技法であり、チョウナの最大幅は1.7cmをはかる（⑭)。(高木)

4号棺（石蓋土壙）

4号棺は、後円部の4基中最も北側に位置する石蓋土壙墓である。主軸方向は、東西(N-86°-E）で、他の3基とは微妙にずれている。

土壙は、硬い地山を掘り込んでおり、3号棺の墓壙との間隔60cmを測る。法量は、遺存のよい床面で長さ149cm、幅（東端）32cm、深さ約50cm、床面の標高30.24mを測る。土壙の形状は、床面が平坦で、壁はかなり崩壊していたが4壁ともほぼ垂直に立ち上がり細長い箱型を呈するものと思われる。両小口の幅の差もほとんどない。

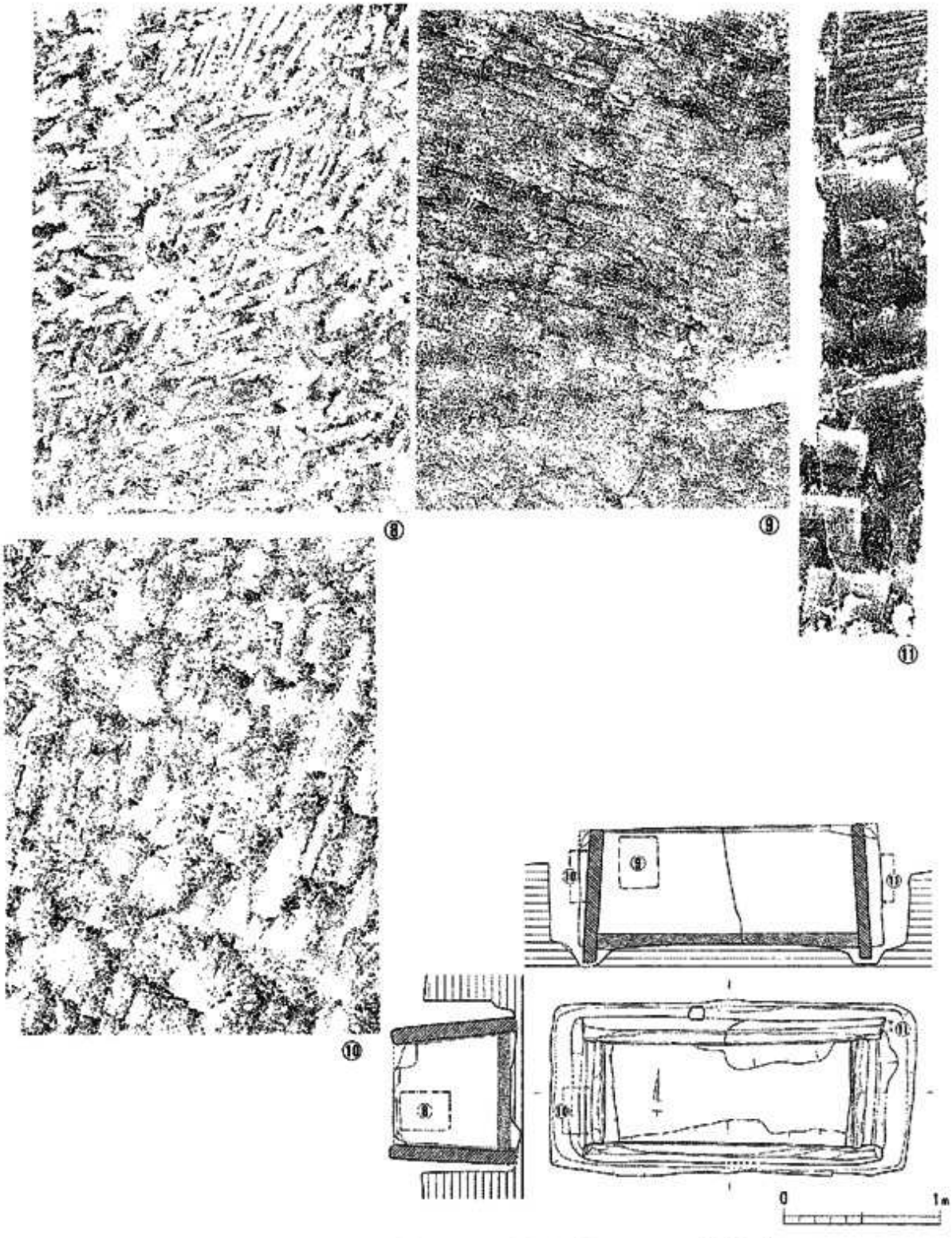
調査時に、蓋は土壙の東側を覆ってはいたが現位置を保つものではなかった。散在した石材を復元すると、蓋は阿蘇溶結凝灰岩の板石2枚を使用、全体長188cmを測る。1号棺や5号棺の蓋石や側石と同様、東側に長大なものを使用しており、その比は2対1である。東側蓋石は、長さ121cm、幅79cm、厚さ10cmを測り、西側蓋石は、長さ67cm、幅90cm、厚さ8cmを測る。全面に工具痕が残り、それぞれの接合面には丁寧な加工をしている。また、副葬品は今回も出土しなかった。(木下)



第30図　楢崎古墳3号棺実測図（1:30）

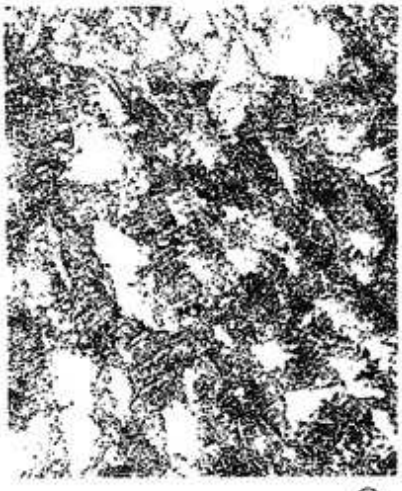
4号棺工具痕

棺身にあたる部分は地山面を掘りくぼめた土壙であるが、その蓋石には他棺と同様の阿蘇溶結凝灰岩2石が用いられている。上・下面ともチョウナ削り技法が施されており、仕上げはやはり丁寧である(⑮・⑯)。ともに2cm前後幅のチョウナが用いられているが、下底面の一角に×印その他の線刻がある。それがどのような目的で行なわれたかは別にして、その線刻がチョウナ削りによる整形後になされていることは明らかであり、蓋として完成してから後、埋葬までの間に行なわれたということになる（⑯)。(高木)

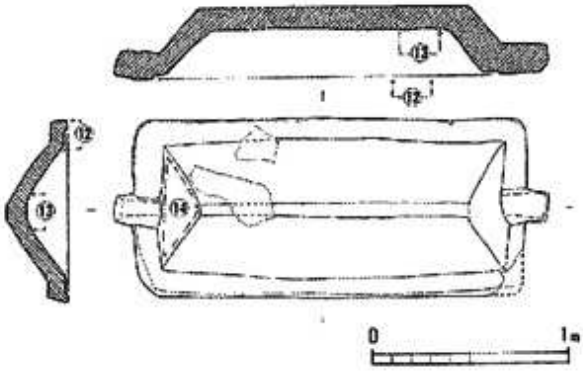


第31図　楢崎古墳3号棺棺身工具痕拓影（実測図1:40、拓本1:4）

⑫

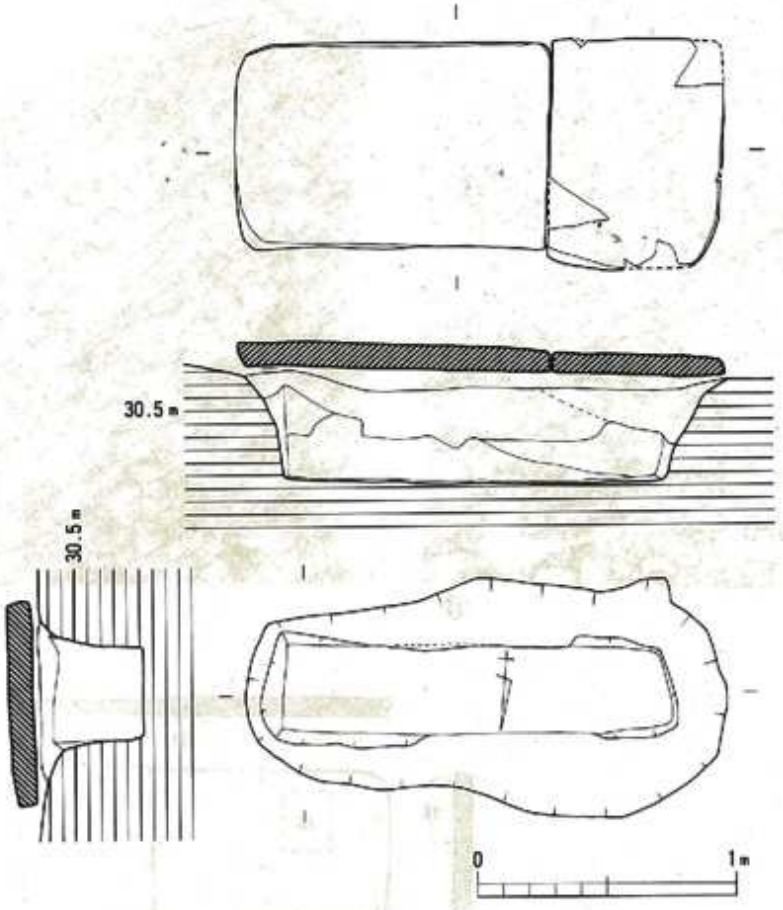


⑬



⑭

第32図　楯崎古墳３号棺棺蓋工具痕拓影（実測図1:40、拓本1:4）

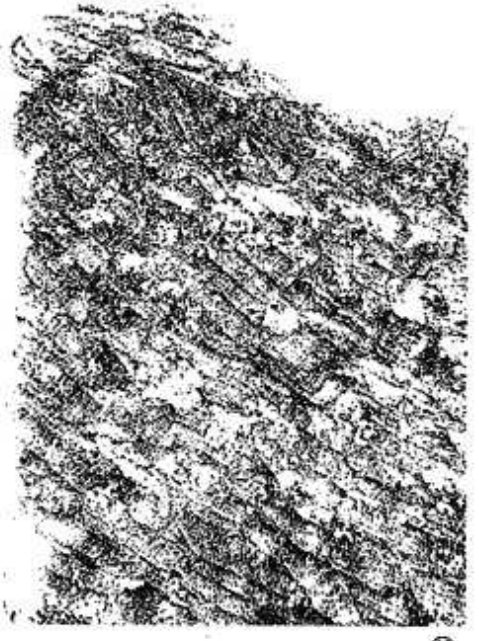


第33図　楢崎古墳4号棺実測図（1:30）

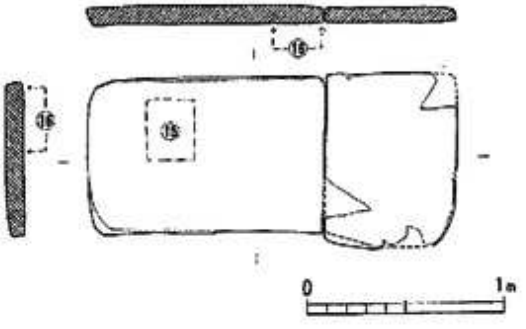
5号棺（箱式石棺）

5号棺は、4号棺から北北西の方向約15mのところに位置する。また、1号棺～4号棺の配列方向からは、中心で約6.5m西へずれ、その比高差は約2mを測る。　棺は、主軸（N-68°-E）の組み合わせ式の箱式石棺である。棺身を埋設する墓壙の大きさは、長さ195cm、幅85cm、深さ40cm、小口部はさらに掘り込んでいる。平面形は、ほぼ長方形を呈する。墓壙壁と棺身との隙間は、5cm～8cmで、硬い地山を、ほぼ垂直に無駄なく掘り込んでいる。

⑮



⑯



第34図　楢崎古墳４号棺工具痕拓影（実測図1:40、拓本1:4）

棺身は、内法で長さ173cm、上端幅50cm、床面幅59cm、深さ55cm、床面の標高28.26mを測る。側石は、内傾し、小口は垂直に立ち、両小口の幅の差はない。側石には、両側とも２枚の板石を使用し、東側部分に長い方を置く。北側々石は長さ53cmと146cm、南側々石は82cmと110cmを測り、それぞれ接合面は平坦に加工している。小口は１枚の板石を使用しており、側石との組み合わせ部は、面取りを行なっている。また、側石には幅６cm、深さ１cm程の溝を掘り込んでいる。棺には赤色顔料は認められなかった。

側石の上には、人頭よりやや小さめの礫を並べている。大正時代は完全にあったようだが現在は西側半分しか残っていない。礫は地山から少し浮いた位置にあり、層にはしまりがない。特に、西側小口では破損した石材を補修するかたちで置かれている。また、南側には礫の下に掘り込みがあり、そこから磁器が出土しているなど、礫の存在が、石棺築造当初からのものかどうか疑問の余地がある。

過去、刀剣類出土の報告はあるが、今回の調査で新たに出土した副葬品はなかった。(木下)

5号棺工具痕

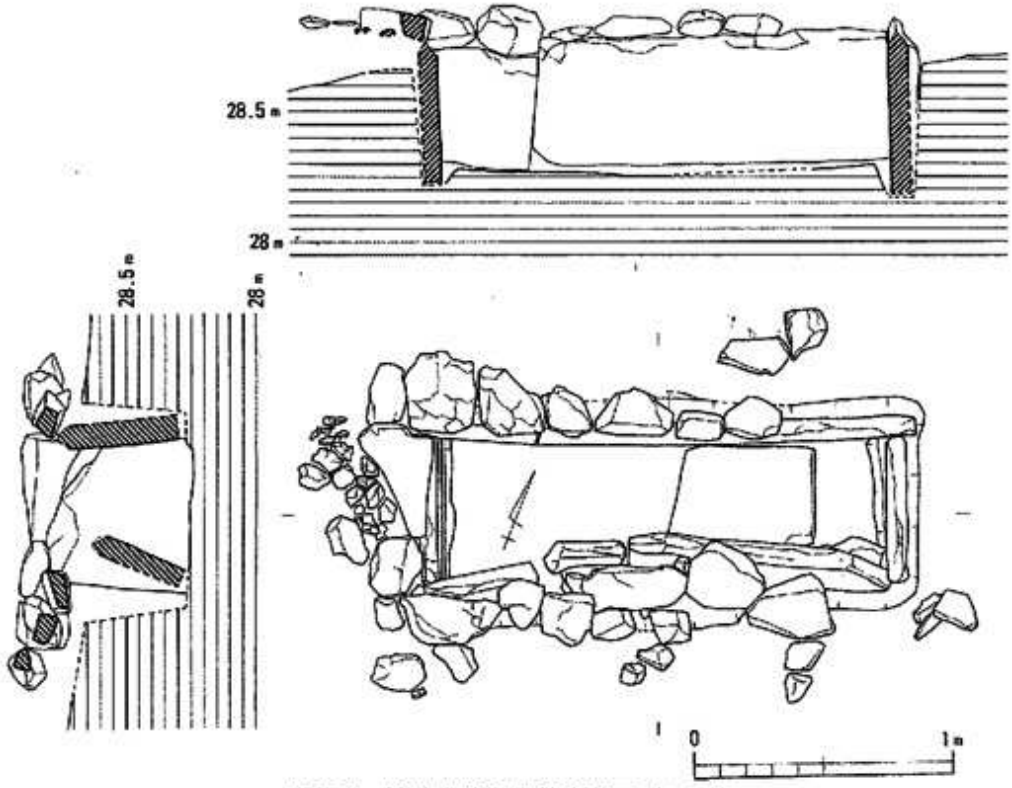
棺身内壁小口面に残っている工具痕には2種類のチョウナを用いたチョウナ削り技法があり、上部のものの幅は1.7cm、下部のそれは4.2cmをはかる。このうちの幅広のチョウナ痕の方には削りと同じ方向で条痕風の沈線がかなりあって、それを刃毀れとみることができないであろうか(⑰)。

石　材

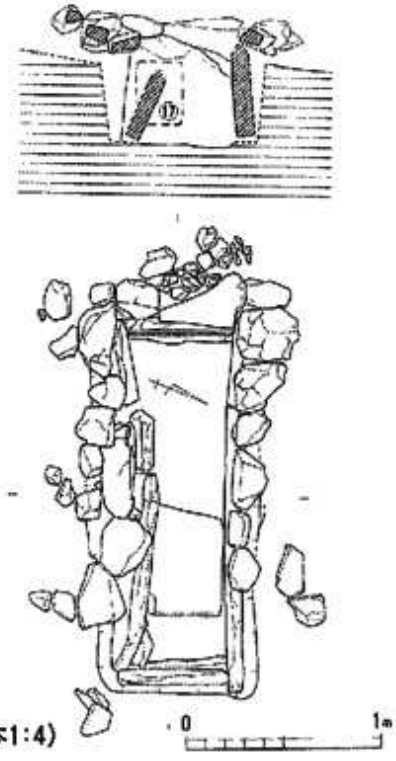
楢崎古墳の埋葬施設に用いられた石材は、いずれも阿蘇溶結凝灰岩であり、色調は灰白色を呈する。この石は、いうまでもなく阿蘇山の噴火によって流出した火砕流が溶結化して出来たものであり、形成時期によって8期に分類が可能である[9]。各棺の石材の鑑定を熊本大学理学部の松本幡郎教授にお願いしたところ次のような結果を得ることができた。なお参考のために、8期分類を従来の4期に分ける方法でも示すことにする。

第2表　楢崎古墳棺材形成時期一覧表

埋葬施設名	棺形式		8期分類	4期分類
1号棺	家形石棺	蓋	8回目	Aso 4 B
		身	8回目	Aso 4 B
2号棺	舟形石棺	蓋	6回目	Aso 3
		身	6回目	Aso 3
3号棺	家形石棺	蓋	6回目	Aso 3
		身	6回目	Aso 3
4号棺	石蓋土壙	蓋	6回目	Aso 3
5石棺	箱式石棺	身	8回目	Aso 4 B



第35図　楢崎古墳5号棺実測図（1:30）



第36図　楢崎古墳5号棺工具痕拓影（実測図1:40、拓本1:4）

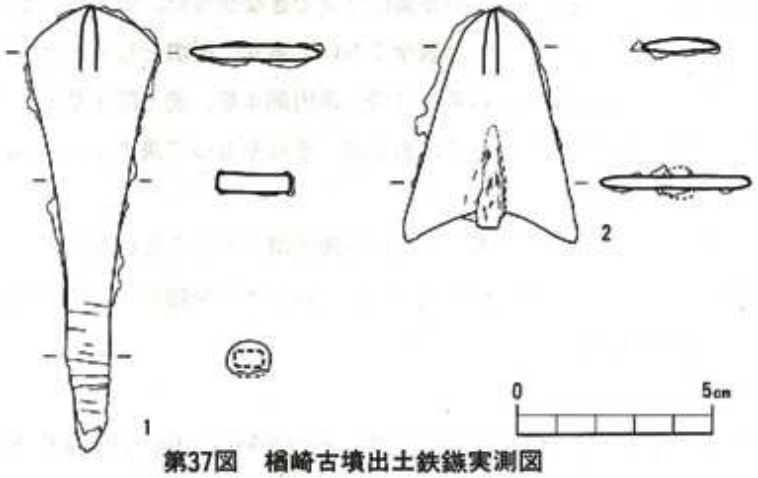
3．出土遺物

今回の調査によって出土した遺物は、1号石棺内の鉄鏃2本と、墳丘トレンチ内の数個の土師器細片だけであり極めて少ない。鉄鏃は大正10年調査時の掘り残しであり、これによって従来不明であった大正調査時の鉄鏃についても若干の類推が可能となってきた。土師器については、惜しいかなそれが土師器であるといい得るだけの微小片であり、ここではそれ以上には取り挙げ得ない。

1は、棺内の南側の長側辺近くで中央よりやや西寄りの床面（円礫）上から検出されたものであり、刃部を東方向にむけていた。後藤守一氏の分類[10]による圭頭広根斧箭式と呼ばれる型式の鉄鏃であり、長さ11.4cm・最大幅3.2cm・刃部厚さ0.4cm・重量37gをはかる。茎に矢柄を巻きつけるための幅2mm程度の樹皮が約3.3cm残っており、その部分での断面は1.15cm×0.9cmの楕円形を呈する。この鉄鏃は、筆者の行なった圭頭斧箭式鉄鏃の型式分類ではB_1タイプにあたる[11]。

2は、1の先端部に重なって検出されたもので、これも刃部を東方向にむけていた。後藤氏分類でいう広鋒丸凹長三角形式と分類された無茎の鉄鏃である。長さ5.9cm・最大幅4.3cm・厚さ0.3cm・重量18gで、基部に矢柄を装着した痕跡が約2.1cm残る。刃の先端部は丸味をもち、よりいっそう幅広な感がある。

この2本の鉄鏃以外に、大正調査で「若干の鉄鏃」が検出されている。遺物そのものの実測図や写真が掲載されておらず、報告文においても「直刀、鏃とも普通の品で何等擧ぐべき特色のないもの〻様である」と記されていただけで、その実体は明らかでないが、出土状態の実測図や写真による限りでは3本くらいを観察できる。そのうちの1本は今回の調査によって検出された1と同じタイプの圭頭広根斧箭式鉄鏃とみられ、残りの2本は型式を特定できないが尖根系統のもののようである。



第37図　楢崎古墳出土鉄鏃実測図

大正調査時には本石棺では鉄鏃以外に鉄刀2本も出土しており、その長さが約3尺6寸と1尺5寸と記されているだけである。(高木)

註 (1) 梅原末治「肥後國檜崎の古墳に就て」『歴史と地理』第12巻第5号、1923年、京都。
(2) 富樫卯三郎他「向野田古墳」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第2集、1978年、宇土。
(3) 高木恭二・木下洋介「女夫塚古墳(女塚)」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第11集、1985年、宇土。
(4) 註1書に同じ。
(5) 梅原・古賀・下林「宇土郡檜崎の古墳」『熊本縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第2冊、1925年、熊本。
(6) 三島格「九州における突起ある横穴式石室墳」『熊本史學』第13号、1957年、熊本。
(7) 高木恭二「肥後南部の石棺資料(1)」『宇土市史研究』第2号、1981年、宇土。
(8) 和田晴吾「古墳時代の石工とその技術」『北陸の考古学』(石川考古学研究会々誌第26号)、1983年、金沢。
(9) 松本嶠郎「阿蘇外輪山の噴火と噴出物」『阿蘇火山』東海大学出版会、1981年、東京。
(10) 後藤守一「上古時代鐵鏃の年代研究」『人類学雑誌』第54巻第4号、1939年、東京。
(11) 高木恭二「圭頭斧箭式鉄鏃について」『城二号墳』1981年、宇土。

第4節 小 結

檜崎古墳は大正10年という比較的早い段階に学術調査が行なわれた貴重な例であり、一墳多葬の例としても全国的にも数少ないもののひとつに数えられる。しかも石棺覆屋は熊本県内における文化財保存施設の最も早い例でもある。

墳丘の形態は前方後円墳ということで周知されているが、今回の墳丘確認の為の発掘においてはそうであると断言できるほどの確かな裏付けはできなかった。前方後円墳としての形跡がこれほど残っていないことがむしろ不思議なくらいであり、円墳としての可能性があくまでも残るのである。埋葬施設との関連から考えれば、後円部4基、前方部1基という配置は前方後円墳とする場合には極めて好都合な点ではあるが、それをもって決するほどの確たる証拠とはなり得ない。

県指定史跡であるという重要度を考えて、前方後円墳であろうという前提で本書においては一応の統一をはかったが、その可能性は五分五分といわざるを得ない。ここではふたつの可能性を考えてその規模を提示しておこうと思う。

前方後円墳

全長46m、後円部径35m、後円部高さ5.7m、前方部幅21.5m、前方部高さ4m、くびれ部

幅21.5m。

円　墳

直径22m、高さ2.7m。

楢崎古墳が前方後円墳であるか円墳であるかの問題は、単に多数埋葬だから重要であるということだけではなく、花園・立岡地区の古墳群の変遷を考える上でも極めて大きな意味をもってくることはいうまでもない。更には宇土半島基部古墳群の前方後円墳の位置づけ(1)の問題にもかかわってくるし、数少ない5世紀代の前方後円墳がほとんどなくなってしまうという現象も副産物として出てくるのである。

花園・立岡地区の古墳の変遷については、次章において改めて取り挙げるのでここではふれないが、宇土半島基部の前方後円墳の時期的な流れをみてみると、4世紀に位置づけられるものが弁天山古墳（53.5m）スリバチ山古墳（96m）、迫の上古墳（54m）、城の越古墳（43.5m）、御手水古墳（65m）、向野田古墳（86m）の6基であり、5世紀に考えられるものとして天神山古墳（110m）、楢崎古墳（46m）の2基、6世紀代には松橋大塚古墳（79m）、国越古墳（62.5m）、仁王塚古墳（46.8m）、女夫塚古墳（男塚 — 46m）、？女夫塚古墳（女塚 — 40m）(2)の5基が考えられる。

古墳群全体の墳丘規模の推移をみると、楢崎古墳が前方後円墳であるか否かに関係なく4世紀後半代から5世紀前半にかけてと、6世紀前半代の2時期にピークがあり、その中間期になる5世紀は全くといっていいほどの低落傾向にあるといえるであろう。県内でも最大の規模を誇る天神山古墳（5世紀前半）以後の状況としてはあまりにも悲惨というほかはない。この点に楢崎古墳をめぐる時期の謎めいた時代背景を想像させるし、この段階に前方後円墳がなくな

第3表　楢崎古墳埋葬施設一覧表

埋葬施設名	棺形式		長さ（突起を除いた長さ）cm	幅（突起を除いた幅）cm	高さ cm	縄掛突起	棺材	備考（含、大正10年調査）
1号棺	家形石棺	蓋	228（216）	103（101）	33	小口各1個 長辺　2個	2枚	人骨2体？ 刀2、鉄鏃5？
		身	188…内法	70…内法	85…深さ	なし	6枚	
2号棺	舟形石棺	蓋	207（191）	93（88）	28	小口各1個 長辺各3個	1枚	棺身長側辺内壁に2個と3個の刀掛状突起
		身	219（206） 172…内法	104（96） 60…内法	58 47…内法	小口各1個 長辺各3個	1枚	
3号棺	家形石棺	蓋	222（201）	90	35	小口各1個	1枚	人骨片
		身	159…内法	76…内法	75…深さ	なし	4枚	
4号棺	石蓋土壙	蓋	188	79，90	10，8	なし	2枚	
		土壙	149…内法	32…内法	50…深さ			
5号棺	箱式石棺	身	173…内法	59…内法	55…深さ	なし	6枚 周辺上部に割石	刀剣類

ったとしてもなんら不思議はないのである。

墳丘の問題はこれくらいにしておくとして、次に埋葬施設についてふれることにしよう。

楢崎古墳を著名ならしめているのは多数の石棺が混在しているという点でもあり、極めて整然とした配列で行なわれている。各施設を整理してみると第3表のようになる。

整然と並んでいるとはいえ5基が一度に埋置されたものでないことは、主軸が微妙にずれていたり石棺の形態に差があることからも察せられるところではあるが、少なくとも平行する4基は時期があまり隔たらない段階に順次埋置されたものと考えてよかろう。いいかえれば、前段階の埋葬位置や方向が忘れ去られてしまわない程度の、せいぜい2・3世代の時間差で追葬されたと考えてよいのではなかろうか。

各石棺の遺物が殆んどないような本墳の場合、5基の埋葬順序を推測するには1・2・3号棺のように石棺形態の特徴がよくわかるものの変化によって少しは明らかにできるであろう。棺材の用い方としては、2号石棺が蓋身とも各1石の刳抜式の舟形石棺であり、3号石棺が蓋1石、身4石の組み合わせ式家形石棺、1号石棺が蓋2石、身6石のこれも組み合わせ式家形石棺でそれぞれ異なったつくりである。3棺とも棺蓋の周縁に平坦面をつくり、頂部に明確な棟を表現する。しかし、3棺の棺蓋は、斜面部の断面が2号や3号にややふくらみがみられるのに対して1号は直線的になっている。

縄掛突起は棺蓋棺身ともみられるのは2号のみであるが、これには小口各1、長辺各3の計8個が蓋・身にそれぞれつくり出され、3号は蓋の小口に各1、1号は蓋の小口に各1、長辺の一方にのみ極めて退化した縄掛突起がつけられているが、1号石棺棺蓋の2石は蓋そのものの形状が微妙に違っているし、突起の形状も異なる。

石棺の規模は1号石棺が最も大きく、墳丘頂部全体の中心は1号と2号付近にあるようであるが、3基の石棺は後述するように、2号棺→3号棺→1号棺の順に埋置され、更に4号棺→5号棺がそれぞれ相次いで埋置されたものと考えられる。

1～3号石棺との類例を他の古墳・石棺例に求めれば、2号棺のように棺身に舟べり状突帯を四周に明確にめぐらすものはあまりないが、院塚1号石棺[3]・高城山3号石棺[4]・京都府八幡茶臼山古墳[5]（阿蘇溶結凝灰岩製石棺 ― 九州から運ばれたもの）の3例だけであり、舟べり状ではないが棺身下底に縁をつける向野田古墳を加えれば4例ということになる。いずれも棺身には縄掛突起をつくり出さないものではあるが、茶臼山古墳石棺の突帯には小口側に各2、長辺側に各4の矩形穿孔が計12ヶ所にみられる。

2号石棺棺蓋のように小口に各1、長側辺に各3の縄掛突起をつくり出す舟形石棺は他に類例がなく、あえてこれに近いものを探せば室ノ山2号石棺[6]の1例だけである。しかし、突起は環状縄掛突起であり、周縁に平坦面をつくらないなどかなりの隔たりがある。なお、楢崎2号石棺が従来のように刳抜式の家形石棺という概念で分類するとすればいかがであろうか。

九州における刳抜式家形石棺は極めて少なく、畿内系家形石棺や刳抜式の平入家形石棺、さらに詳細不明なものを除けば鴨籠古墳[7]が知られているだけであるが、この石棺は棺蓋に線刻の直弧文を描いたものであるが棺身に舟べりや縄掛突起はなく、極めて簡略なつくりで、比較を行なうにはあまりにも違いすぎるといわざるを得ない。

1号石棺・3号石棺のような組み合わせ式家形石棺のうち、棺蓋周縁に平坦面をめぐらすものは九州では比較的に多い。九州の家形石棺の整理を行なった佐田茂氏・高倉洋彰氏は、この種の石棺をIII類として分類し、それが宇土市付近に分布することを明らかにされている[8]。

縄掛突起の形状や数にはバラエティがあるが、平坦面をもつタイプで檜崎1号・3号石棺のように小口に柱状縄掛突起をもつ例は、晩免古墳・潤野古墳・高塚古墳のように環状縄掛突起を併せもつもの[9]があり、環状ではないが縄掛突起が扁平で半円形をなすものとして神ノ山1号石棺・西潤野石蓋土壙の蓋石などがある。

檜崎古墳の1号～3号石棺の形態と近似する石棺が殆どないことは明らかとなったが、2号石棺が舟形石棺のうちでは後出的要素をもち、1号・3号石棺の棺蓋が2号石棺の棺蓋から発展変化した可能性は指摘できそうであり、2号石棺から3号石棺、更には1号石棺へという流れを想定しておきたい。

3基の変化を考える上で重要なのは至近の距離に位置し、1号・3号石棺の共通形態として取り挙げた晩免古墳・潤野古墳・神の山1号墳などと比較検討することであろう。この3例がいずれも棺身内壁に刀掛状突起を有するという点からみても檜崎2号石棺との関係も問題となってくるのである。

晩免古墳の家形石棺は組み合わせ式で棺蓋には長方形の区画があり、小口に各1の円柱状縄掛突起を長辺に各3の半円状をなす環状縄掛突起をつくり出し、棺身内壁には長辺と小口のそれぞれ1対の刀掛状突起を表わしている。この両辺には円文ならびに「菊章の如きほり出し紋」が描かれている。潤野古墳の石棺も同じ組み合わせ式家形石棺ではあるが破損がひどくややはっきりしない部分もあるとはいえ、小口に各1の縄掛突起、長辺に各2の半円状をなす環状縄掛突起をつくり、棺身内壁の長辺に1対の刀掛状突起を表現している。この突起の近くにも鋸歯文や円文、さらには小口内壁にも円文が描かれるなど晩免古墳とやや似た形状をなす。

神の山1号石棺は棺蓋に2石が用いられ、長辺に各3個の扁平な半円状縄掛突起をつくり出し、棺身内壁の小口面に1対の刀掛状突起をつくる。この突起には鉄剣が架せられ、この種の突起が刀剣を載せるために刻出されたものであることを実証した。この1対の突起の両端幅は30cmで、それに架せられていた剣は54cmであった。

この刀掛状突起を含む突起状石材を有する古墳については、三島格氏[10]・土生田純之氏[11]が整理を行ない25例が知られているが、このうち横穴式石室の割石の間に棒状石材を突出させたものでなく、凝灰岩の一部に突起部分を刻出した例は石棺や石障・横穴の9例が知られている。

それを一覧表で示せば次のごとくであり、いずれも阿蘇溶結凝灰岩に刻出させたもので上部は水平となる。

第4表　刀掛状突起（阿蘇凝灰岩製）を有する古墳一覧表

古墳名	所　在　地	埋葬施設	突起位置	突起数
長砂連古墳	熊本県天草郡大矢野町中	石障系横穴式石室	右石障	2対(2段)
国越古墳	〃　宇土郡不知火町長崎	平入横口式家形石棺	長側壁…石室奥壁	2対(2段)
晩免古墳	〃　宇土市立岡町字晩免	家形石棺	長側石と小口石	2対
潤野古墳	〃　宇土郡立岡町字潤野	家形石棺	長側石	1対
楢崎2号石棺	〃　宇土市花園町字楢崎	舟形石棺	両長側石	2個と3個
神の山1号墳	〃　宇土市松山町字神の山	家形石棺	小口石	1対
宇賀岳古墳	〃　下益城郡松橋町松橋	平入横口式家形石棺	長側石…石室奥壁	1対
日輪寺古墳	福岡県久留米市京町	石障系横穴式石室	右石障	4個
漆間横穴古墳	大分県大分市木の上	横穴古墳	奥壁	1対

楢崎2号石棺が両長辺内面にあり、晩免古墳が長側石と小口石に、潤野古墳が長側石、神の山1号墳が小口にあって突起の形状も微妙に違っている。棺形態や縄掛突起もそれぞれ異なっている点は重要で、円柱状縄掛突起・扁平楕円環状縄掛突起・扁平楕円縄掛突起などである。

棺蓋・棺身の形状や縄掛突起・刀掛状突起の変化からこれらの古墳の相対的な流れを次のように仮定しておきたい。

楢崎2号石棺 ⟶ 楢崎3号石棺 ⟶ 楢崎1号石棺
晩免古墳　　神の山1号墳
潤野古墳

これらの年代をどの段階に位置づけるかは、楢崎古墳の出土遺物が乏しいうえその実体が殆どわかっていないという点からも明確にするのは難しい。その意味では今回、1号石棺から2本の鉄鏃が出土したことは成果ではあったが、これによって決するにはあまりにも資料不足といわざるを得ない。2本の鉄鏃が古式の様相をもったものであることは明らかであるが、他の2本は尖根式であったようであるし、鉄刀2振というのも新しい傾向を暗示するものではある。

出土した鉄鏃のひとつである圭頭斧箭式鉄鏃について筆者はその型式分類を行なった[12]ことがあり、この鉄鏃がB_1タイプとしたもので、5世紀代の古墳にみられる傾向であることを指摘したことがある。

石棺の形態からみれば舟形石棺である楢崎2号石棺は断面が円形でなく矩形であり、平面形も一端がすぼまるものでなく矩形となっているなど、舟形石棺としての後出的要素を多分に備えている。私見では5世紀中葉以前に遡り得ないと考えられ、家形石棺出現後に舟形石棺が激減化した段階以降のものとみてよい。

類例が少ないとはいえ、1号・3号石棺が組み合わせ式家形石棺としての形態を確立しており、環状縄掛突起を有する晩免古墳・潤野古墳・高塚古墳とほぼ同時期の所産と考えてよいところから、それを5世紀後半に位置づけでき、5世紀末を下ることはないであろう。既に述べたごとく楢崎古墳の3基の時間幅はさほどないと考えてよいところから、5世紀後半から末までの存続時期を考え、4号・5号棺を含めた本墳の最終埋葬時期は、6世紀にまで継続した可能性がある。

石棺に残された工具痕から石棺製作技術の解明を行なうことは、石棺の体系的分類の確立と古墳時代における石工技術が明らかにできるものと考えられ、本調査においてその一端を記録することができた。

5基の埋葬施設で確認できた工具痕は、チョウナ削り技法、チョウナ敲打技法の2種類であり、一部に磨きの可能性も残るところもあった。

チョウナ削り技法の削り痕には、幅の広狭と、匙面か平滑かによって明らかな差異がある。幅の広狭は、用いられた工具（チョウナ）の刃幅が広くなればその痕跡は当然広くなるし、逆に狭ければ痕跡も狭くなるのである。匙面をなすか否かは、チョウナの先端が一直線となってその部分でだけ削れば石棺材では平滑に残るし、先端が一直線となっている刃でもそのコーナー部分を使ったり先端がU字形であったりすれば石棺材には匙面取りとなって残るのである。

楢崎古墳の5基の埋葬施設における工具痕を一覧表で示せば次ゝ表のごとくである。

楢崎古墳の5基の埋葬施設にみられた工具痕から観察できる作業工程として、次の5段階が想定できる。

1．チョウナ削り技法（刃幅広い・匙面取り）……①
2．チョウナ削り技法（刃幅広い・平滑）……③⑪
3．チョウナ削り技法（刃幅狭い・平滑）……⑯
4．チョウナ削り技法（刃幅がより狭い・平滑）……⑤
5．チョウナ敲打技法……②

幅広で短かく正方形に近い削り痕から幅狭で細長く長方形に近い削り痕へと、仕上げの流れが基本的に守られており、それは阿蘇溶結凝灰岩製石棺総体でいえることである。

和田氏も指摘する[13]ごとく削りの程度はあくまでも相対的なものであるが、棺の外側や棺底面では1・2の工程が、棺内内壁では2・3・4、棺蓋棺身との接合面では4・5の工程を残すものが大半となっている。（高木）

第5表　橋崎古墳埋葬施設工具痕一覧表

拓本番号	埋葬施設名	採拓場所	製作技法	工具幅	平滑	地面	備考	図番号
①	1号石棺	棺身外側長辺	チョウナ削り	3cm		○		第27図
②	〃	棺身上端	チョウナ敲打					〃
③	〃	棺身内壁長辺	チョウナ削り	1.5～2cm	○			〃
④	2号石棺	棺身内壁	チョウナ削り	2cm 0.6～1.7cm	○ ○			第29図
⑤	〃	棺身上端	チョウナ削り	1.2cm			掻き？	〃
⑥	〃	棺身外側	チョウナ削り	2cm	○			〃
⑦	〃	棺身内壁の刀掛状突起	チョウナ削り	0.8cm		○		〃
⑧	3号石棺	棺身内壁小口面	チョウナ削り		○	○	チョウナの刃先をナナメにあてている。	第31図
⑨	〃	棺身内壁長辺	チョウナ削り	2.5cm	○			〃
⑩	〃	棺身外側	チョウナ削り	2.2cm		○		〃
⑪	〃	棺身外側長側石の小口面	チョウナ削り	0.4～1cm 2.2cm	○			〃
⑫	〃	棺蓋下底面(棺身との接合面)	チョウナ削り	0.9cm	○			第32図
⑫	〃	棺蓋下底面(外側)	チョウナ敲打					〃
⑬	〃	棺蓋内側天井部	チョウナ削り	2.7cm	○			〃
⑭	〃	棺蓋小口部斜面	チョウナ削り	1.7cm	○			〃
⑮	4号棺	棺蓋上面	チョウナ削り	2cm	○			第34図
⑯	〃	棺蓋下面	チョウナ削り	2cm	○		線刻あり	〃
⑰	5号石棺	棺身内壁小口面	チョウナ削り	1.7cm 4.2cm	○			第36図

註 (1) 富樫卯三郎「古墳の立地と周辺の遺跡」『向野田古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第2集、1978年、宇土。

(2) 高木恭二・木下洋介・古城史雄「女夫塚古墳（女塚）」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第11集、1985年、宇土。

(3) 坂本経堯「腕塚古墳の研究」『玉名社会科研究報告』第10号、1953年、玉名。

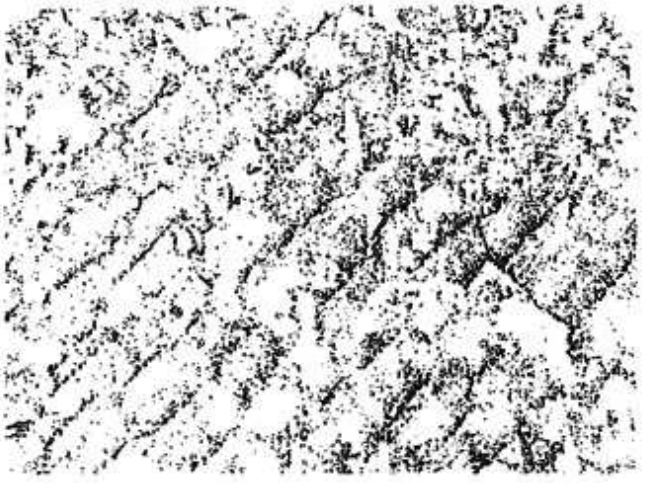
(4) 東光彦「高城山第三号墳・第四号墳」『熊本市西山地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会、1969年、熊本。

(5) 梅原末治「山城綴喜郡茶臼山古墳と其発掘物」『考古学雑誌』第6巻第9号、1916年、東京。

(6) 佐藤伸二『室山古墳調査報告書』宮原町教育委員会、1976年、宮原。

(7) 梅原末治「宇土郡不知火村古墳」肥後に於ける装飾ある古墳及横穴、京都帝國大學文學部考古學研究報告第1冊、1917年、京都。

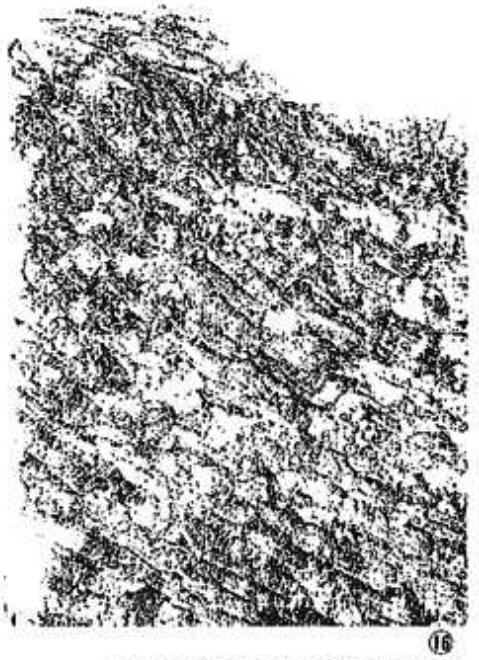
(8) 佐田茂・高倉洋彰「九州の家形石棺」『筑後古城山古墳』1972年、福岡。



①

⑪

③



⑯

⑤

②

第38図　楢崎古墳石材加工痕拓影集成

(9) 高木恭二「環状縄掛突起を有する石棺について(1)、(2)－特にその石棺材の産地をめぐって－」『熊本史学』第53・54号、1979・1980年、熊本。

(10) 三島格「九州における突起ある横穴式石室墳」『熊本史学』第13号、1957年、熊本。

(11) 土生田純之「突起をもつ横穴式石室の系譜」『考古学雑誌』第66巻第3号、1980年、東京。

(12) 高木恭二「圭頭斧箭式鉄鏃について」城二号墳、『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第3集、1981年、宇土。

(13) 和田晴吾「古墳時代の石工とその技術」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌、第26号、1983年、石川。

第3章　分布調査

第1節　序説

分布調査は楢崎古墳確認調査と平行する形で花園・立岡地区について実施し、古墳1基、古墳参考地1基を新たに確認することができた。古墳1基からは円筒埴輪を採集することができ、県内でもあまり多くない埴輪をもつ古墳としても重要な発見となった。

古墳を含む一帯は、宇土市がリクリエーションエリアとしてスポーツセンター・グラウンド・キャンプ場・公園などの環境整備を実施し、市で公有化を進めているところではあるがその一部は行政区画上、下益城郡松橋町となるところもある。今回確認し得た古墳1基は下益城郡松橋町字山下であり、古墳参考地は宇土市立岡町字西潤野となる。

また、分布調査対象地区の一部である立岡町では、国道3号線バイパス建設工事に伴なって建設省の委託で熊本県教育委員会文化課が本年度に事前発掘調査を実施している。立岡町字二ツ枝の二ツ枝（ウバ塚）古墳が計画路線内にあるためその古墳を含めて発掘調査が実施されたが、調査の結果、それが古墳ではなく中世の塚であることが明らかとなった。

第2節　分布調査の記録

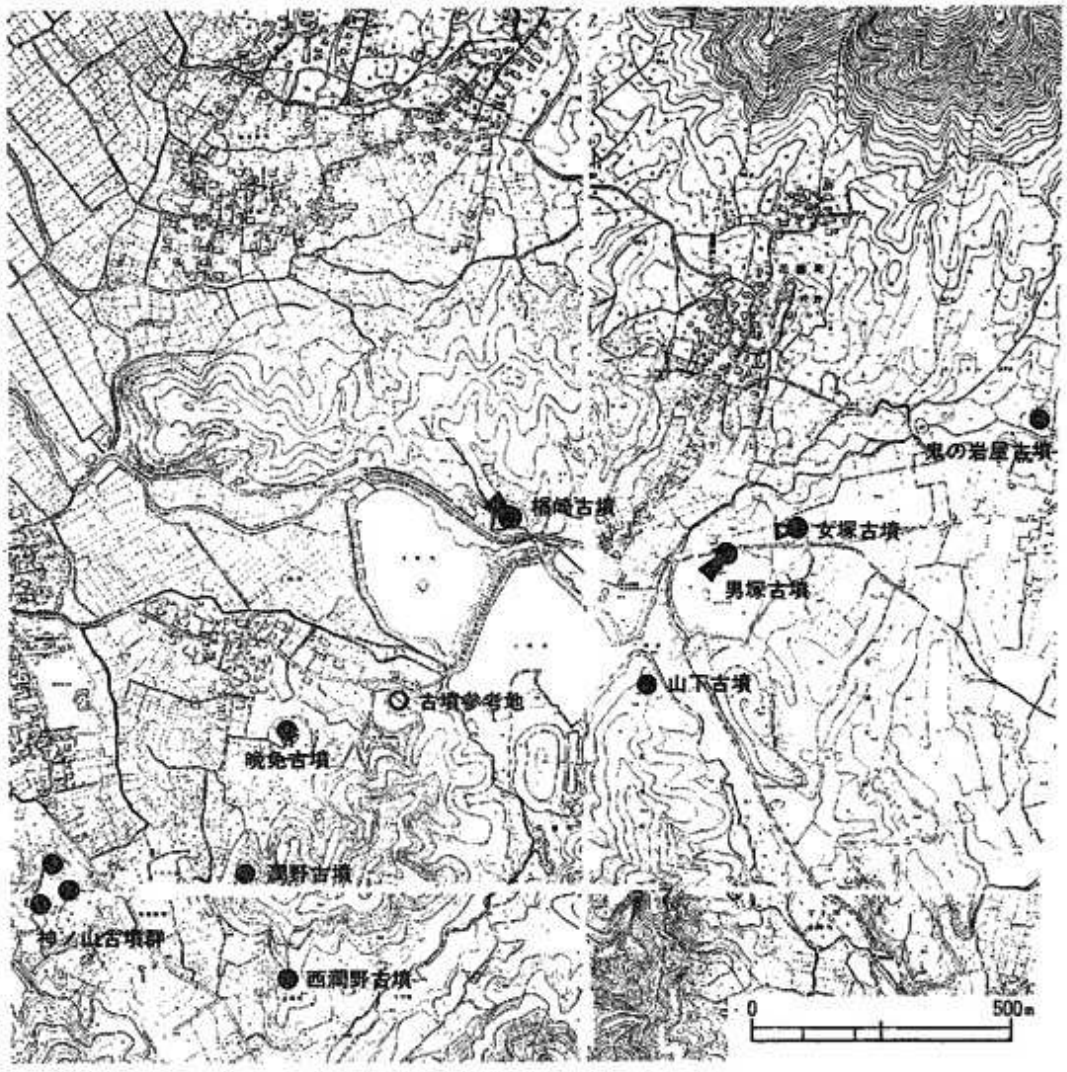
1．山下古墳

行政区画上は下益城郡松橋町字山下にあたり、宇土市が公有化して展望台として整備を実施しているところであり、眼下に花園池が広がっている。展望台とするための工事は昭和57年度に宇土市商工水産課観光係の所管で実施され、階段やベンチを設置して芝張が行なわれている。地形の改変も若干行なわれたようではあるが、古墳の旧状はそれほど損なっていないと思われる。

円筒埴輪片・須恵器片を採集することができ、墳丘の西側斜面の一画には加工のある阿蘇溶結凝灰岩がいくつかあつまっているところから埋葬施設の一部は破損しているものの大半は残存しているものと思われる。南側から延びてくる丘陵との間を掘り切って墳丘が形成されており、直径約20m、高さ約3.5mの円墳であろうと推測される。

2．古墳参考地

宇土市立岡町字西潤野に位置し、眼下に立岡池・花園池が広がっているが、現状では古墳であると断言できるほどの明確な根拠に乏しい。しかし、東南側から延びる丘陵がいったん鞍部を形成してその先端に円丘をつくっている。



第39図　花園・立岡地区地形図（1:15,000）

（橋崎古墳付近は旧状を示す）

円丘は直径約15m、高さ約３m程度であるが、円墳とするにはマウンドがなだらかすぎるきらいがあり、葺石・埴輪なども確認できない。なお、円丘から離れて西側25mくらい下がったところから須恵器器台の破片（第40図３）が採集された。

３．二ツ枝（ウバ塚）古墳

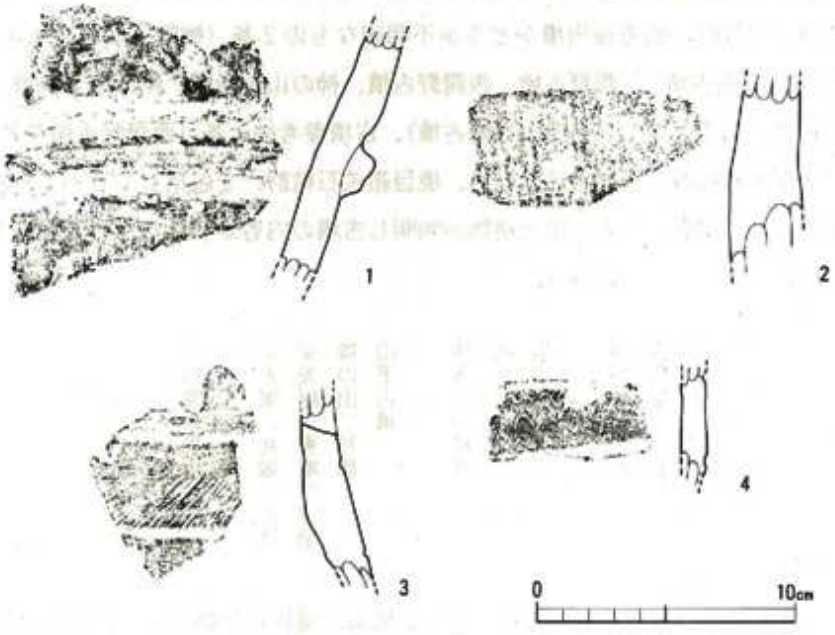
熊本県教育委員会文化課参事平岡勝昭氏の担当で当古墳の発掘調査が行なわれ、それが古墳でなく中世の遺構であることが確認された。国道３号線バイパス建設予定地内の事前調査によるもので、当該地が中世の円形周溝遺構であることが明らか[1]となり、古墳であろうという伝えの他に平安時代末期の安徳天皇伝説にまつわる「ウバの墓」とする伝えを想起させることになった。

4．出土遺物

分布調査によって採集された遺物は小破片ながらいくつかあるが、ここでは古墳時代に関連する次の4点を図示するにとどめる。

1・2は山下古墳から採集された円筒埴輪片である。1は、1条のタガをめぐらす破片で、傾きから朝顔形埴輪の朝顔部である可能性が高い。外面は緻密なタテ方向のハケ目を、タガ貼付前に施したもので1次調整と呼ばれるものである。色調は黄橙色。内面はナナメハケ目調整で、浅黄橙色を呈する。焼成は良好で胎土は緻密である。2は極めて粗いタテ方向のハケ目を施した円筒埴輪片であるが、かなり厚みをもっているところから底部に近い部分の破片であろう。内面はナナメ方向にナデられており、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。これも焼成は良好で胎土は緻密。3は、古墳参考地の西側約25mの斜面付近から採集されたもので須恵器器台の脚部破片である。上部に櫛描波状文がめぐり1ヶ所のスカシを確認できる。中位は斜行篦描文が施され2ヶ所にスカシが残る。下部にも櫛描文があり、1ヶ所のスカシを認めることができる。外面は灰黄褐色、内面はにぶい褐色を呈し、焼成良好、胎土は緻密である。4は立岡町字二ツ枝付近で採集された須恵器破片であり、極めて緻密な櫛描波状文が描かれている。外面は緑灰色、内面は灰オリーブ色を呈し、これも焼成は良好、胎土は緻密。

山下古墳からは埴輪2点以外に須恵器小片が採集されているだけでありその時期を決するのは容易でないが、埴輪の特徴から周辺地域の例と比較すれば6世紀初頭から中葉にかけての国越古墳・中の城古墳・姫の城古墳などに近い特徴をもっておりそれに近い6世紀前半から中葉



第40図　分布調査地区採集遺物実測図（1:3）

の頃に比定しておきたい。

第3節　小結

分布調査によって新たに円墳1基が発見され、更に古墳の可能性のある円丘（試掘調査によって確認の必要あり）1基も明らかになったが、県文化課の調査によって従来、古墳とされていたものが中世の遺構であるなど、立岡・花園地区の古墳群の内容に変動が生じてきた。更に楢崎古墳が前方後円墳であるかどうか明確にしがたいなど、この古墳群を考える上でいくつかの重要な知見が得られた。

また、山下古墳から埴輪片が採集されたことも今回の分布調査における特筆すべきことのひとつであった。というのは、立岡・花園地区で埴輪を有する古墳はこれまで1ヶ所も知られておらず、しかも宇土半島基部においても13例目という発見であるからである。直径20m程度とはいえ埴輪を有する古墳はそれほど多くなく、筆者の確認し得た熊本県内での埴輪出土地は46ヶ所となった[2]。このうち前方後円墳は28ヶ所、円墳14ヶ所、埴輪製作址推定地1ヶ所、その他の遺跡3ヶ所となり、円墳では総体的に大きい規模のものに多い。

宇土半島基部の古墳群のうち沖積平野をはさんで東側に位置するグループは、その分布状況からみて松山地区（御手水古墳・向野田古墳・チャン山古墳ほか）と立岡・花園地区（楢崎古墳・晩免古墳・女夫塚古墳ほか）の二群に分けることが可能である。

後者の一群が今回の確認調査・分布調査を実施した地域とその周辺であり、前方後円墳1基（女夫塚古墳ー男塚）、前方後円墳かどうか不明確なもの2基（楢崎古墳、女夫塚古墳ー女塚）、円墳9基（晩免古墳[3]、潤野古墳、西潤野古墳、神の山1号墳、神の山2号墳、神の山3号墳、立石古墳、山下古墳、三日鬼の岩屋古墳）、古墳参考地1基（西潤野古墳参考地）、箱式石棺11基（古保里石棺群、上松山箱式石棺、境目箱式石棺群）を包括して考えてみたい。

この花園地区の古墳群のうち、出土遺物が判明し古墳の内容が明らかないくつかを推定年代順に示せば次のようになるであろう。

三日鬼の岩屋古墳
女夫塚（女塚）古墳
女夫塚（男塚）古墳
神の山二号墳
山下古墳
神の山一号墳
晩免古墳
楢崎古墳
境目一号石棺
古保里三号石棺
古保里二号石棺

古保里2号石棺[4]を最古としてこれにつづく上松山・境目石棺群などの組み合わせ箱式石棺が4世紀後半から5世紀前半代に位置づけでき、それらマウンドの有無が明らかでない箱式石

棺群は沖積地に近い洪積台地先端部付近に位置する。5世紀後半代になると墳丘をもった檜崎古墳・晩免古墳・神の山1号墳などの舟形石棺・家形石棺が小山塊の先端部を利用してつくられる。更に6世紀前半から中葉の段階になると横穴式石室が埋葬主体に用いられるようになるし、特に6世紀中葉以後は、立地的には再び台地上につくられるようになって前方後円墳が採用されていることが明らかである。しかし前方後円墳は6世紀後半をすぎると用いられなくなり6世紀末から7世紀になると巨石を用いた横穴式石室が円墳の内部主体として用いられ、古墳時代の終焉を迎えたようである。

花園地区で墳丘を持つ古墳が出現する前段階に箱式石棺が採用されていることは明らかとなったが、その時期ないしはその直前の段階で松山地区の古墳群は盛期を過ぎ去り墓域を移している可能性が高い。松山地区の被葬者たちの後裔が花園方面に奥城を移したことも充分考えられるが、このことは松橋地区の古墳の存在を抜きにして語れないことでもあり後考を待ちたい。

（高木）

註 (1) 平岡勝昭「新南部・潤野遺跡」『熊本県文化財調査報告』第84集、1986年、熊本。

(2) 高木恭二「熊本県内埴輪出土地名表」向野田古墳、宇土市埋蔵文化財調査報告書第2集、1978年、宇土。

ただし、本地名表作成の段階では未確認のものも含めていたためその後数例を除外することになった。機会を得て改めて地名表を公けにする予定である。

(3) 晩免古墳は一般的には独立円丘の頂上部のみの小規模の円墳であると考えられているが、円丘全体が極めて整った円形をなしており背後の丘陵を大きく掘り切った可能性もある。円丘全体を晩免古墳の墳丘とすれば直径約77m、高さ11mという規模となり、全国でも十指にあまる有数な円墳のひとつとなってその意義は極めて高くなってくる。ただ、そのような規模の墳丘であるとすれば、組み合わせ式家形石棺直葬というのはやや見劣りがしないでもない。しかし、第2章第4節で述べた宇土半島基部古墳群における5世紀代の謎めいた状況を考えると必ずしも矛盾はしないのである。将来の課題としたい。

(4) 富樫卯三郎「古保里石棺群」『宇土市の文化財』第3集、1977年、宇土。

第4章　総　　括

宇土半島のほぼ中央に位置するヤンボシ塚古墳と半島基部の一画に位置する櫓崎古墳は、共に5世紀後半頃に築造されたと推測される古墳であり、それぞれの小地域における有力な存在であることが明らかとなった。

ヤンボシ塚古墳は網田平野東北隅の丘陵先端部に位置する直径約20m、高さ2.25mの円墳で、内部主体として石障系横穴式石室（肥後型横穴式石室）をもつ。石障には円文を彫りくぼめ、玄門部袖石と側壁石に船の線刻を描くなど極めて特徴的な古墳である。破壊を受けていたとはいえ穹窿状のドーム天井をもつ石室の構造や石障刳りこみ、羨道部構造などからヤンボシ塚古墳は5世紀後半に比定でき、網田平野ないしはその一帯の古墳のなかでは規模も大きく、近くに位置する城1号墳・城2号墳と共にこの地域の盟主的存在であることが明らかである。3古墳の構築時期を改めて考えると、遺物が豊富で石室構造が特徴的な城2号墳[1]が5世紀前半に位置づけ可能であり、城1号墳を城2号墳とヤンボシ塚古墳の間の5世紀中葉ないしは5世紀の第3四半期とすることは許されるであろう。

ヤンボシ塚古墳に用いられた石材は壁体の安山岩割石、石障に用いられた阿蘇溶結凝灰岩と紫蘇輝石安山岩、扉石と仕切石に使われた砂岩など少なくとも3～4地域から運ばれてきたものである。他の石障系石室でもそうであるが、この種の石室に用いられる石材は熊本平野に存するものに安山岩・凝灰岩が多く、宇土半島から八代海にかけての地域のものには砂岩が多いなど多様で、ふたつの地域の石室構造の違いは柳沢一男氏も指摘している[2]ところである。

石室内壁に塗られていた赤色顔料と床面の赤色顔料は、共にベンガラ（酸化第二鉄）であることが明らかとなり、前方後円墳である向野田古墳に用いられていた純度95%と55%の辰砂(硫化水銀)[3]と全く対照的である。

ヤンボシ塚古墳の被葬者そのものについて言及することは人骨の遺存がなく不可能であるが、そこに葬られたのは「(網田平野)とその海域を生活基盤とした在地性の強い小集団の首長」[4]及びその一族であり、その系譜は城2号墳・城1号墳・ヤンボシ塚古墳と辿ることができる。

網田平野には石障系横穴式石室2基が存在したが、同種の石室は全国で28例知られている[5]。大半を占める熊本県21例は県の中部から南部にかけての地域にそれぞれ1～2基が分布する程度である。いずれも直径20m前後の円墳で、副葬品として鏡や甲冑などをもつものもあり、分布状況などからみても律令時代の郷程度の地域を代表する族長クラスの人の墳墓として利用された墓制であろう[6]。この種の石室の発生には百済漢城期の石室構築技術が契機となったとする見方がつよい。

熊本県下の石障系横穴式石室を有する古墳には前方後円墳が採用されていない点は重要で、

第41図　熊本県内石障系横穴式石室分布図（付、関連位置図）

1．伝佐山古墳　2．千金甲1号墳　3．楠崎山5号墳　4．小松山1号墳　5．富ノ尾1号墳　6．井寺古墳　7．小坂大塚古墳　8．坂本古墳　9．りゅうがん塚古墳　10．将軍塚古墳　11．城1号墳　12．ヤンボシ塚古墳　13．小田良古墳　14．児島崎古墳　15．重盛塚古墳　16．長砂連古墳　17．大戸鼻北古墳　18．大鼠蔵西北麓2号墳　19．大鼠蔵尾張宮古墳　20．五反田古墳　21．田川内1号墳

第41図をみてもわかるように地域的にも石障系石室の分布地域には前方後円墳はみられない。

ヤンボシ塚古墳調査によって新たに生じた重要な問題に、従来知られていた船の線刻の年代が大きく遡ることになった点がある。線刻船を有する古墳が宇土半島に多いことはよく知られているところであり、船が確認されているのは5例（楢崎古墳・仮又古墳・桂原1号墳・桂原2号墳・塚原1号墳）で、その他に古墳そのものの確認はできていないものの城郭の石垣に転用された1例（古城古墳石材）や、船かどうか明らかでないが線刻を有する1例（東畑古墳）を合わせれば7例となる。

いずれも海に近い古墳に限られ、宇土半島基部の東側一帯では確認されていない。5例のうち、須恵器が出土して時期がおさえられる仮又古墳が7世紀前半であり[7]、他の4例も石室構造からみてそれに近い6世紀後半から7世紀前半頃に位置づけでき、ヤンボシ塚古墳がひとりはなれることになる。これと同種の石障系横穴式石室に船の線刻をもつ例は他に1例も知られていないが、今後発見されるであろう。

ヤンボシ塚古墳の玄門部構造が岡山県千足古墳と極めて近似し、千足古墳石室とヤンボシ塚古墳石室の構築が同一技術のもとに成立したことが明らかである。このことは千足古墳の直弧文ある石障材が宇土半島ないしは天草付近から運ばれた可能性がでてくると同時に彼地との交流[8]を考える上で極めて重要になってくるのである。

千足古墳が全国第4位の規模を誇る全長350mの造山古墳の西南西約200mの距離に位置し、その陪冢的存在であることはよく知られるところであり、石室構造や石障に刻まれた直弧文によってそれが九州的内容をもつことは明らかにされていた。千足古墳の石室に用いられた石材が西北九州の唐津湾に近い松浦から運ばれたのであろうという間壁忠彦・葭子氏の指摘[9]もあり、筆者もその見解を踏襲[10]したこともあるが、今回のヤンボシ塚古墳の発見によって石障材は中九州の有明海八代海沿岸の宇土半島から天草にかけての地域から運ばれた可能性[11]がでてきたし、間壁氏の所論と考えあわせれば石室壁体の割石は玄海灘からということも考えられる。

更に、千足古墳の主墳と見做される造山古墳前方部には刳抜式長持形石棺が現存し、それが阿蘇溶結凝灰岩製であることが改めて問題となってくるのである。長持形石棺で刳抜式棺身をもつものはこの造山古墳前方部所在石棺以外には1例も知られておらず、阿蘇溶結凝灰岩の刳抜で箱形に近いものは九州においては、一部の例外的な舟形石棺2例（熊本県向野田古墳・鹿児島県唐仁大塚古墳）と、刳抜式家形石棺の8例だけである。この造山古墳にある刳抜式長持形石棺について春成秀爾氏は鴨籠古墳（第2図分布図74参照）石棺との類縁性を明らかにし[12]、宇土半島周辺を含む肥後南部から運ばれたことを示唆されている。

造山古墳前方部所在石棺を実見したところでも鴨籠古墳との近似性は首肯でき、特に小口部外側の枕側で大きいカーブをもち、足側では直角に近い点で極めて共通しており他にはこれと

同じ形状のものは知られていないようである。長持形石棺を意識した方形突出や長側石を小口側に表現している点などは鴨籠古墳そのものにはみられないが、「長持形石棺に対する憧景の意識を棺身にだけ発露させた…」[13]という点で造山古墳所在石棺の意味が重要となってくるのである。

造山古墳前方部に所在するこの石棺は、もとからここにあり前方部の埋葬施設であったという見方と、造山古墳の北北西約300mの車塚古墳から出土したものを後世になって造山古墳前方部に移したものであるという見方の二説がある。簡単にはいえない点ではあるが、少なくとも全国的にも有数な規模を誇る造山古墳ないしはそれと密接な関係にある車塚古墳に宇土半島基部の古墳と同形態の石棺が存在しそれがこの地方から運ばれたということは、両地域の密接なつながりが明らかであり、同様に、千足古墳と宇土半島のヤンボシ塚古墳との近似性からみても両地域のいっそう強いつながりが裏付けできるのである。なお、鴨籠古墳石棺の棺蓋に線刻表現の直弧文が描かれていることは、千足古墳石障の浮彫による直弧文と併せて注意しておく必要があることはいうまでもない。

鴨籠古墳石棺と造山古墳前方部石棺がどこでつくられたかを特定することは、鴨籠古墳石棺と類似するものが全く知られていない点から考えてもかなり難しい点ではある。しかし、宇土半島基部石棺のいくつかが熊本県南部の氷川下流付近でつくられたと私考されるところから、この2例も同様にそこでつくられたとみてよかろう。岡山県2例の石棺と石障材の搬出ルートとしては、筆者が既に明らかにした他の阿蘇溶結凝灰岩製石棺と同じく八代海（有明海）を出て東シナ海－玄海灘－周防灘－瀬戸内海というコース[14]が最も適当であろうと考えられるのである。

ヤンボシ塚古墳とほぼ同時期かそれよりやや遅れるとみられる楢崎古墳は、宇土半島基部の東端に位置し丘陵先端部の地形を巧みに利用してつくられているが残念ながらその墳形が前方後円墳であったのか円墳であったのかは俄に決しがたい。前方後円墳であったとすれば全長46m、後円部高さ5.7mであり、後円部に4基、前方部に1基という埋葬施設を考えることができるが、円墳とするなら直径22m、高さ2.7mの規模となり、埋葬施設4基はこの古墳に併列するとみても他の1基は遊離することになって一応は別の墳墓として切り離されることになる。この古墳が前方後円墳でないとすれば宇土半島基部の5世紀の古墳がほとんどなくなってしまうことになり、その意味は大きい。

5基の埋葬施設が舟形石棺、家形石棺、石蓋土壙、箱式石棺というのもおもしろいところではあるが、このうちの4基が主軸を同一の方向に平行して並んでいるのも重要な点で、時間的にさほど経過しない程度に順次埋置されたものとみられる。埋置されたのは2号－3号－1号－4号の順が考えられ5号がこれにつづくのであろう。古墳の上限を5世紀後半におき、下限は6世紀に入っていた可能性もある。

舟形石棺や家形石棺が3基以上併存している例としては山鹿市辻古墳（舟形石棺1基、家形石棺2基、箱式石棺1基）、玉名市院塚古墳（舟形石棺4基）、福岡県高田町石神山古墳（舟形石棺3基）、同県大牟田市石櫃山古墳（舟形石棺3基）、香川県綾歌町快天山古墳（割竹形石棺3基）、同県津田町赤山古墳（割竹形石棺3基？）などが知られ、楢崎古墳例と同じく多様な石棺を持つという点では辻古墳が最も似るが、円墳上に4基が方向を異にしてバラバラに配されているという点で異質である。しかし、時期的には辻古墳[15]がやや古い段階に位置づけられるものの楢崎古墳とはそれほどの隔たりはないと考えられる。

楢崎古墳2号石棺は原実測図の誤りによって、従来、家形石棺として分類されていたが、棺身に舟べり状の縁辺突帯をめぐらすことや棺身の断面形が逆台形をなすなど舟形石棺とすべきものである。しかし棺身内面がほぼ垂直で棺蓋の形状が3号や1号などの組み合わせ式家形石棺に近くなっている点などは否定し難く、そこに2号石棺を舟形石棺のなかでは新しい段階（家形石棺発生後）に位置づけようとする所以が存在するのである。

3号石棺と1号石棺はほぼ同じ形状の棺蓋をもつが、3号では棺蓋1石、棺身4石が用いられ、2号では棺蓋2石となるのに対応するかのように棺身も6石となっている。この傾向は他の家形石棺においてもいえることであり、棺蓋に2石を用いることによって追葬しやすくしたとみるべきであろう。追葬の段階で棺蓋の一端を破損させたものでなかろうことは、棺身材も長側辺に2石ずつ用いているものが大半であることからも首肯できよう。棺蓋が2石を用いるようになる家形石棺は、初期の家形石棺にはみられずやや後出的要素のひとつと見做してよいところから、1号石棺が3号石棺より遅れるとみてよい。

以上の3基の石棺に較べると4号棺は素掘りの土壙に板石2枚を載せただけのもので極めて貧弱なつくりといわざるを得ない。しかもその規模は極めて小さく、被葬者を仰臥伸展葬で納めたとすれば身長も低く肩幅も狭くなる。小口部が垂直であり板状のものを立てたとみることも否定できないが、底面に掘りこみは認められずより狭くなってしまうという点からみても直葬のままであったとみられる。4基とはひとつだけ離れたところに位置する5号棺は箱式石棺としてはやや作りが丁寧であり、現状では棺身の上部に礫を並べている。石棺系石室に共通した要素ではあるが、小口積みにしているのは1段だけで、ここでは箱式石棺とした。

楢崎古墳の5基の埋葬施設には全て阿蘇溶結凝灰岩が用いられ、それが8回のうちの何回目の噴火によってできたものであるかは第2表に示したとおりであるが、その石材の産出地を特定することは理学的にはかなり困難である。というのは、この石が阿蘇山のある熊本県を中心として大分・福岡・長崎・宮崎の各県にまたがって分布しており8回それぞれの地質分布図が完成したとしても分布地域が広大であることにかわりはないからである。しかも、楢崎古墳の5棺が全てそうであったように阿蘇溶結凝灰岩製石棺の9割近くが6回目と8回目のいずれかであり、それが、現在確認し得る露頭として最も多いのは、後から堆積し上層に位置する以上

当然のことだからである。いいかえれば、石棺材として6回目と8回目のそれが最も採り出しやすかったのである。ちなみに7回目の火砕流堆積物は溶結化しておらず石材として切り出すことが殆ど不可能で、管見によれば室の山2号石棺の1例だけである。

石棺は、仕上げまでの殆どの工程を石材産出地の付近で行ない、完成品ないしはそれに近い状態の石棺が古墳まで運ばれたと考えられる。産出地がどこであるかによって石棺の特徴が異なり、同一産出地のものは形態的にも共通したものが多くなるのは当然のことである。筆者は、この方法によって九州外に存する阿蘇溶結凝灰岩製石棺10例のうちの6例が熊本県北部を流れる菊池川の下流域付近で製作され、そこから運ばれたことを明らかにしたことがある[16]。残り4例は熊本県南部の氷川下流域付近でつくられたとみてよかろう。

檜崎古墳の周辺には阿蘇溶結凝灰岩の露頭は知られておらず、これらの石棺が他の地域から運ばれてきたものであることは明らかである。しかし形態の特徴が明確な1～3号石棺に類似するものは他地域にもみられず、3石棺に共通する棺蓋周縁に平坦面をめぐらすという特徴[17]が熊本県中南部に多いということを明らかにしておくにとどめておくが、石材の色調からは氷川下流域でない可能性がある。将来に委ねておきたい。

ヤンボシ塚古墳と檜崎古墳が5世紀後半の比較的に近い時期に構築されたと考えられることは冒頭でも述べたが、埋葬施設は全く異なるものであった。熊本県下の石障系横穴式石室が前方後円墳、いいかえれば大地域の首長墓に採用されることはなく、小地域の族長クラスの人の墳墓であったとみられる。宇土半島基部には1例も知られていないことがこのことを示しているといえよう。檜崎古墳が前方後円墳でない可能性があるためにこの古墳を首長墓とすることはできないが、この地域に前方後円墳は多く、しかも舟形石棺や家形石棺が首長墓に採用されることはよくあり、いわば伝統的墓制であることはここで改めて述べるまでもなかろう。そしてそれらの石棺は特定地域の専門工人につくらせた可能性が高いのである。

首長墓の存する地域の墓制と周辺地域の小族長クラスの墓制は異なっているのである。

（高木・木下）

註 (1) 三島格・他「城二号墳」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第3集、1981年、宇土。

(2) 柳沢一男「肥後型横穴式石室考一初期横穴式石室の系譜一」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』1980年、太宰府。

(3) 実政勲「向野田古墳出土試料の分析」向野田古墳、宇土市埋蔵文化財調査報告書第2集、1978年、宇土。

(4) 註1書78頁参照。

(5) 註2書の集成において柳沢氏は熊本県内を15例挙げているが、その他に将軍塚古墳、児島崎古墳、重盛塚古墳、りゅうがん塚古墳、小鼠蔵西北麓2号墳、ヤンボシ塚古墳が追加されること

になる。

(6) 甲元眞之・松本健郎他「宇土半島古墳群分布調査報告II（郡浦・戸馳・三角・大岳地区）」『三角町文化財調査報告』第6集、1986年、三角。

(7) 平山修一「仮又古墳」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第6集、1982年、宇土。

(8) 高橋護・中村昭夫『古備の巨墳』山陽新聞社、1980年、岡山。

(9) 間壁忠彦・間壁葭子「石棺研究ノート(3)長持形石棺」『倉敷考古館研究集報』第11号、1975年、倉敷。

(10) 高木恭二「環状縄掛突起を有する石棺について－特にその石棺材の産地をめぐって－(1)、(2)」『熊本史学』第53・54号、1979・1980年、熊本。

(11) 註10書において千足古墳石障材に松浦砂岩が用いられたのではないかとした筆者の見解に対し、小林行雄氏からそれが熊本から運ばれたのではないかとの指適をうけたことがある。（昭和55年8月2日付、私信による）。

(12) 春成秀爾「造山・作山古墳とその周辺」『岡山の歴史と文化』藤井駿先生喜寿記念会、1983年、岡山。

(13) 註12書24頁参照。

(14) 高木恭二「石棺輸送論」『九州考古学』、1983年、福岡。

(15) 原口長之他『山鹿市史』1985年、山鹿。

(16) 註14書参照。

(17) 佐田茂・高倉洋彰「九州の家形石棺」『筑後古城山古墳』1972年、福岡。

X線粉末回折法による顔料等の分析

熊本大学　理学部　地学教室　　水　田　敏　夫

固体物質の大部分は原子が規則正しく配列した結晶よりなる。とくに天然に産する結晶は鉱物と呼ばれる。同一結晶の集合体もしくは何種類かの結晶の混合体からなる物質の同定にはX線粉末法が広く用いられる。

当方法は入射X線を粉末化した結晶粒集合体に対して照射し、ある結晶の三次元に配列している原子群がつくる面 (hkl) に対して反射をおこさせ、回折されてくる反射X線の強度をカウンターで記録する方法である。回折される角度及びX線カウント比は各々の結晶もしくは鉱物によって異なる。これらの実測値から得られる情報を解析すればその鉱物がどのようなものか、もしくはいくつかの混合物であるかを特定することができる。

今回は赤色を呈する顔料及び古墳内下部に堆積している暗赤褐色粘土質土壌をX線回折分析した。その結果を第42図及び第6表に示す。分析の条件は特性X線にCu-Kα、加速電圧30KV、加速電流1.5mAであった。

1．赤色顔料 (Sample-1)

同試料は明るい赤色を呈し、板石上にうすく塗布されているものである。これをカッターナイフで極少量取り出し分析に供した。顔料は大部分が赤鉄鉱(Hematite)と呼ばれる酸化第二鉄(α-Fe_2O_3)からなっていることが判る。その他に石英(Quartz, SiO_2)や斜長石(Plagioclase, $CaAl_2Si_2O_8$—$NaAlSi_3O_8$固溶体)及びカオリナイト(Kaolinite, $Al_4Si_4O_{10}(OH)_8$)系の粘土鉱物が含まれている。分析した試料がごく少量であり、同定のための回折ピークが小さかったこともあるが、粘土鉱物として、より精密に検討するには試料からの分離量を増やして再分析を行う必要がある。

2．古墳内粘土資料 (Sample-2)

本試料は暗赤褐色を呈し、1～3cmの小石状レキや砂粒を多く含む土壌様物質である。この試料の細粒部をX線分析した結果、主に次のような鉱物からなっていることが判った。石英、クリストバル石 (Cristobalite, SiO_2)、赤鉄鉱及びカオリナイト系粘土鉱物からなっている。特徴的なことはクリストバル石、粘土鉱物の多いこと、また赤鉄鉱も多量に含有されていることである。

相平衡的なクリストバル石の大気圧における安定温度は1470°C—1723°Cという非常に高温である。安山岩などの高温でできた火成岩中の空隙や石基中に含まれることがあるが量は少ない。

Table　Analytical results of the paint by X-ray powder method.

Sample-1

Peak (2 theta)	d-value	Intensity	Minerals
8.72	10.14	46	
19.36	4.585	44	
19.87	4.469	55	K
21.74	4.087	69	Q
26.46	3.368	47	Q
27.31	3.266	58	Pl
29.66	3.012	49	
33.02	2.713	100	H
35.49	2.529	80	H
40.82	2.210	39	H
53.94	1.700	61	H
62.40	1.488	29	H
66.65	1.403	29	

Sample-2

Peak (2 theta)	d-value	Intensity	Minerals
8.54	10.36	6	
11.99	7.382	10	K
18.17	4.883	10	
19.76	4.493	25	K
20.76	4.279	12	Q
21.81	4.075	50	C
24.53	3.628	7	H
26.52	3.361	100	Q
28.27	3.157	10	C
31.35	2.853	8	C
33.03	2.712	11	H
34.81	2.578	15	K
35.48	2.530	13	H
39.47	2.283	10	H, Q
42.50	2.127	11	Q
50.15	1.819	15	H, Q
53.70	1.707	10	H
54.82	1.674	9	H, Q
57.05	1.614	8	C
60.07	1.540	10	Q
62.03	1.496	7	C
62.35	1.489	9	H
64.07	1.453	9	H
68.36	1.372	10	Q

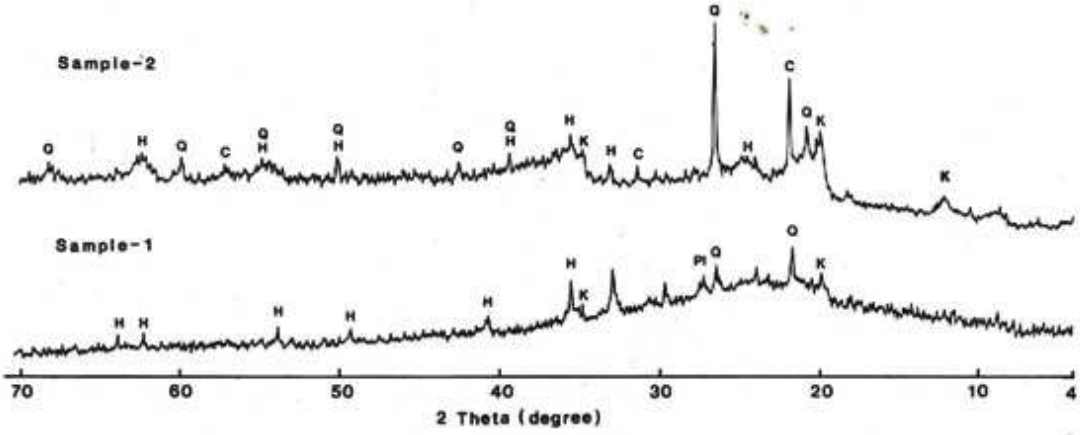
Abbreviations;
Q = Quartz,　H = Hematite,　C = Cristobalite,
K = Kaolinite,　Pl = Plagioclase.

第6表　X線粉末法による顔料の分析結果

略号：Q—石英，H—赤鉄鉱，C—クリストバル石
K—カオリナイト，Pl—斜長石

一方、地熱活動などの熱水変質を受けた岩石中ではもっと低温の非平衡状態で他の粘土鉱物等とともに形成されることも多い。この試料中のクリストバル石は粘土鉱物の共存とも考え合わせると後者によって生成したと思われる。

また赤鉄鉱も通常の風化土壌と比較にならない程多量に含まれている。砂レキを含んだ当土壌中に何らかの意図をもって粘土質物質及び赤鉄鉱が多量に付加されたものと推定される。



第42図　X線粉末法による回折パターン

（鉱物の略号は第6表と同じ）

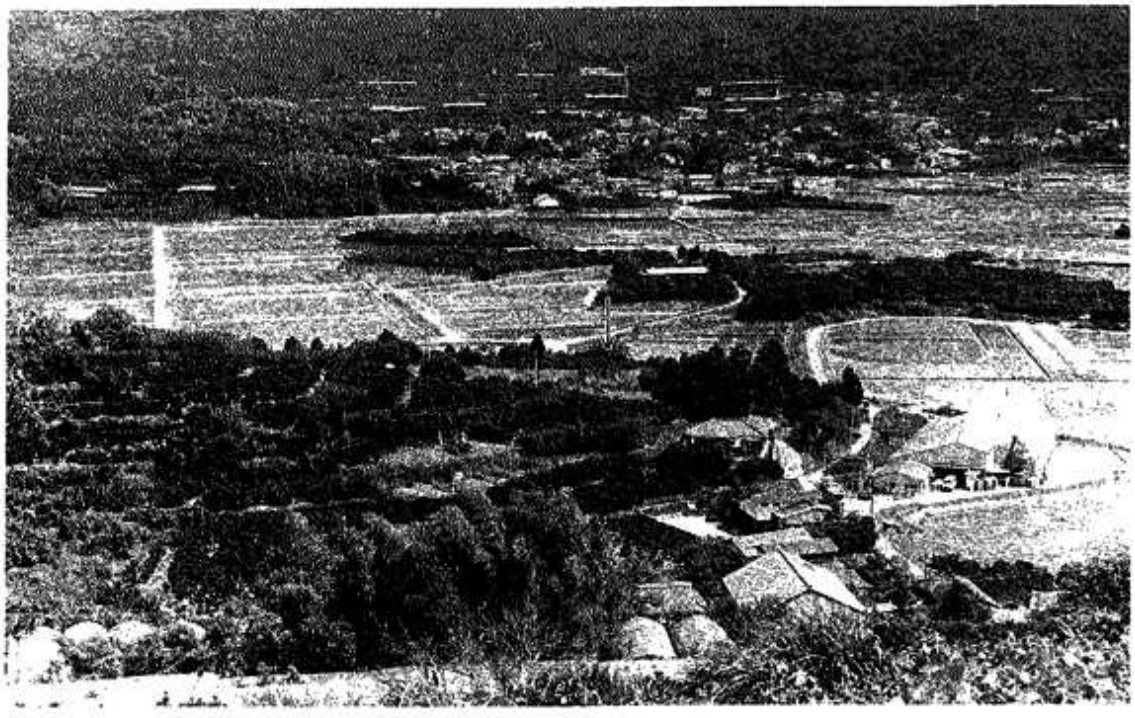
図　　版

ヤンボシ塚古墳周辺空中写真

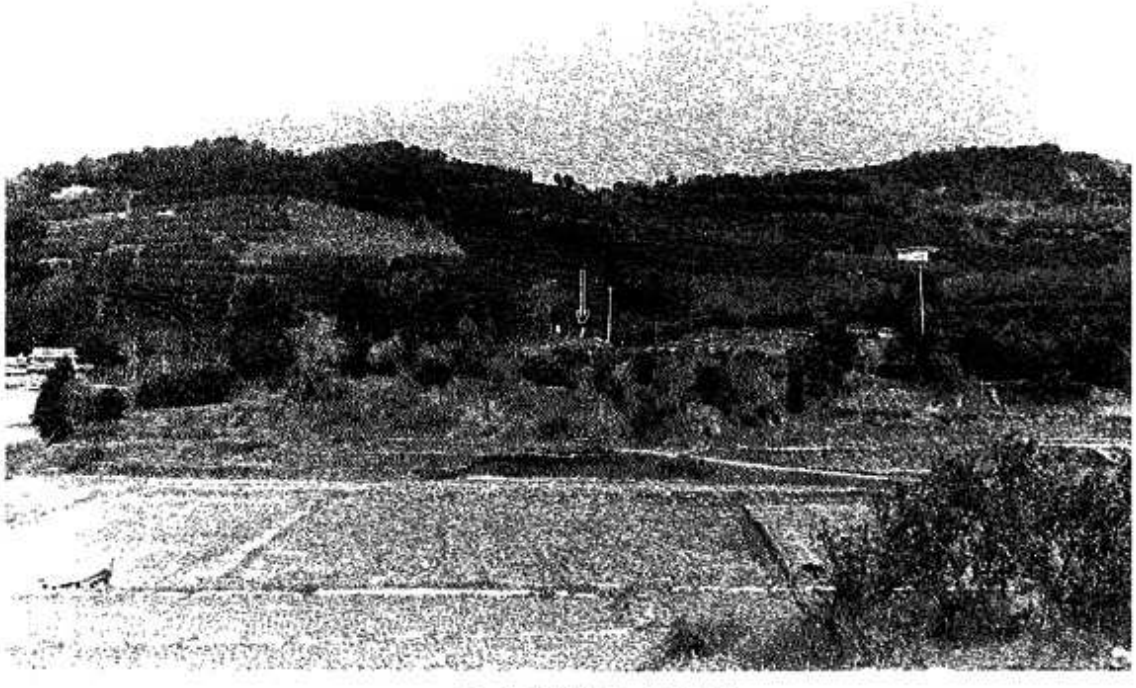
1 ヤンボシ塚古墳　2 城古墳群　3 マブシ古墳群

4 小松古墳群

図版 2



ヤンボシ塚古墳遠景〈北から〉



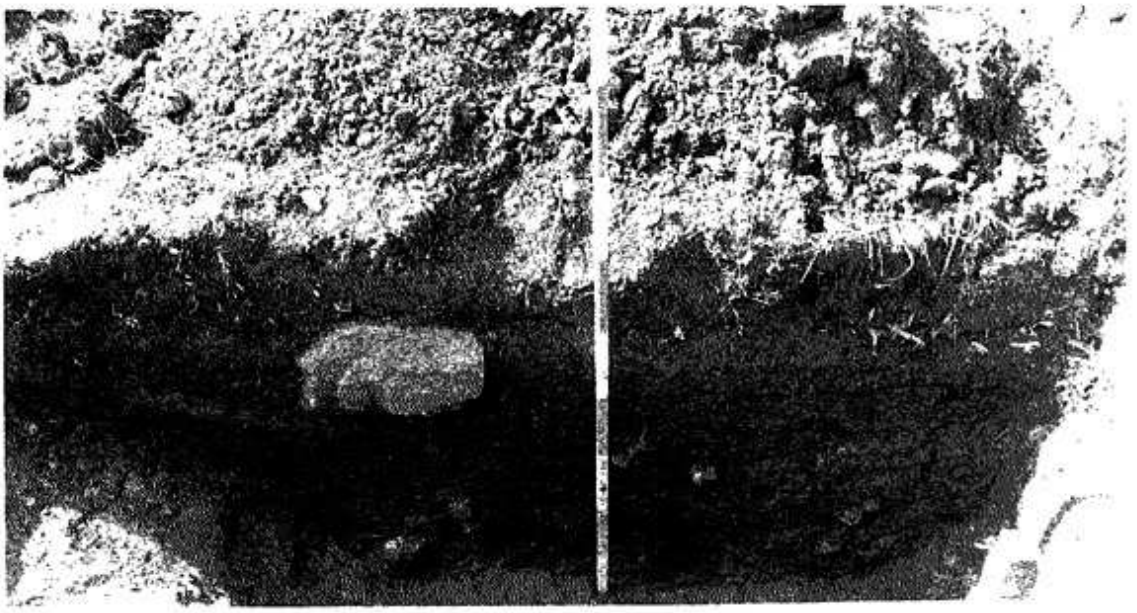
ヤンボシ塚古墳遠景〈南から〉

ヤンボシ塚古墳墳丘〈北東から〉

ヤンボシ塚古墳墳丘〈南から〉

ヤンボシ塚古墳周溝

ヤンボシ塚古墳周溝



ヤンボシ塚古墳周溝土層

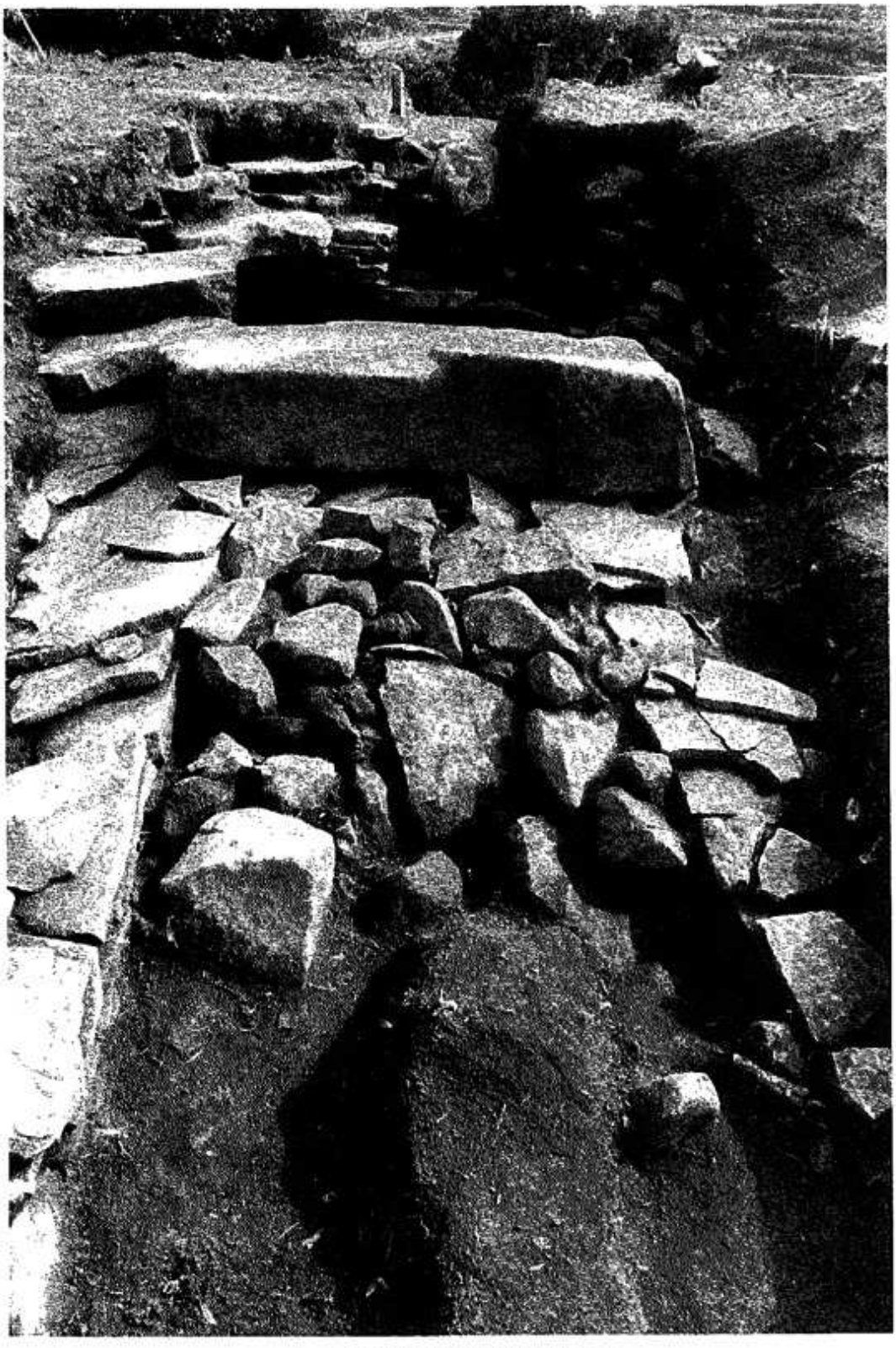
ヤンボシ塚古墳周溝

図版 6

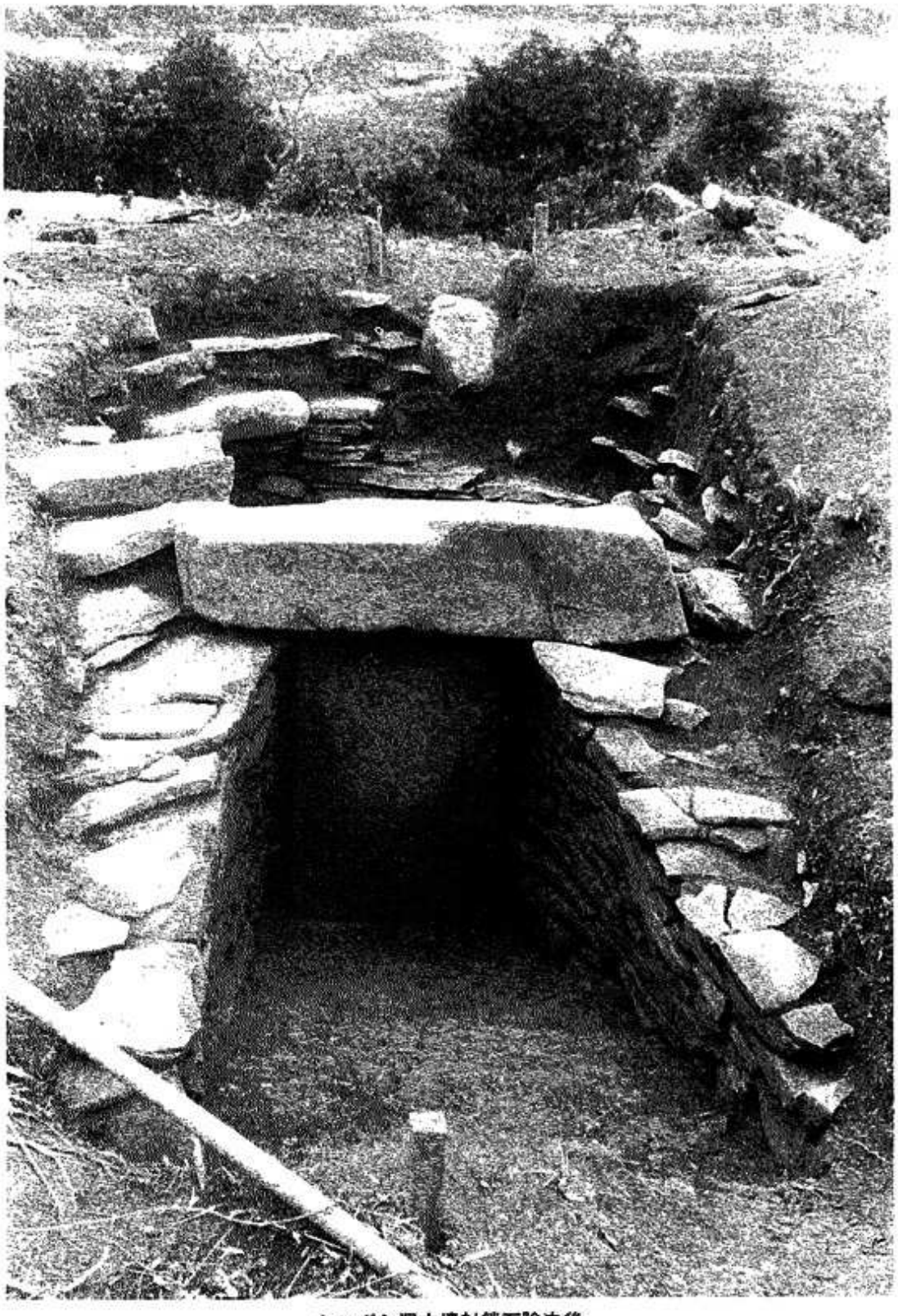
ヤンボシ塚古墳石室

ヤンボシ塚古墳石室

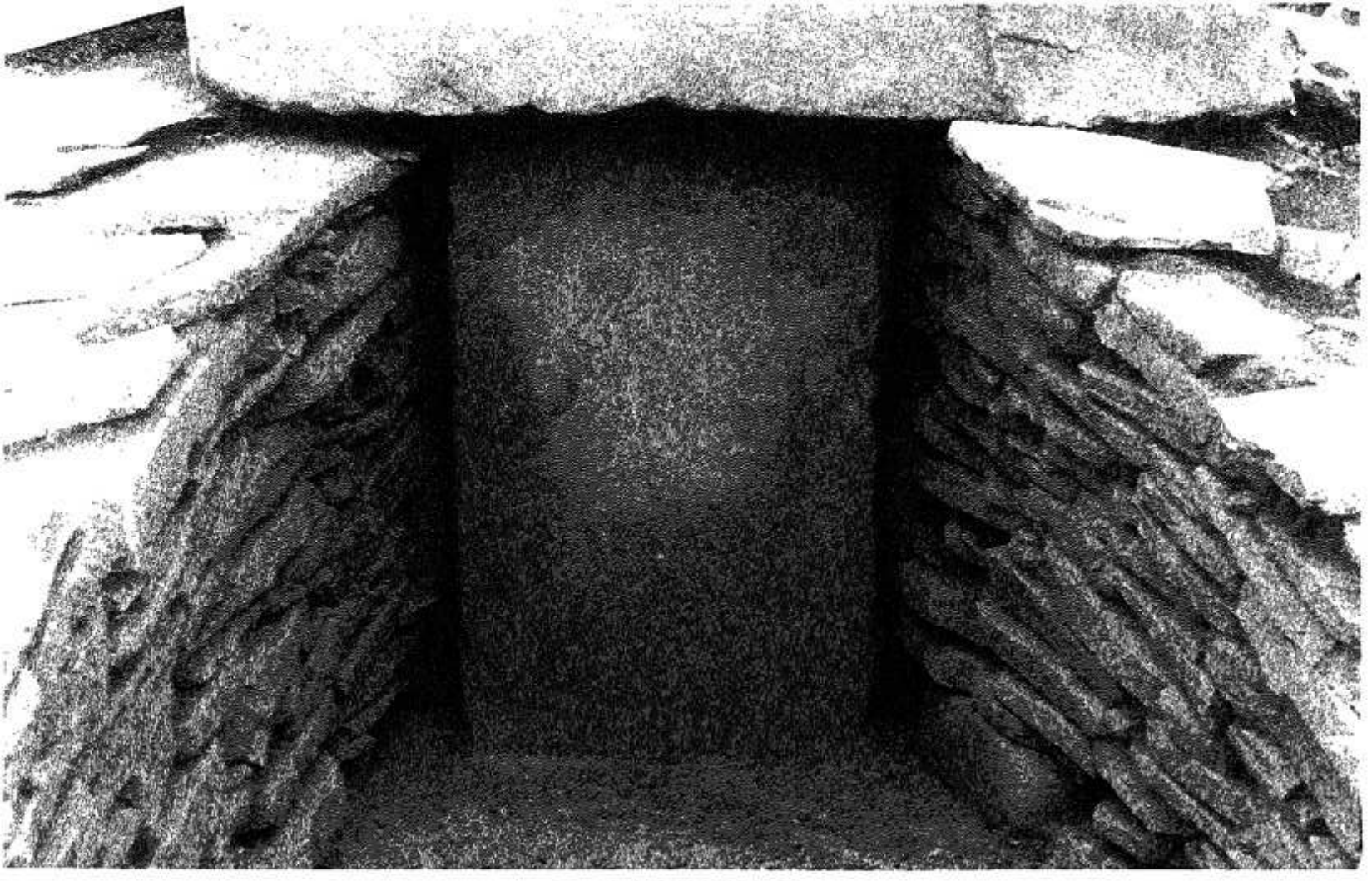
図版 8



ヤンボシ塚古墳閉塞状況〈封鎖石〉

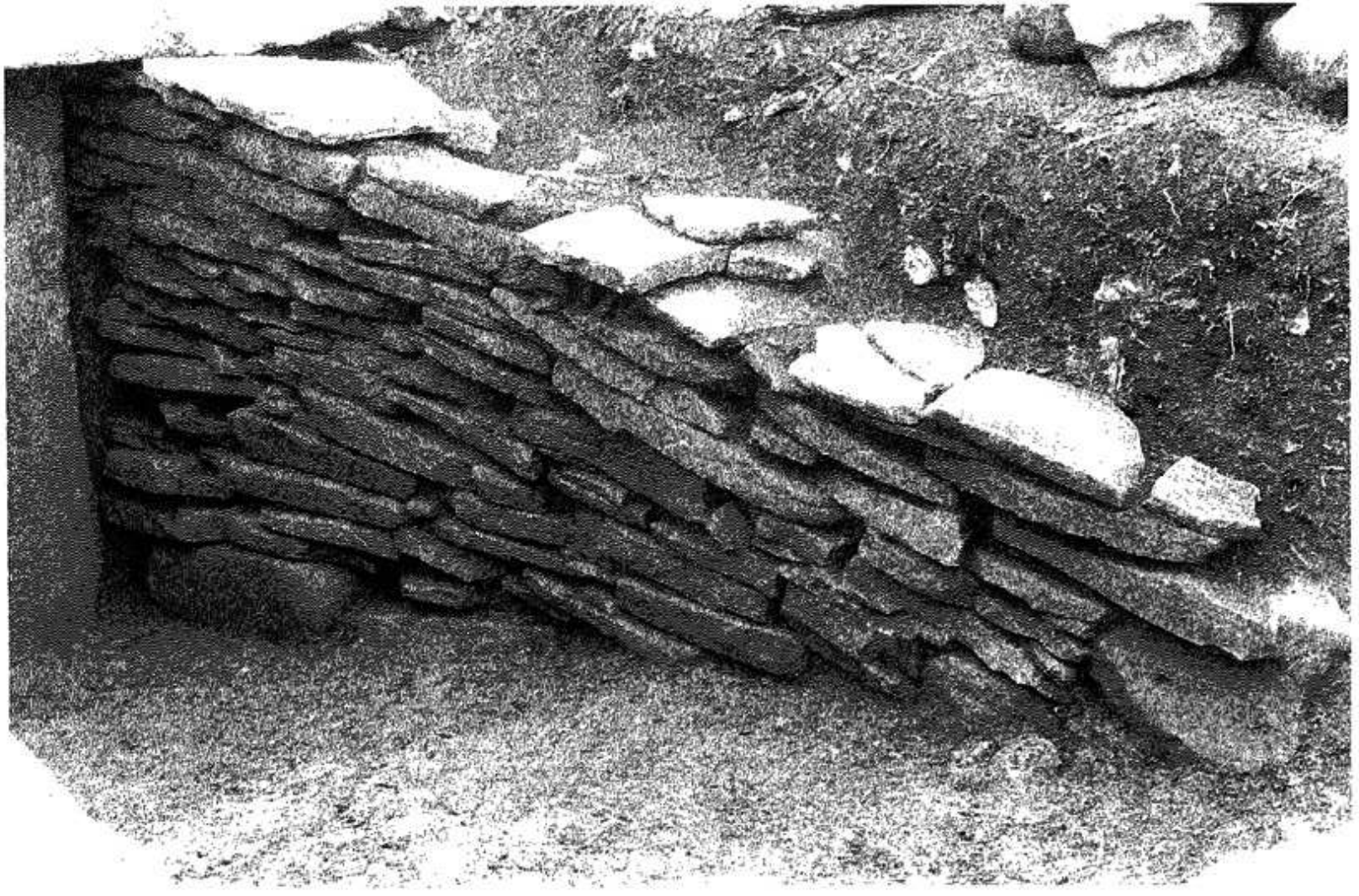


ヤンボシ塚古墳封鎮石除去後



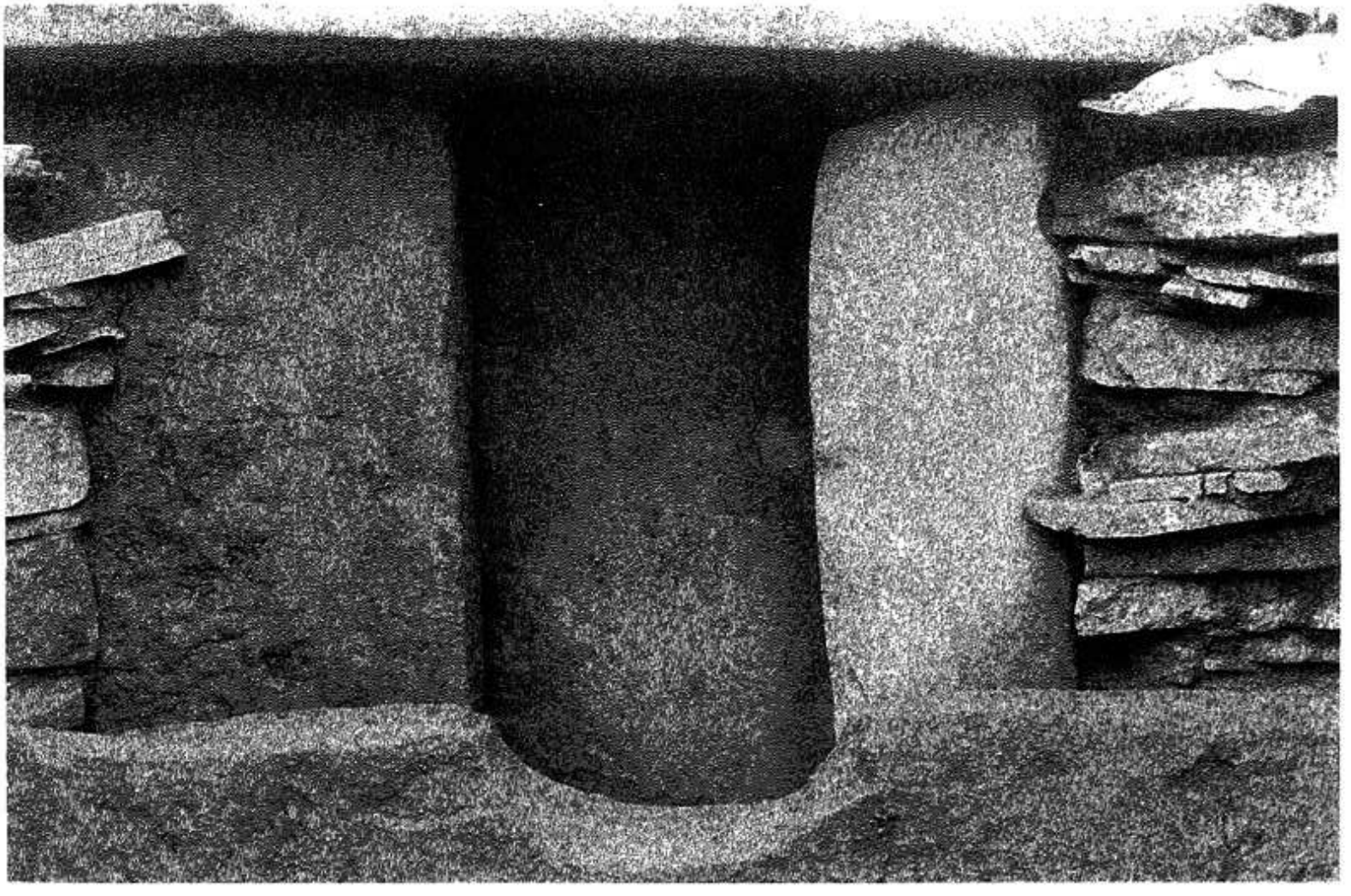
ヤンボシ塚古墳羨道部〈扉石〉

ヤンボシ塚古墳羨道部左壁



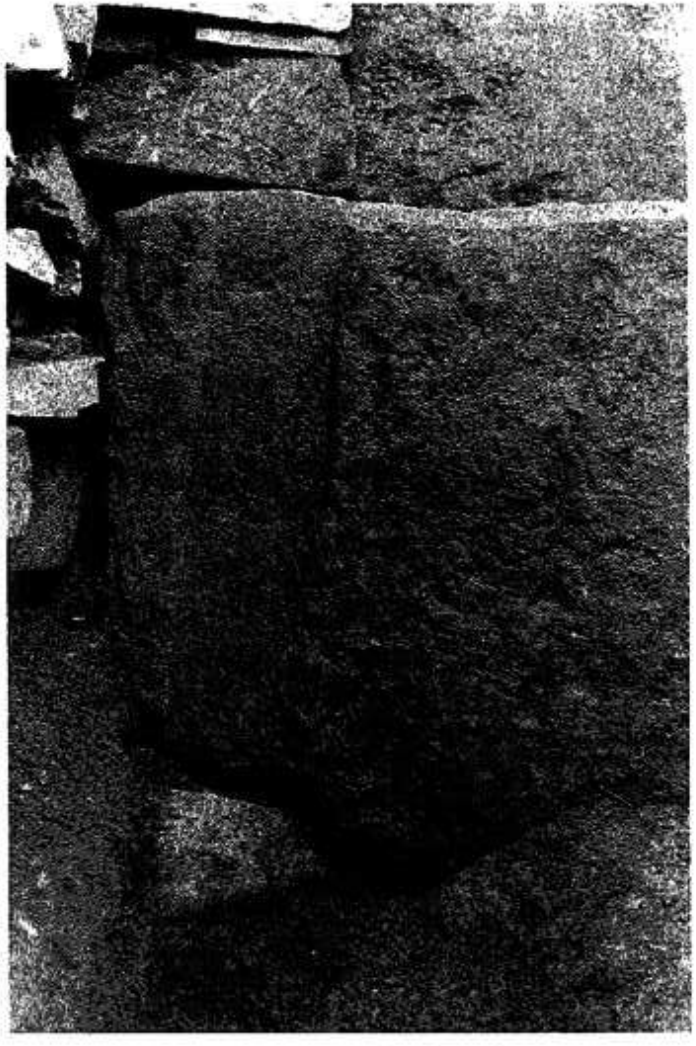
ヤンボシ塚古墳羨道部右壁

ヤンボシ塚古墳玄門部

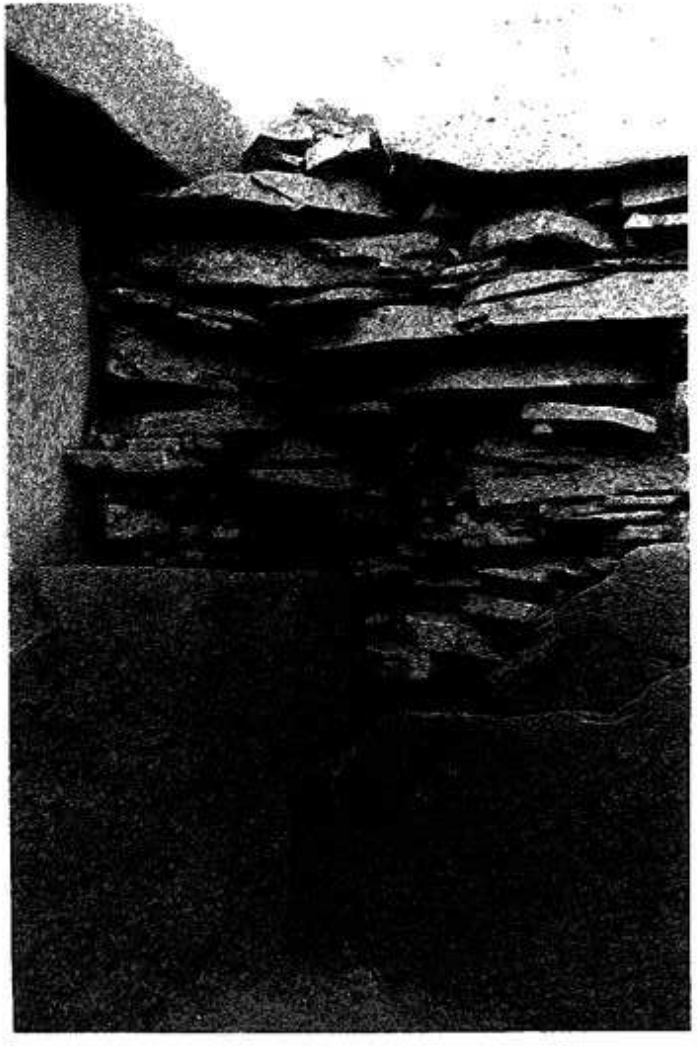


ヤンボシ塚古墳玄門

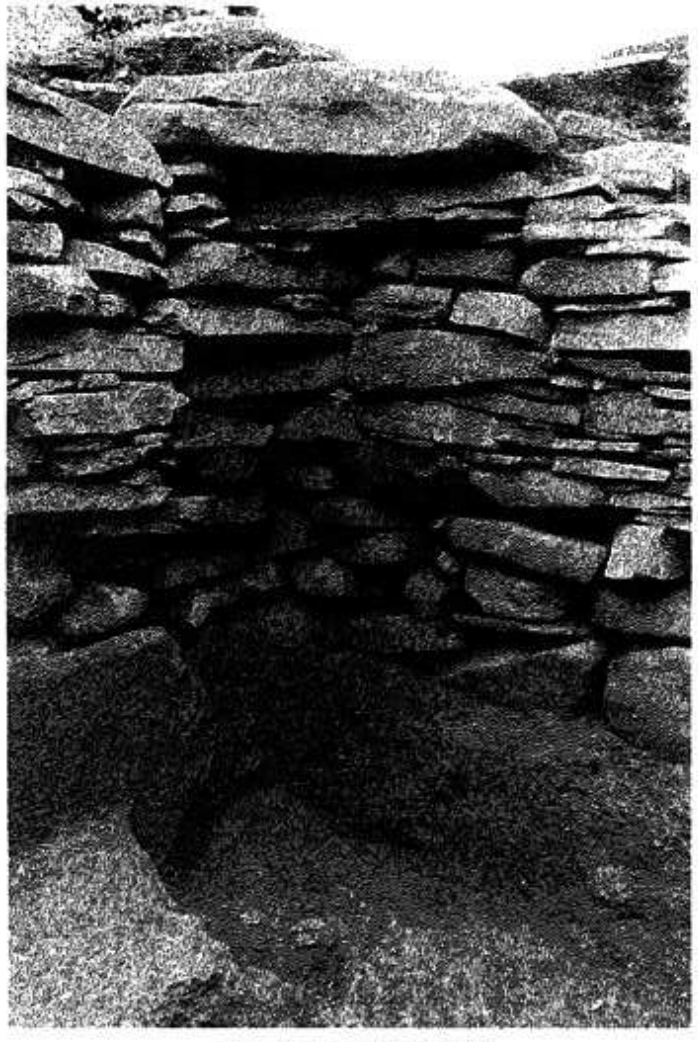
ヤンボシ塚古墳石室奥壁



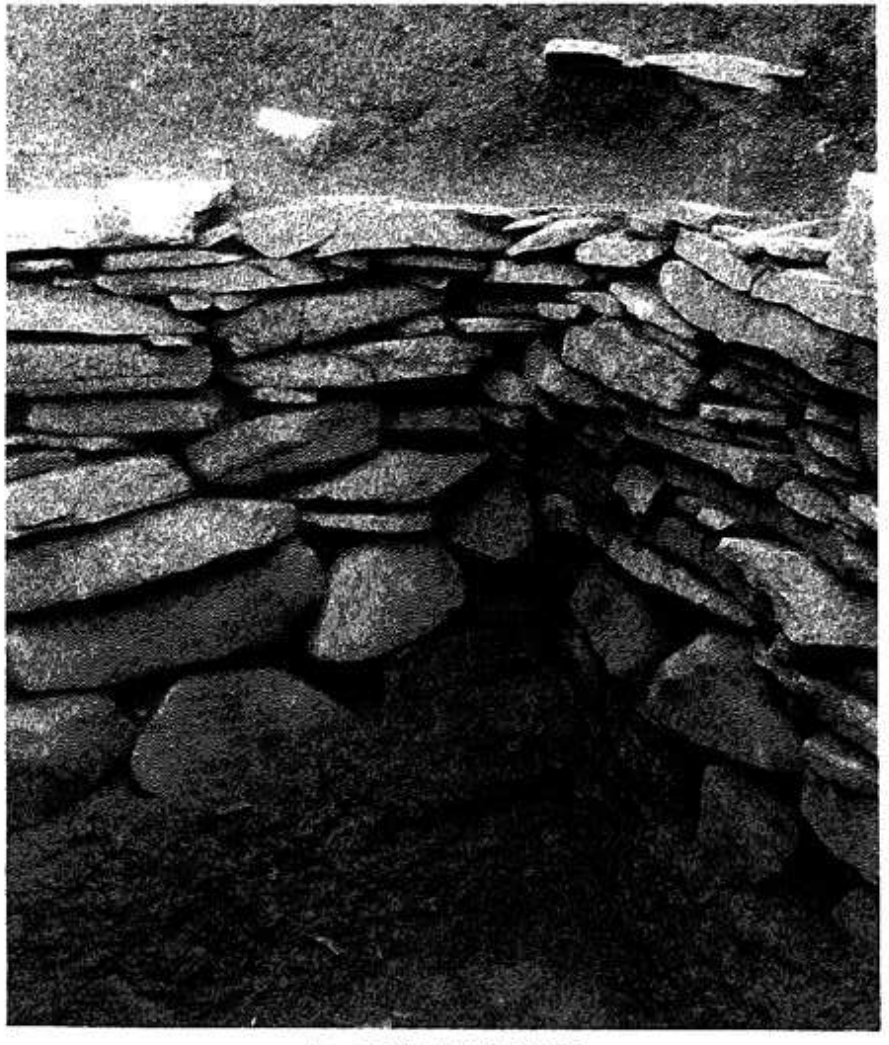
ヤンボシ塚古墳前障右側



ヤンボシ塚古墳前障左側



ヤンボシ塚古墳奥壁左側

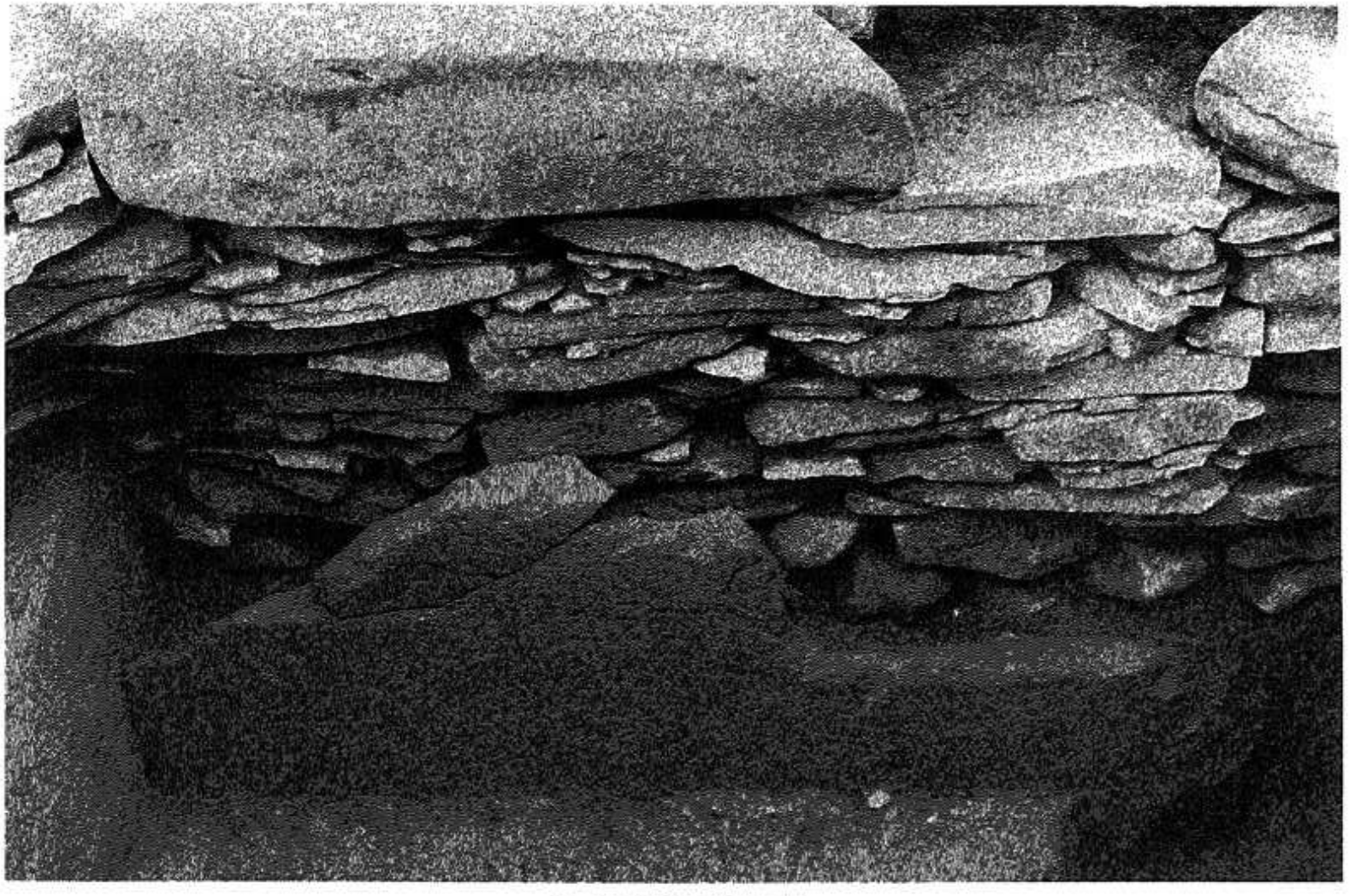


ヤンボシ塚古墳奥壁右側

図版18

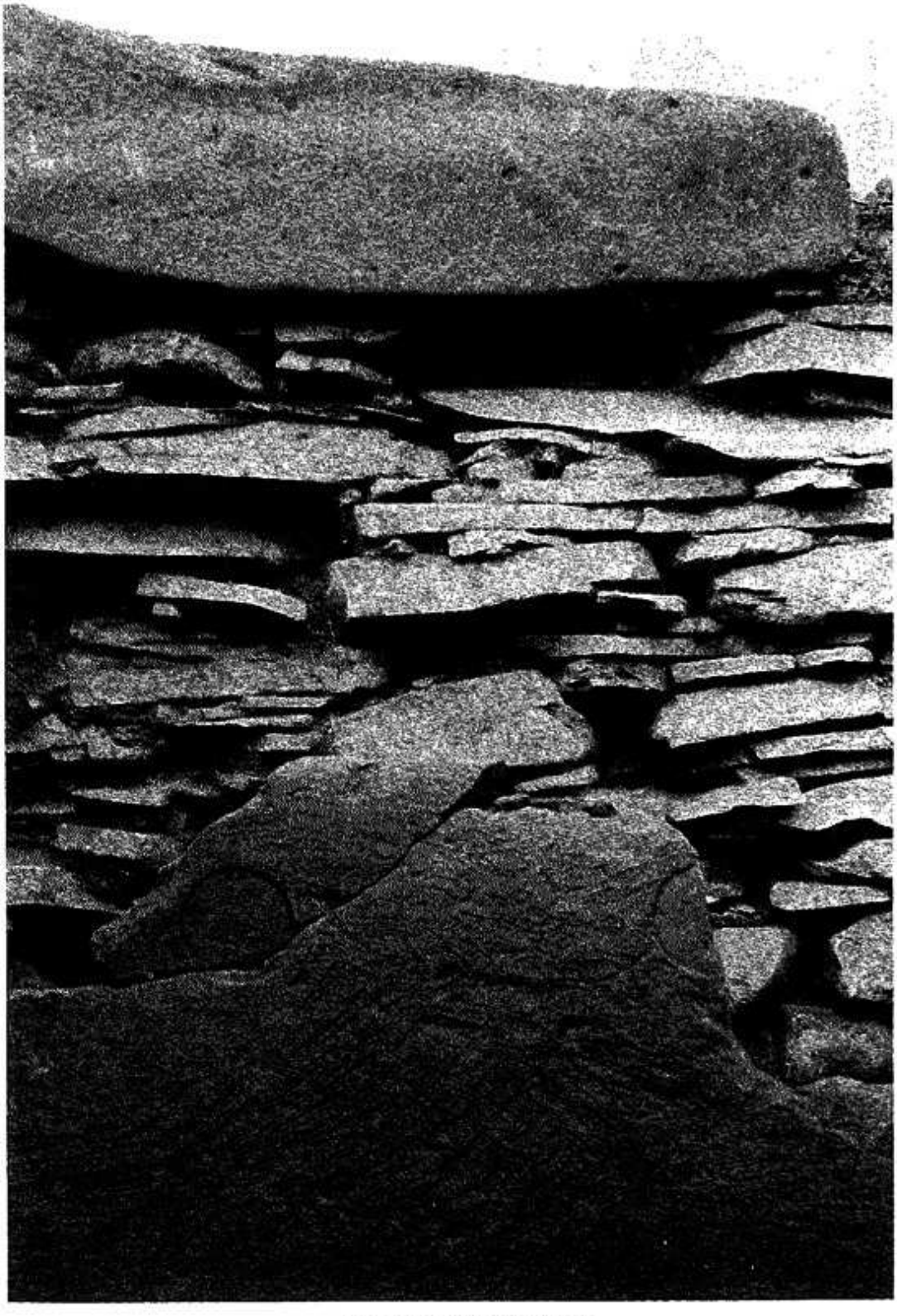
ヤンボシ塚古墳奥障痕跡右側

ヤンボシ塚古墳奥障痕跡左側



ヤンボシ塚古墳石室左側壁

図版20



ヤンボシ塚古墳石室左側壁

ヤンボシ塚古墳石室右側壁

ヤンボシ塚古墳石室床面

ヤンボシ塚古墳石室仕切石痕跡

ヤンボシ塚古墳石室仕切石と礫

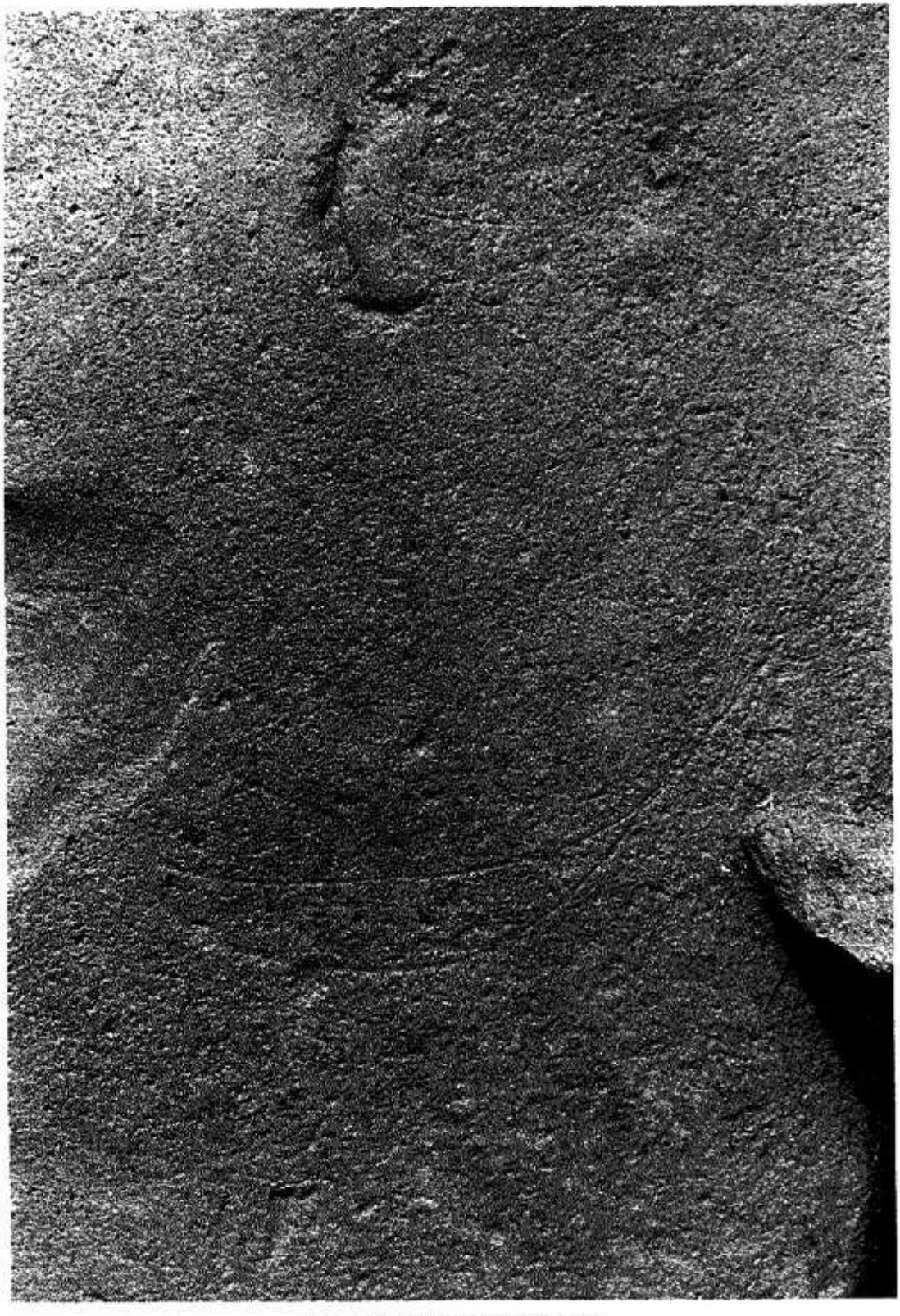
ヤンボシ塚古墳遺物出土状態

ヤンボシ塚古墳左障の円文

ヤンボシ塚古墳左障左側円文

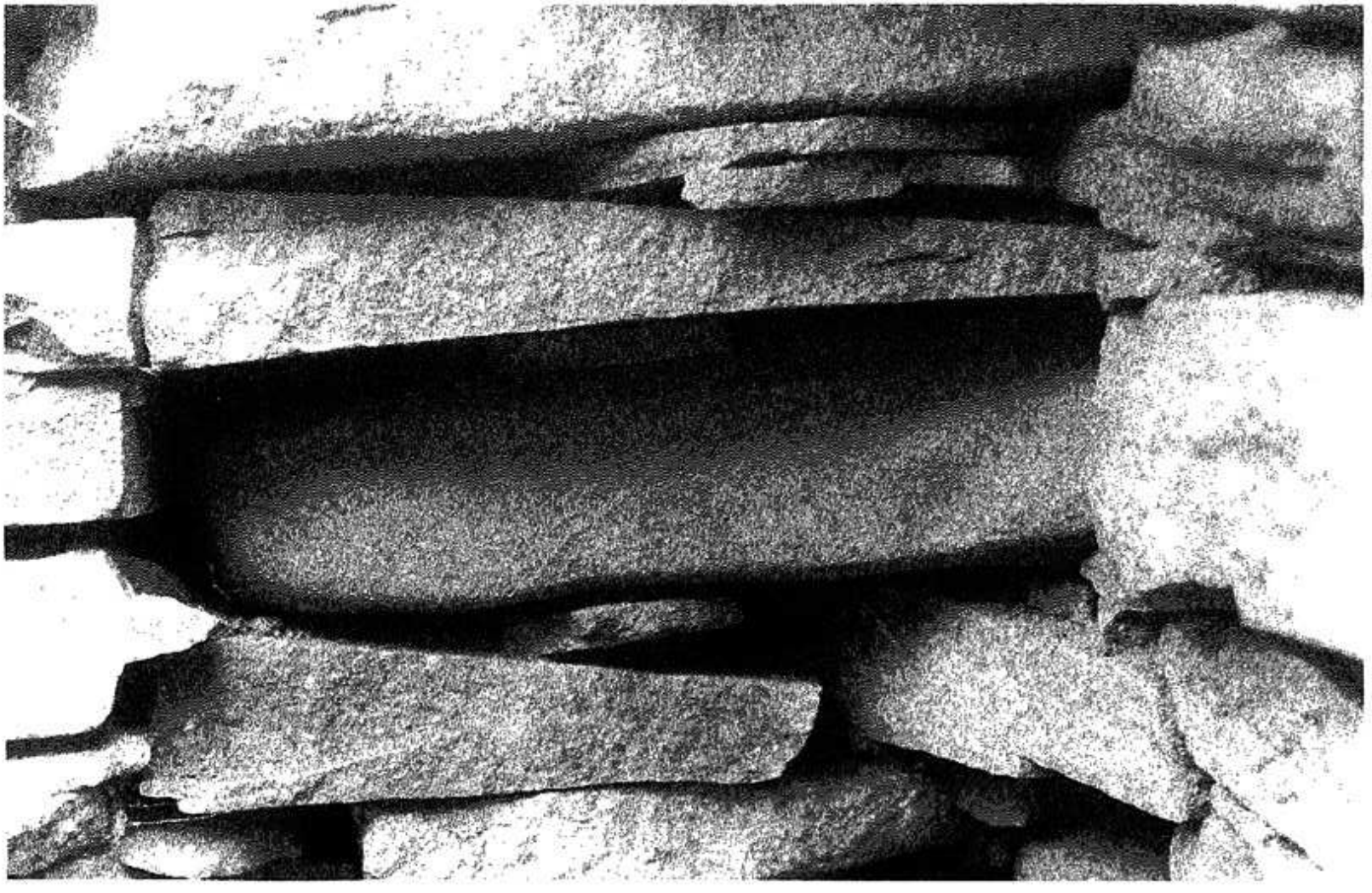
ヤンボシ塚古墳左障右側円文

図版26

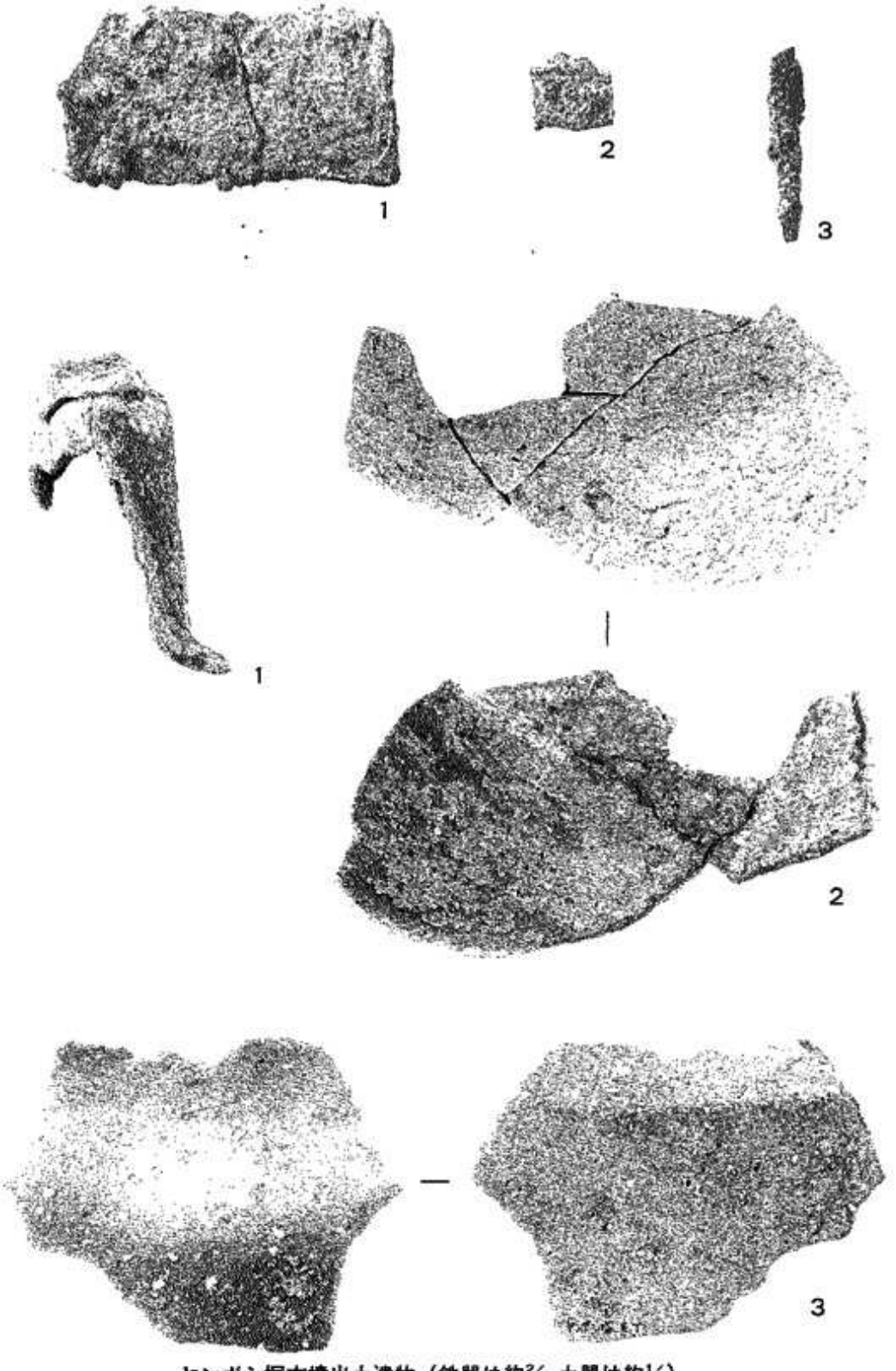


ヤンボシ塚古墳左袖石の線刻船１

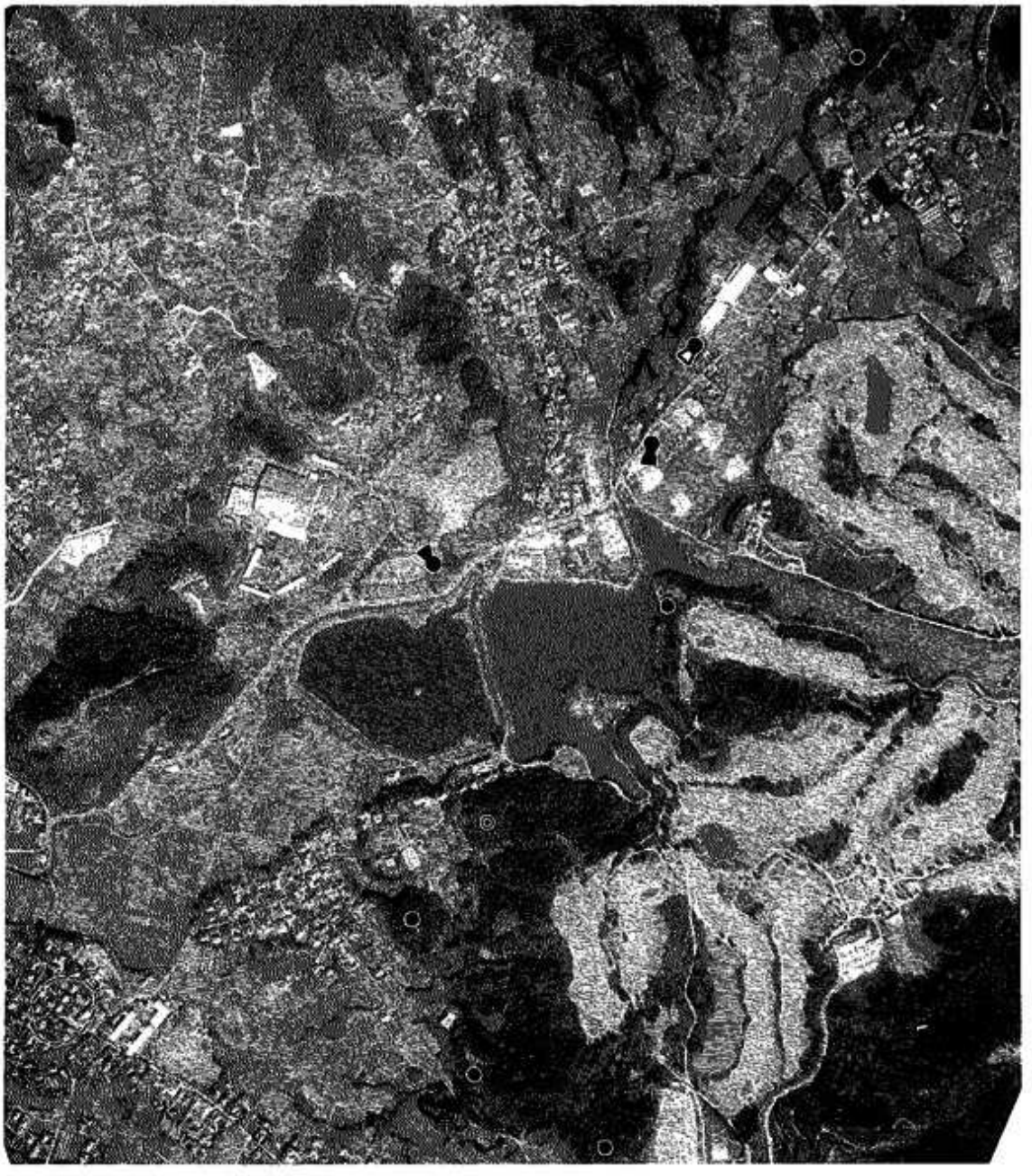
ヤンボシ塚古墳左側壁の線刻船 2



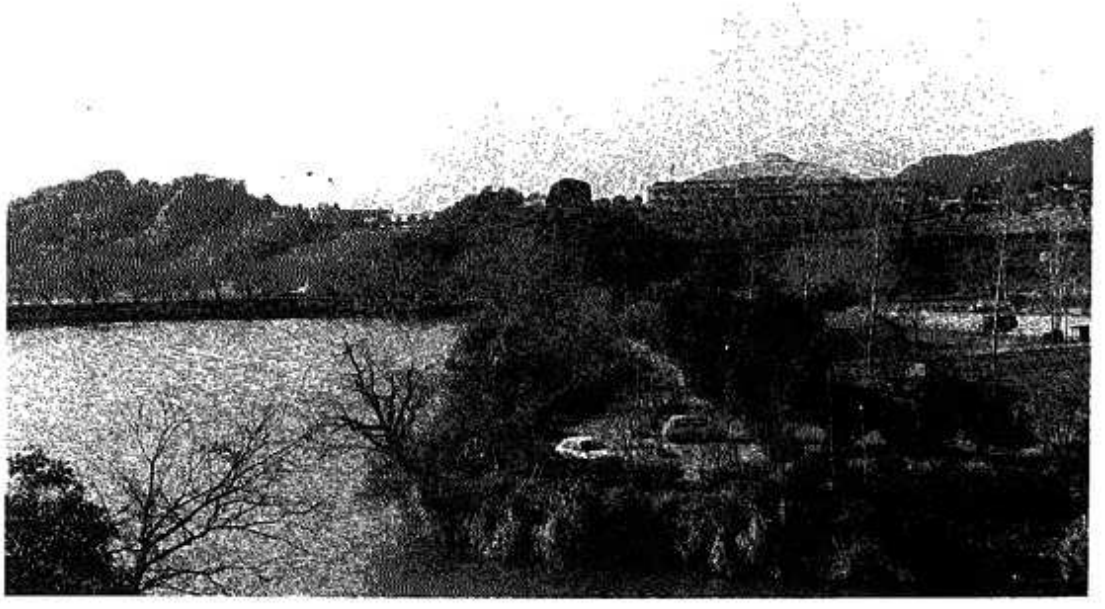
ヤンボシ塚古墳左側壁の矩形線刻



ヤンボシ塚古墳出土遺物（鉄器は約⅔ 土器は約½）



稲崎古墳周辺空中写真

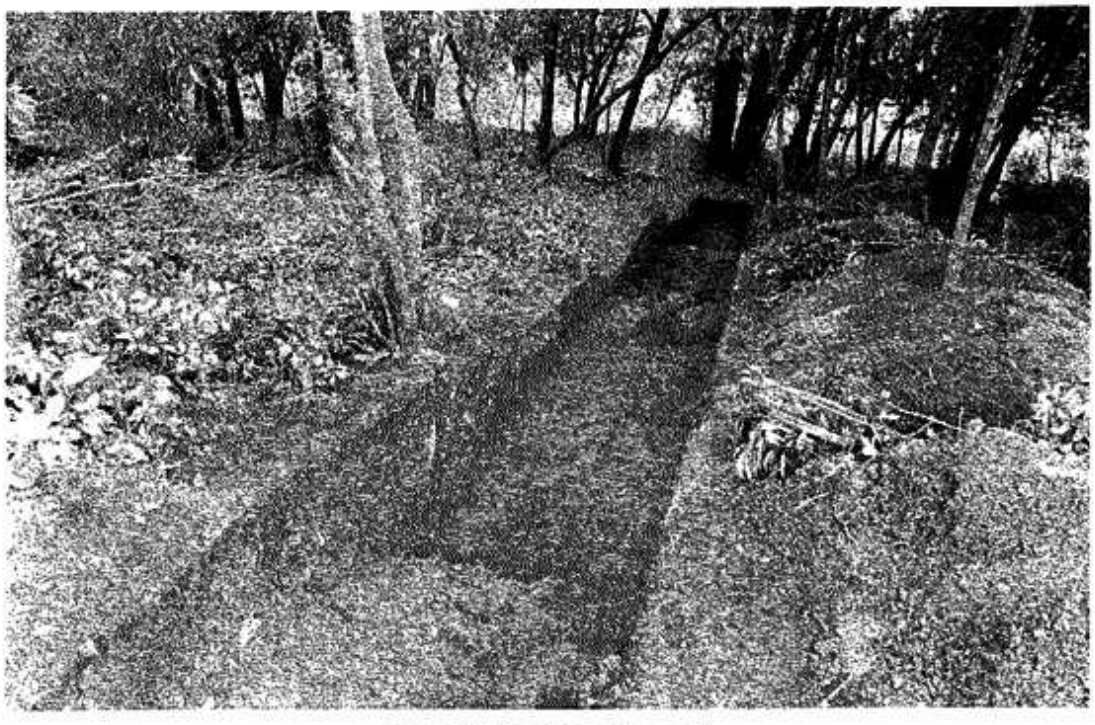


楢崎古墳遠景〈南東から〉

楢崎古墳近景〈北西から〉

図版32

楢崎古墳後円部東側

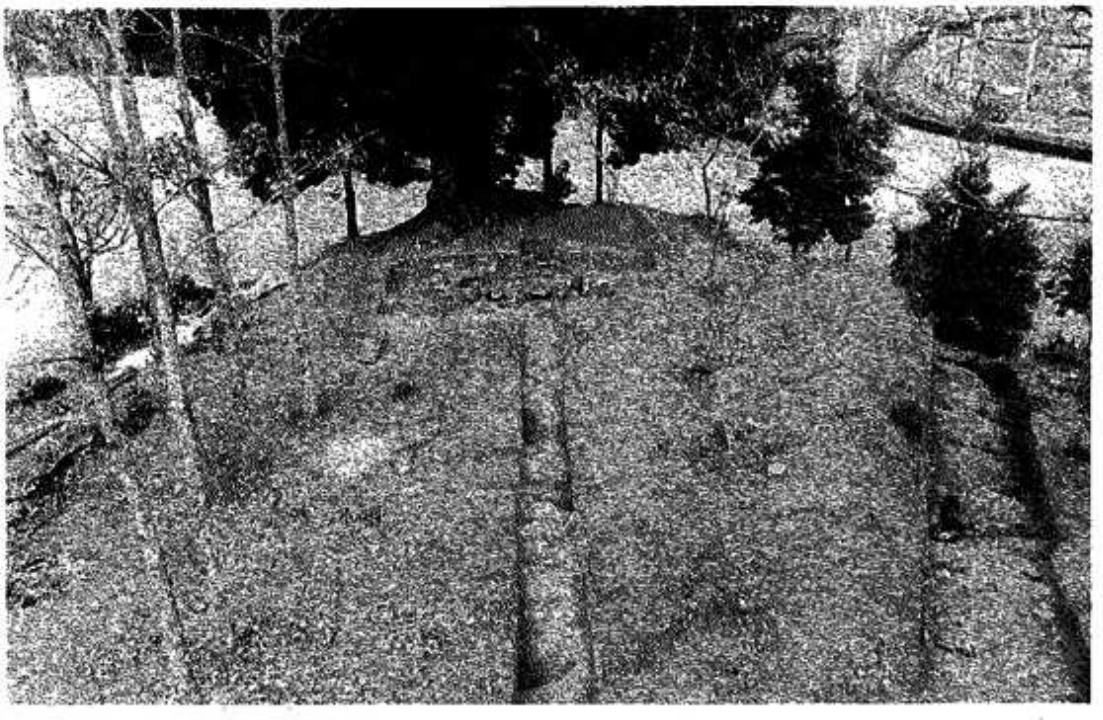


楢崎古墳後円部東側トレンチ

楢崎古墳後円部西側トレンチ

楢崎古墳後円部西側トレンチ

楢崎古墳前方部トレンチ



楢崎古墳前方部トレンチ

楢崎古墳東側くびれ部

楢崎古墳東側くびれ部トレンチ

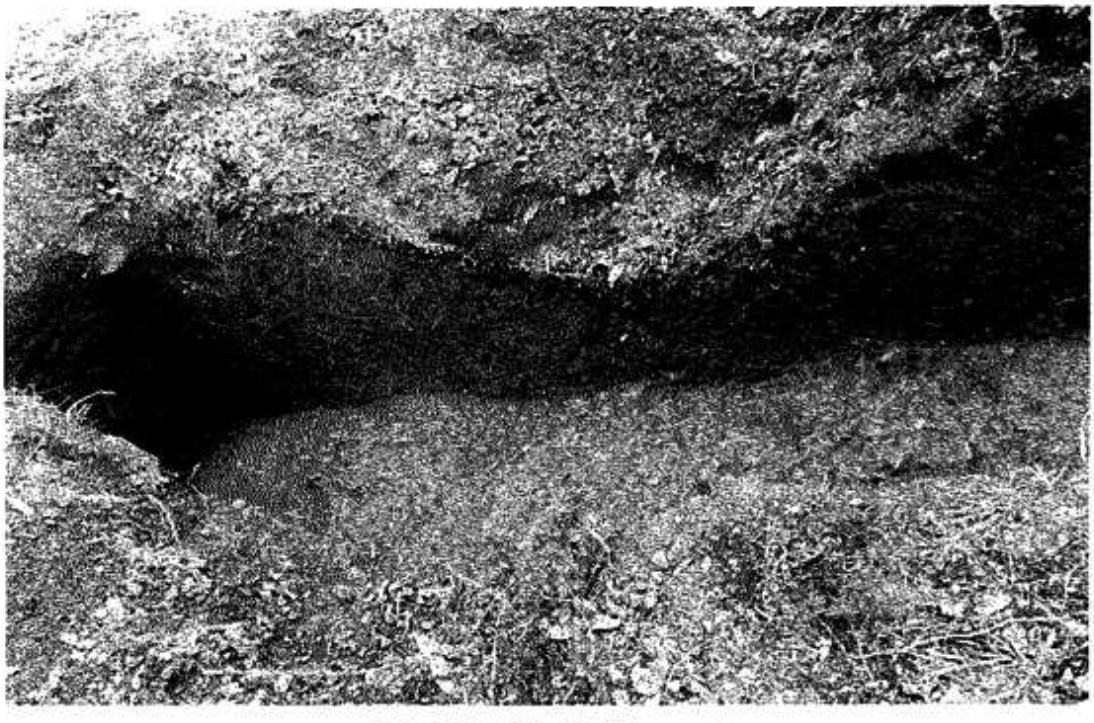
楢崎古墳西側くびれ部

楢崎古墳西側くびれ部トレンチ

楢崎古墳西側くびれ部

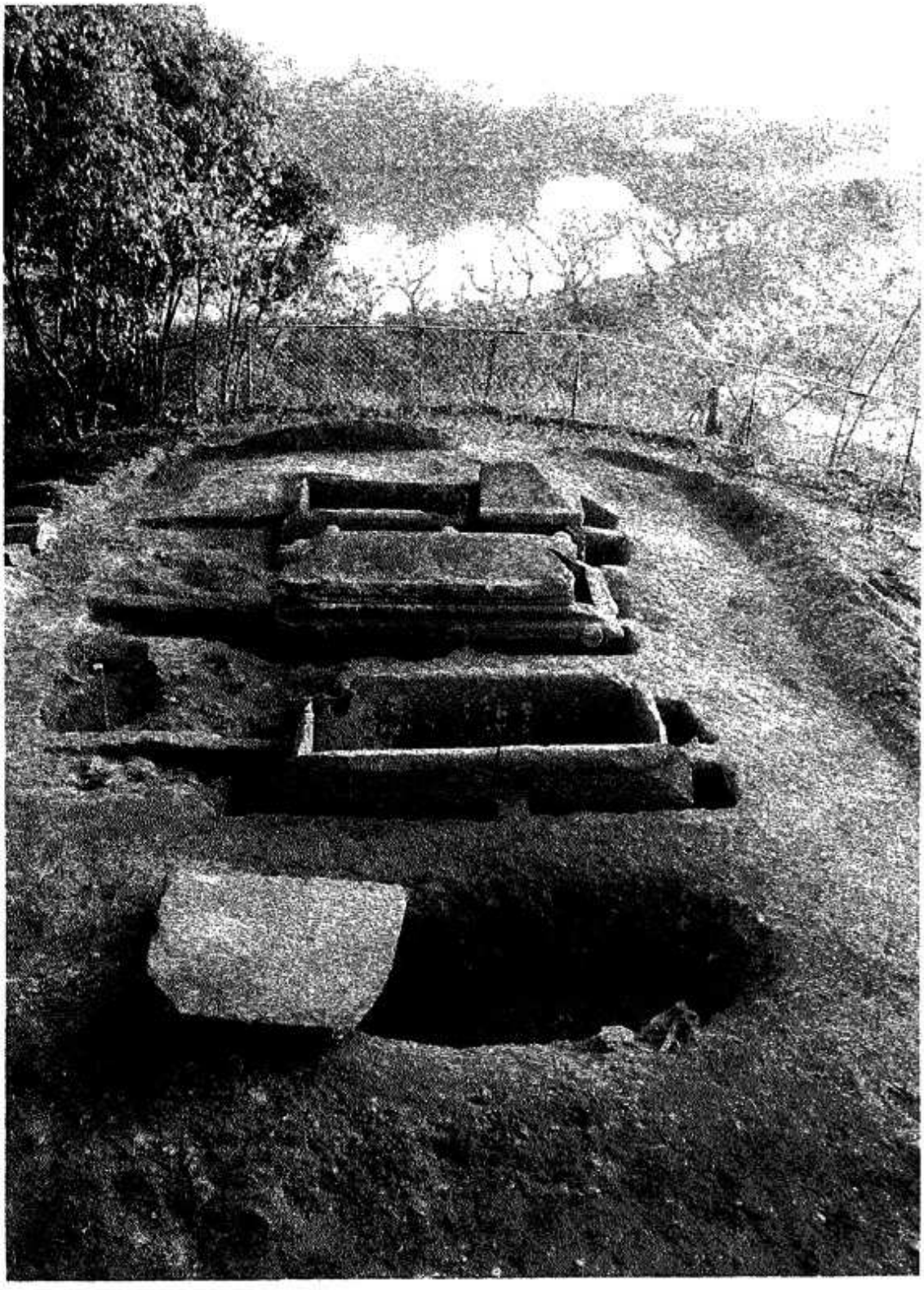
楢崎古墳西側くびれ部トレンチ

楢崎古墳西側くびれ部トレンチ



楢崎古墳西側くびれ部トレンチ

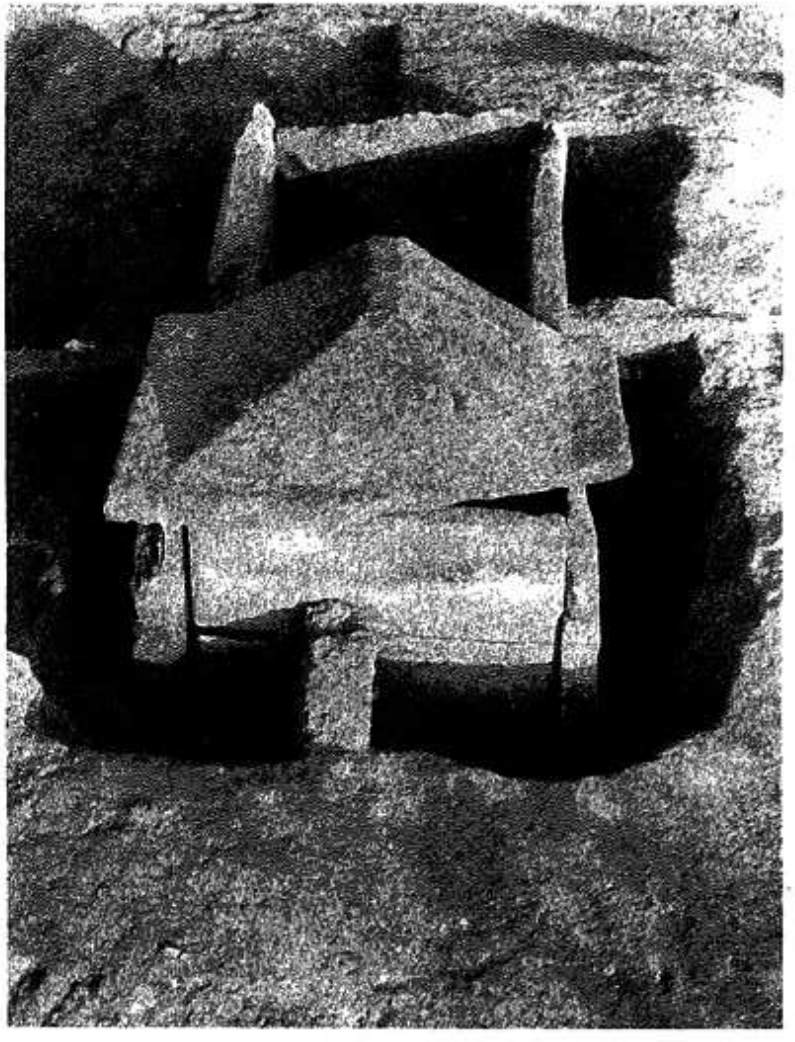
楯崎古墳１～４号棺〈南から〉



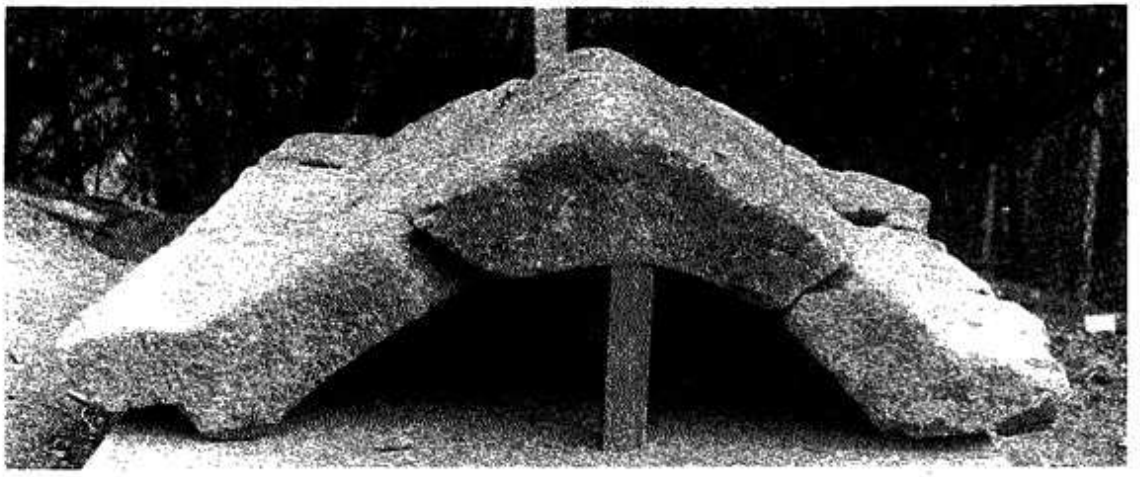
植崎古墳1～4号棺〈北から〉

楢崎古墳１～４号棺〈北西から〉

楢崎古墳１号棺棺蓋

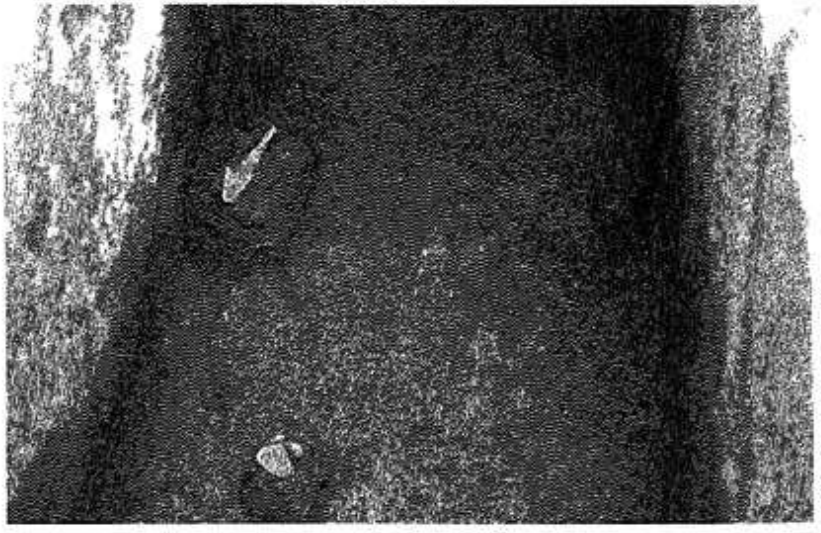


楢崎古墳１号棺〈西から〉

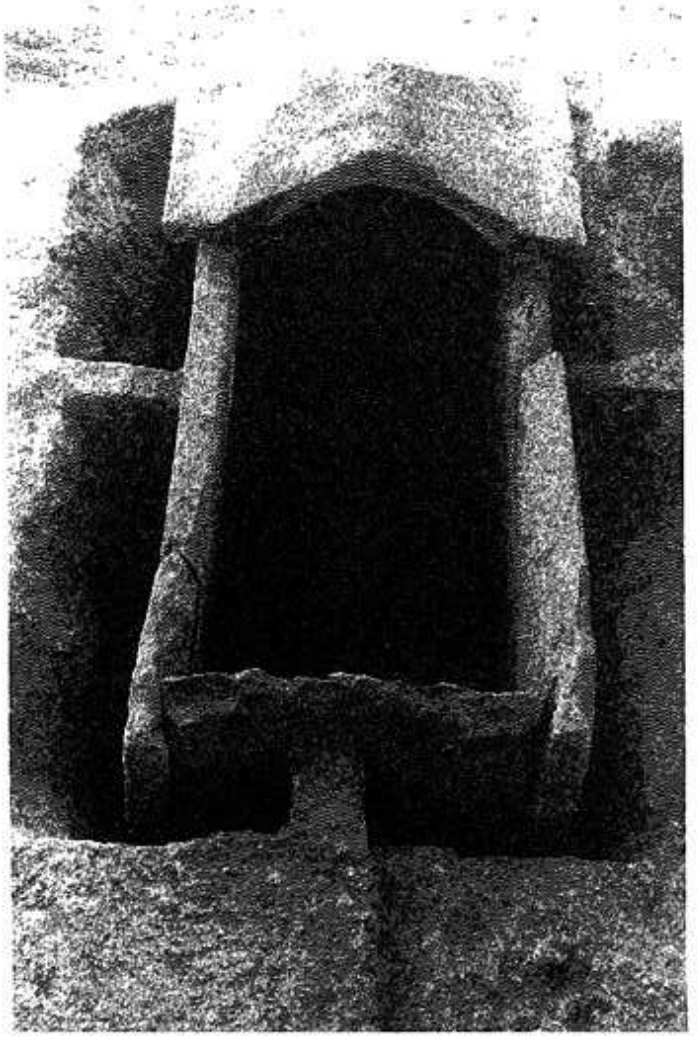


楢崎古墳１号棺棺蓋

楢崎古墳１号棺棺蓋



稲崎古墳１号棺遺物出土状態

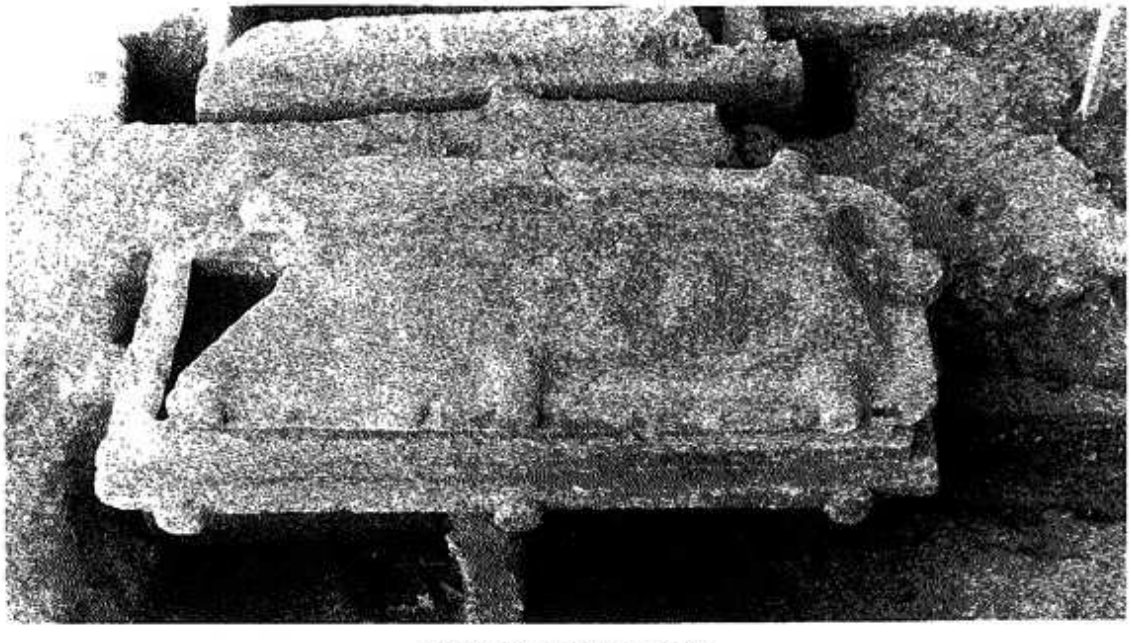


稲崎古墳１号棺〈東から〉

楢崎古墳２号棺〈東から〉

楢崎古墳２号棺〈西から〉

楢崎古墳２号棺〈北から〉



楢崎古墳２号棺〈南から〉

楢崎古墳２号棺〈南東から〉

楢崎古墳２号棺棺蓋〈東から〉

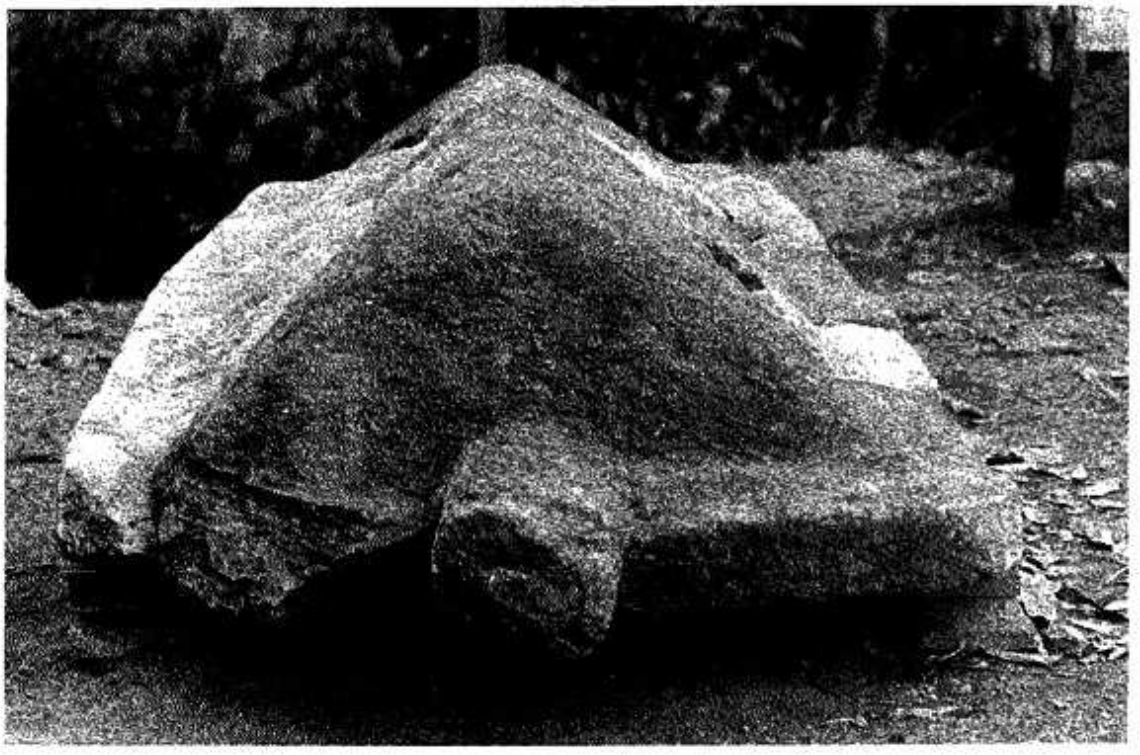
楢崎古墳２号棺棺身〈東から〉

楯崎古墳３号棺〈東から〉

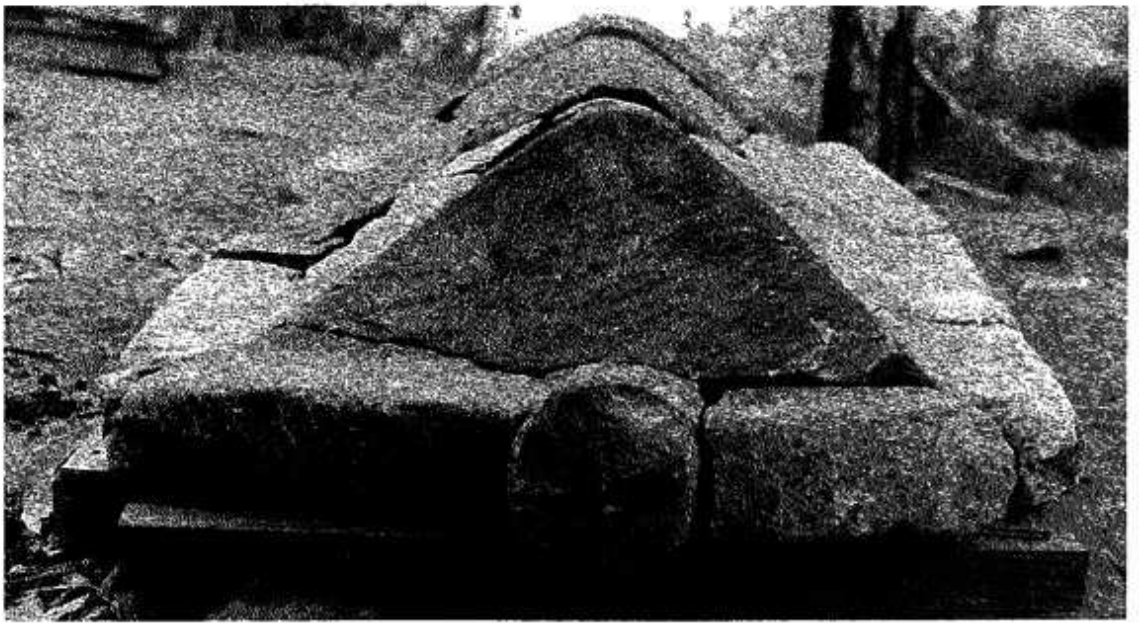
楯崎古墳３号棺〈東から〉

楢崎古墳３号棺棺蓋

楢崎古墳３号棺棺蓋



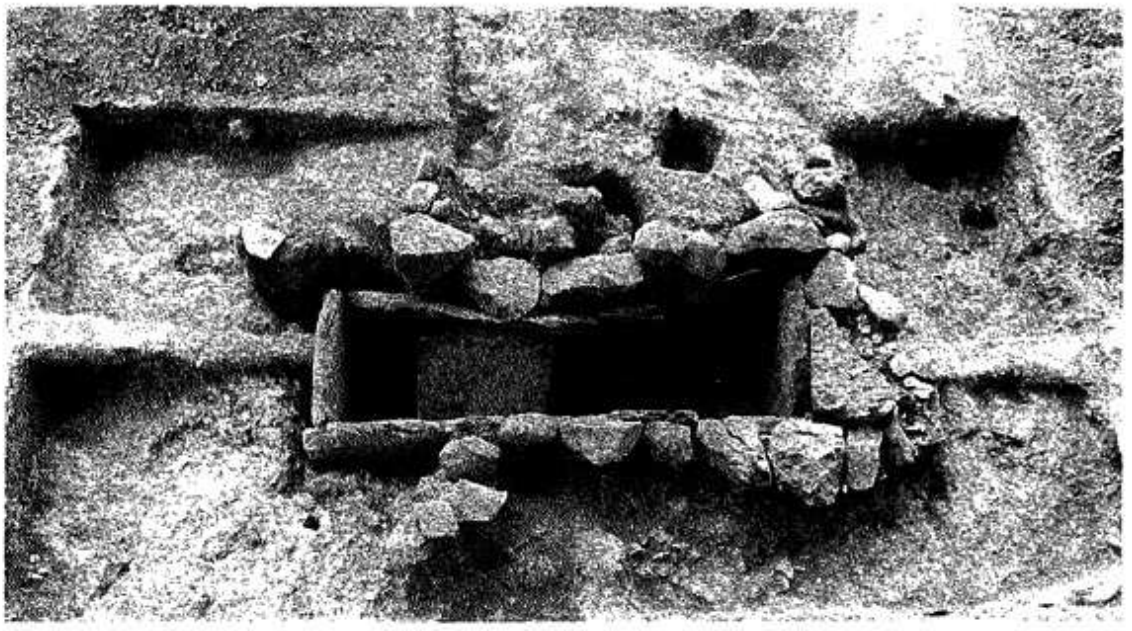
楯崎古墳３号棺棺蓋



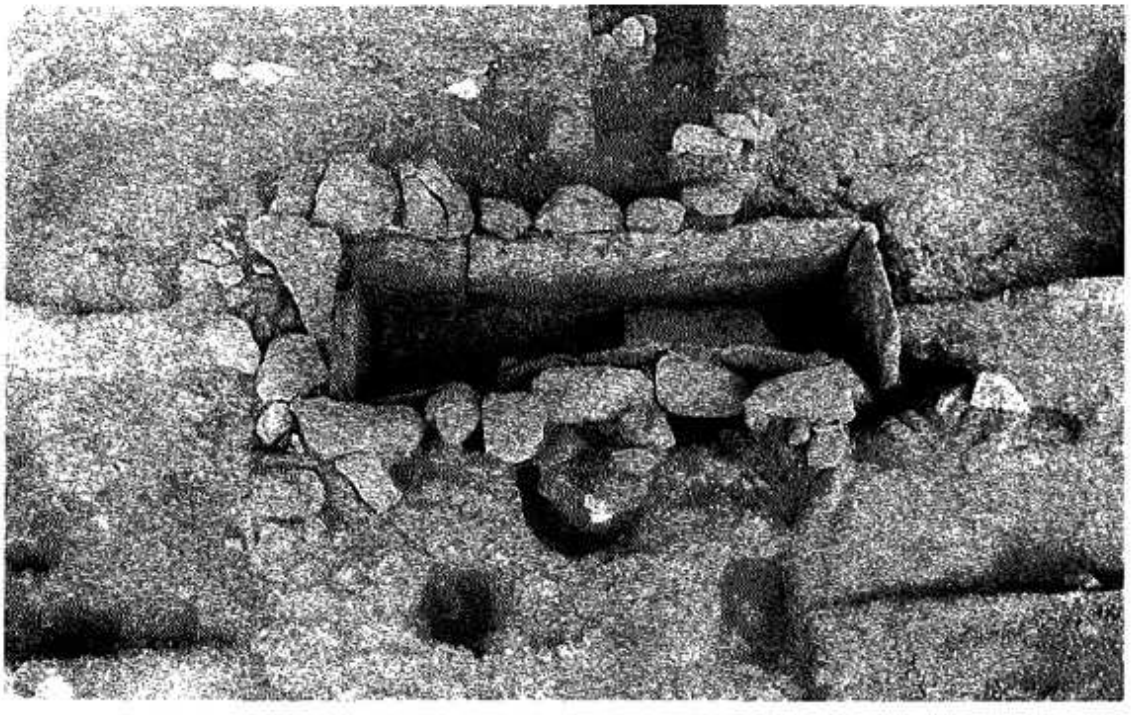
楯崎古墳３号棺棺蓋

楯崎古墳４号棺棺蓋

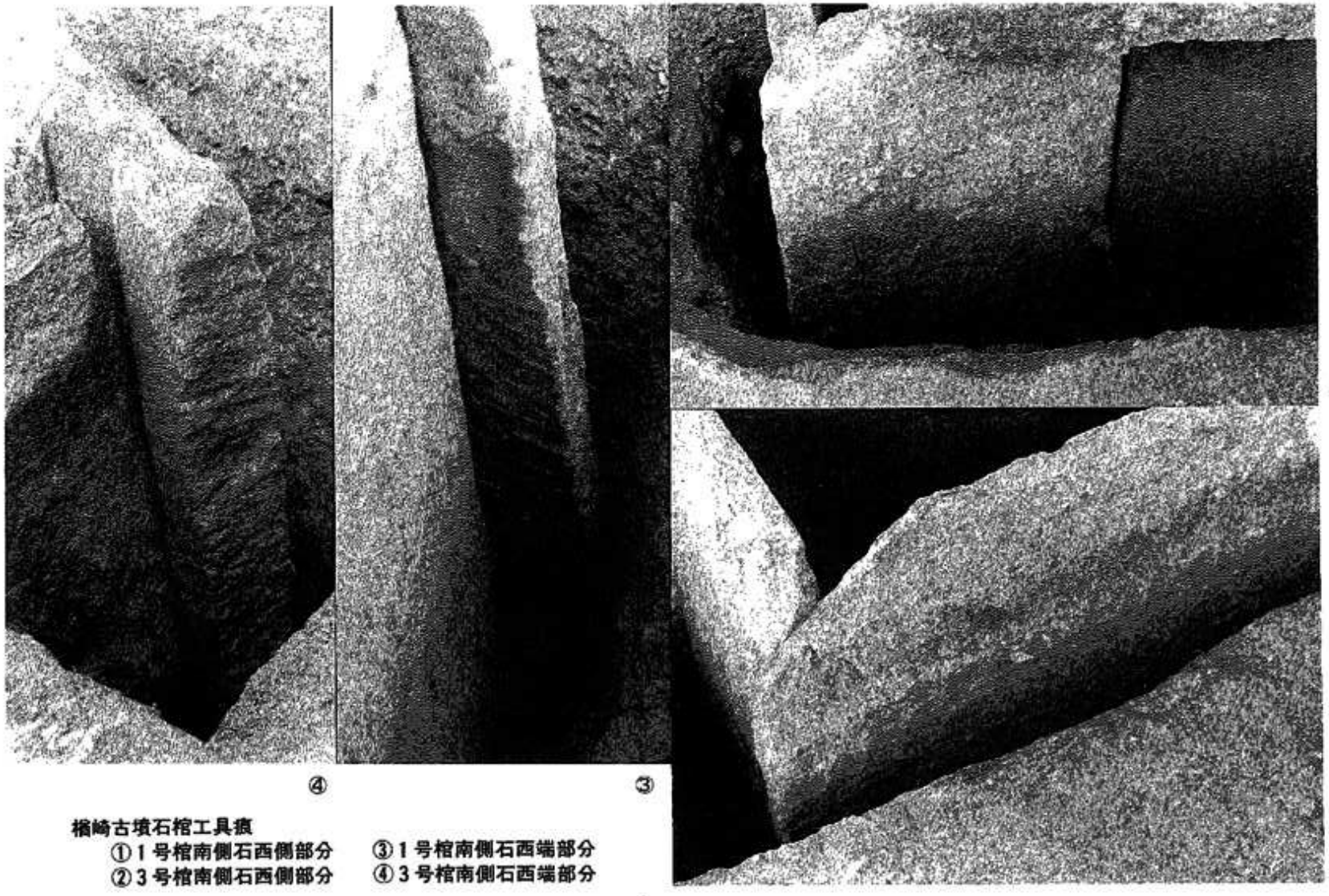
楯崎古墳４号棺〈西から〉



楢崎古墳5号棺〈北から〉



楢崎古墳5号棺〈南から〉



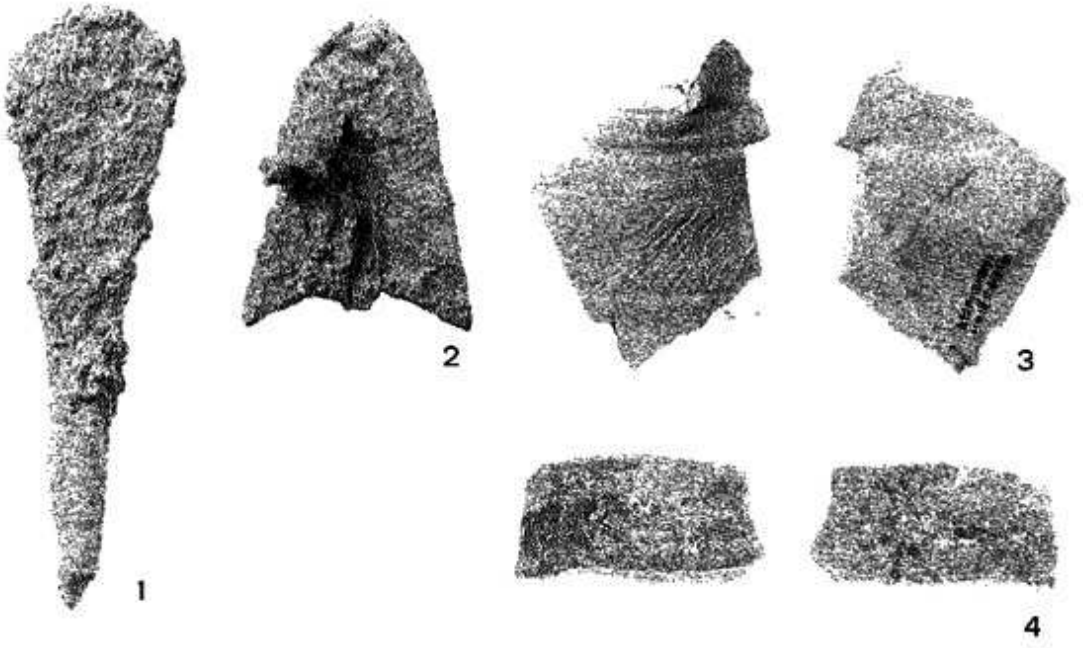
橋崎古墳石棺工具痕

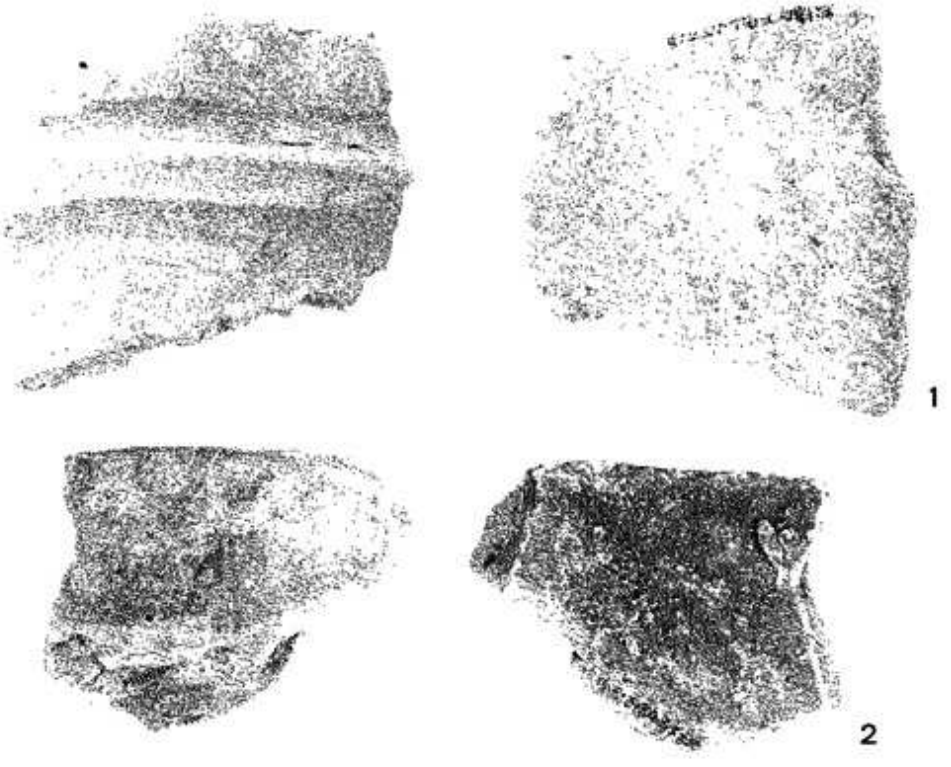
①1号棺南側石西側部分　③1号棺南側石西端部分
②3号棺南側石西側部分　④3号棺南側石西端部分

図版54

山下古墳遠景

山下古墳近景





楯崎古墳出土・周辺採集遺物（鉄器は約2/3 土器は約1/2）

ヤンボシ塚古墳・楢崎古墳

宇土半島基部古墳群分布調査報告（V）
宇土市埋蔵文化財調査報告書第13集

昭和61年3月31日

発　行　　宇土市教育委員会
　　熊本県宇土市浦田町51番地
印　刷　　㈲ 下田印刷